

524  
326

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





15.12.23



日本海峽私記

後序





外島  
南洋  
南洋  
南洋

南洋  
南洋  
南洋  
南洋

乞  
叱  
正

南洋  
南洋  
南洋  
南洋

大正  
15. 9. 20  
内交



目次

緒言	一
一、戦前に於ける日露の関係	四
二、波艦隊の東航	一三
三、旅順の陥落	一九
四、カムラン灣事件	二九
五、一日千秋の思ひ	三五
六、日本艦隊の軍議	四四
七、波艦隊の軍議	五五
八、彼我艦隊の組織	六二
九、會戰準備	七四
十、彼我主力艦隊の戦況	九二
十一、彼我補助艦隊の戦況	一二三
十二、夜襲戦の奇功	一二五
十三、追撃戦の獲物	一三一
十四、凱旋	一三九

校本を印刷するの趣旨

若し我が國の歴史から蒙古來の擊攘、豊大閣の征韓、又は楠家の誠忠、或は四十七士の義氣等を取除いたら、如何に精采を缺き、如何に寂寞を感じるであらうか、此等の事蹟は眞に生きた國寶で、後代の世道人心を薰化した効果は決して少々でない。

云ふまでもなく日本海々戦は、之等を一纏めにしたより更に大なる國家の至寶とすべきであるまいか。之を全世界の歴史上に載せ、かく花々しい立派な勝利は空前である。従つて此の海戦の幾十種の記述があり、私も大抵讀んで見たが、皆一に事實を傳ふに執着して、恰も一片の報告書を見るが如く、乾燥無味の憾を免れぬ。正史を編む上に於て止むなきことであらうが、讀者には何さなく物足らぬ心地がする。

きくが如くんば日本外史は、史家からは批難もあり、著者自らもそれを認承してをる様である。併し同著者が、畢生の精力を費した日本





政記より廣く遍く歓迎せられ、世道人心を裨益したことは却つて政記より多い。著者が御贈位の恩典に浴したのも、彼にあらずして是にある様に聞いた。畢竟政記は史實に重きをおき、外史は感情を主として筆したからであらうとおもふ。私は我が歴史上の至寶たる日本海々戦を、此の方面から書いてくれる人はないかと、一書の出づることに翹首して、これを購讀したが、戦後六年後に始めて出た、水野廣徳氏の著の外、一つも得る所がなかつた。近時小笠原大將執筆の東郷元帥詳傳は、事實に於ても行文に於ても此の種の威權であるが、此れは日本海々戦を専らとして書かれたものではない。

私に當時國民の一人として感想を主とした日記がある。後これに公報の戦況を加へて、子孫に遺したい爲めに、漢文直譯体を取纏めた。これは少しく文字の素養ある人でなければ、解しがたい点もあるから、一人も多く讀んで貰ひ、即ち家々之を備へ人々之を讀むには、講談体に限ると思つて、此の感慨更に新なる二十周年に遇ひ、急に書き改めて此の校本を脱稿した。

遺憾な事には私は此の海戦に直接些の關係もなかつたし、又私は文

筆を専修とするものでもないから、文章が素より此の大海戦を記するに足るものは一つもない、甚だ僭越の至りて、こんな野心を起すのは無謀の至りであることは自覺してをるが、又當時の感想を回顧し一片耿々の心、止むに止まれぬものがあつて、不文を顧みるの暇なく敢て此の校本を活字に附し、諸彦の机邊に捧げることにした。此の校本は上欄外に餘白を存しておくから、當時從軍の諸勇士は、躬行せられたる事實の相違、貴要事件の脱漏、殊に勇壯の勳功、熱烈なる行動等を訂正補足していたゞきたい。

又現時文壇に勇視せらるゝの士は、行文の澁滯を刪正潤色せられ、これをして國民上下一般の好讀物たらしめんここに、力を添へられんことを切望する。此れは眞に蟲のよいお願ひの様であるが、依りて以て世道人心を奮起せしめんとする微意を諒せられ、一擧手の勞を惜むなく、加筆を賜はり返送せられんことを乞ふ。訂正補修し定稿を得た後。著者終局の目的としては、彼我諸艦隊の進航變針より、戦時艦中の實況を活動寫眞として、絶へず全國都鄙を巡回し、每五六年位に同一地方に開會し、中學生或は小學校を卒へた生徒、即ち今後新國民た



らんとする者に、一回づ、必ずこれを聴講せしめ、彼等の新鮮なる腦裡に國事思想、海軍思想を附植したいこと、思ふ。此等を附植するには此れに勝す手段はないこと、信ずる。故に謹んで諸彦に御賛助を仰ぐ次第である。

大正十五年五月二十七日  
日本海々戦二十週年記念日

竹堂 美甘光太郎

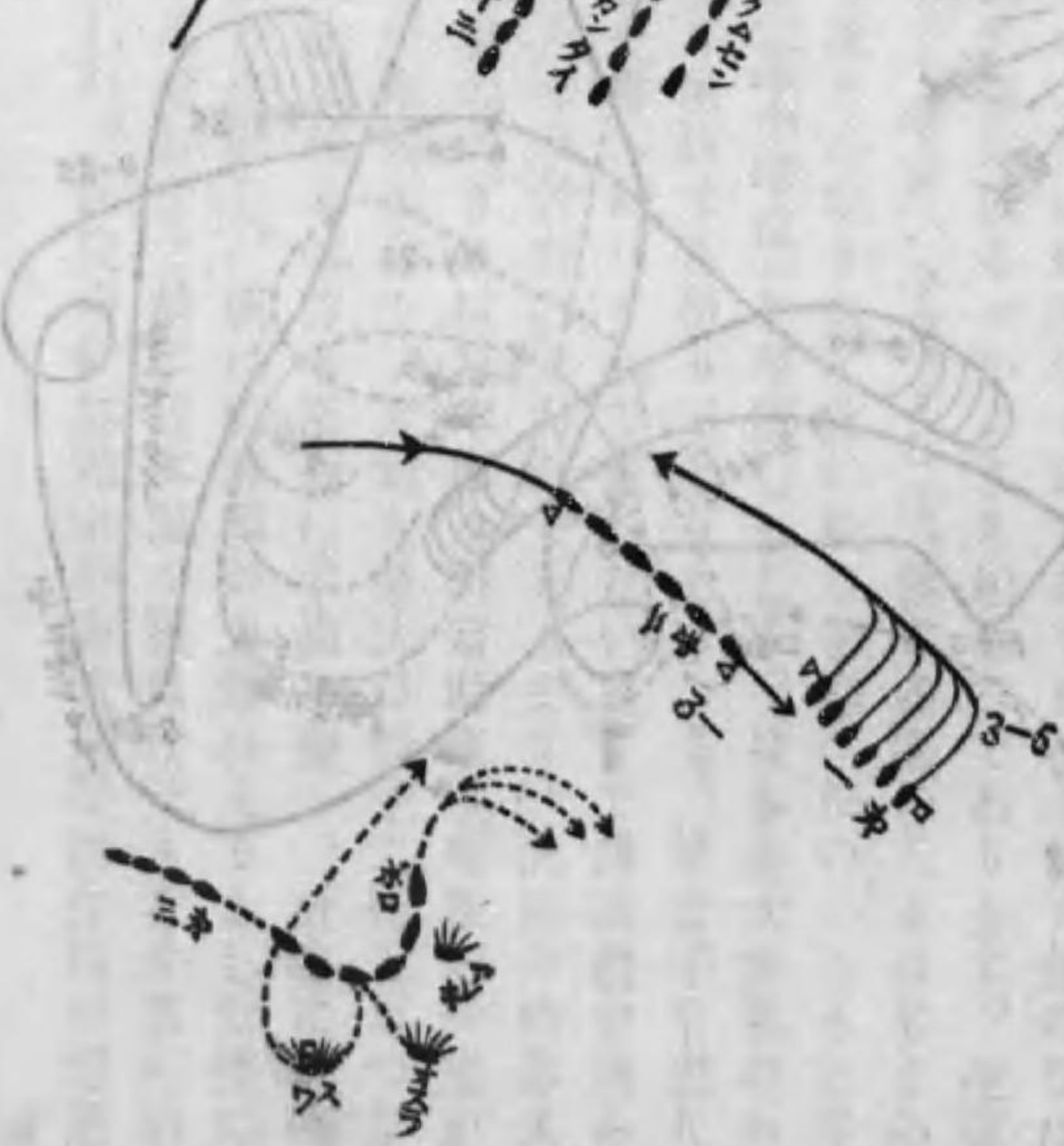
謹で白す

將ニ開戦セントスル時ノ對勢

敵ハ單縱陣ヲ作ラントシ、我ハ順次廻頭シテ  
丁字陣法ヲトラントス。

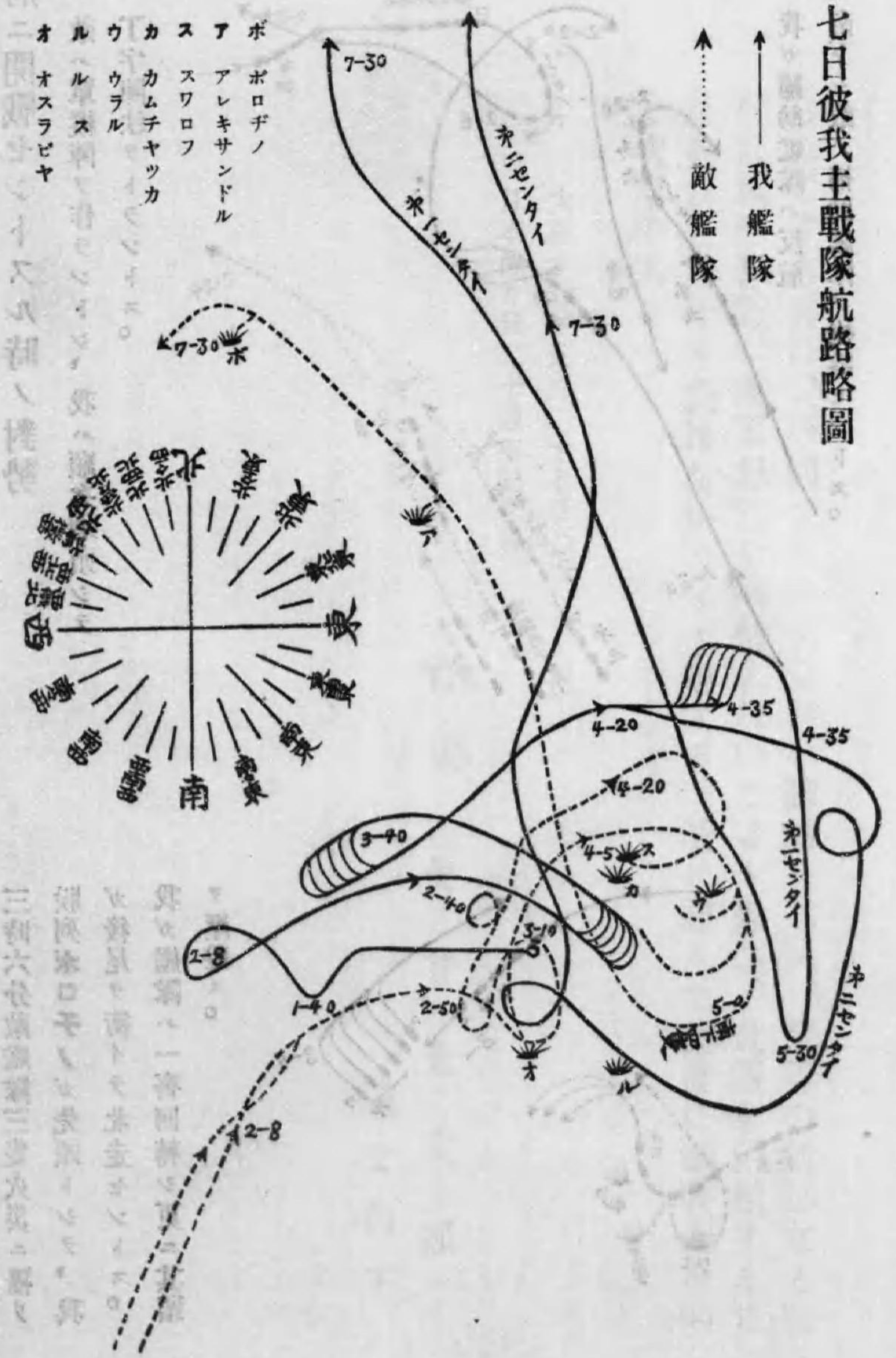


三時六分敵艦隊三隻火災ニ罹リ  
隊列ボロチノガ先頭トシテ、我  
ガ後尾ヲ衝イテ北走セントス。  
我が艦隊ハ一齊回轉シ更ニ其頭  
ヲ壓撃ス。





廿七日彼我主戰隊航路略圖



臥薪嘗膽 國の讐

琅玕軒清風口演

諸君よ。本日即ち此の五月二十七日といふ日は如何なる日でありませうか。此の日は世界歴史といふもの、存在する限りは終天極地忘るべからざる記念日であります。生徒諸君は多く御存知ありますまいが、今より二十年前の今月今日は、世界各国の人々は多くの興感を感じて、吾々日本人は非常なる感慨と深き心配を以て此の数日を迎へたのであります。抑て諸君、今日より三日間此の御講堂(某中學校)を拜借しまして、日本海大戦のお話を致すことになりました。此れは速記して出版する積りでありますから、婦女子や老人にも分りよく、一人も多く読んで國家思想を養ふ助けとして貰ひたい考えで講談體を選びました。申すまでもなく日本海々戦は世界古今未曾有の大戦であります。此度の世界大戦中には製艦術が進んで居りますから、艦船の大きさは日本海々戦當時より噸數が一隻が丁度倍位、即ち一万五千噸であつたものが三万噸となり、大砲も最大口径十二吋であつたものが十六吋になりましたが、日本海々戦に敵も味方も準備に準備を整へ、計略に計略を廻らし秘術を盡して、恰も両勇士が御前仕合をし、或は両横綱が土俵に上りました様に、眞に乾坤を一擲に賭した會戦はありませんでした。故に日本海々戦は今でも古今唯一の大戦で、敵味方妙術を極めた戦でありました。此度の世界戦争の海戦は唯出合頭の遭遇戦





に過ぎません。校長や教員方は當時皆壯年以上でおありでしたから、或は實際自ら此の戦争にお盡しになつた方や、或は近親に御従事なされた方があるに違ひありませんが、直接に關係せられな方々でも、國民として喜んで、悲しんだり、心配したりしたことは今でもあり／＼としてお忘れになれんに相違ありません。又本日から聴いて下さる生徒諸君は、上級のお方でも御生れにもならなかつた時で、御父兄の物語りや雑誌などで、その一斑を知られた位のものでせうと思ひます。中學の國漢教科書にも、只海軍公報の抜き書位のもので數頁出て居る許りで、あれでは此の海戦の面白味は少しもお分りになりません。私に云はせますと、日本海々戦の原因や、作戦々況の一般位は海國男子としては是非知つて置かねば、此の海戦に従事した將卒に對しても義務が盡きたとは云へないことで、國民たる資格がないものと思ひます。此れに就て段々お話しして行かうと思ひますが、私は講演は極く不得手で、殊に前にも申上げる通り、成るべく通俗にと講談體にしませうと思ひますから、一層まづい變なものが出來上るでせう。が併し怎んなに料理人が下手でも、鮪の刺身やロースのすき焼は相當においしく食べられる様な譯で、材料が材料ですから一通り諸君の御満足を得られ様かと思ひます。又御断り申して置きますが、舊來の講談と云ひますと事實は二分か三分で誇張や虚構で満ちてをりますが、私の此の講談は此の点は大いに異りまして、皆儘かな事實據り所のある者許りであります。全く掛値のない正札つきのもので、只御愛嬌に數ヶ所に景品として餘興が添へてあります。此れは講談體として止むを得ませんが、それも全く虚構ではありません。皆其の時にあつた事實より拵り出したものであります。唯是等の材料を前後したり、取捨したりして按配したのが、料理人たる下手ではあります。私の手際であります。戦後十數種の出版物が出版して、私も大抵讀んで見

ましたが、或者は簡略に失し、或者は徒らに冗長で錯綜するのみで脈絡も分らず、何れも私の意に満ちませんでした。敵方の從軍者の記事は譯出せられたのが三種あり、略事狀も盡してゐる様ですが、我が國には只戦後六年を経て、始めて海軍少佐水野廣徳氏の「此一戦」が出て、漸く私の渴望を慰しましたが、此れは後の事でした。此れだけの好材料があつたら最う少し甘いものが書けさうなものであらうと、又一つには、私の子孫が成人した後、當時自ら見聞したこの國家の大變事につき、その先人が何か書いて残しておいて呉れたらどの恨みは必ず抱くでありません、それがさほど價値のないものでも、父祖の著述とすれば子孫を感奮せしめることは著しからうと思ひ立ち、日誌を種として諸新聞、雜誌を參考とし順序立て、記述し、一部に纏めたものがあります。前にも申し通り、私は此の海戦に直接に少しの關係をする身分でもなく、又運悪くそんな機會もよう得なないので、唯盛世の一逸民として當時の感想を主として筆を下し、「對日本海々戦感想録」と題したものが出來ました。國民としての感想を主とし、これに戦況を加へた者で漢文直譯體であります。此の稿本を先日不圖したことで校長の御覽を乞ふた所が、此れは非常に有益で此の海戦に付いての好著である。國民教育に大いに助けとなるであらうとの過褒に預り、且つ是非これを生徒に講演して貰ひたいと煽て上げられ、校長は中々煽て上げることが甘いですから、本日から恥をかきにくくに出ました次第であります。講談のことでありますから、「夙新國の誓」と改題して申述べることになりました。「武士道鼓吹」は古臭くなりましたから、新しくハイカラに「國家思想鼓吹」と肩書をして置きませう。講談もの、王と申しますと、云ふまでもなく復讐もので、皆さん御存知の通り先づ曾我物語・忠臣藏・伊賀越が三大仇討でせう。忠臣藏はつまりが白髮首が只一つ、又荒木が日本無双の勇者で劍術使ひで



あつたとしても、相手を切つたことがたつた十餘人に止ります。私が此れから申上げようと思ふのは國と國との遺恨警討ちで、戦費は相方では百億に近く、死傷も三十万といふ大戦争の眼目となつた日本海々戦ですから、先づ面白いに違ひないと思つて聽いて下さい。何れの講談でも、先づ遺恨を結ぶ成り立ちから申上げ、正味警討ちの場面は一番おしまひになります。愈々仇討ちの場となれば待たせた効もなく、ガチャ／＼ボタンで、あつけないものですが、私のは此の復讐戦の場面が大眼目で、我が國の方からは非常に勇壯で、敵の方からは悲絶慘絶で、敵の事ながら屢々涙が出る位です。頁數もこゝばかりに全冊子の七割を占めて居る位であります。下手の長口上は御退屈の元、初日から飽かれては大變ですから、末をお楽しみに愈々本文にとりかゝりませう。

#### 一、戦前に於ける日露の関係

先づ戦前に於ける我が國と露國の關係をあら／＼述べさせて下さい。此の恨みを結ぶ所がよくお分りになりませんと、復讐戦の甘味が分りませぬ。先づ忠臣蔵なれば兇検めから喧嘩場といふ所をさつと二三回述べませう。元はと云へば顔世御前とも云ふべき、朝鮮滿洲に露國が横戀慕をしたのが起りであります。歐洲諸國の中で我が國と一番領土が近接してをるのは露國で、従つて我が國はまだ外國の事情に疎い、外交とはどんなものか一向分らぬ時代から、色々の強壓を加へたのは露國でありました。最初の外交談判は樺太境界問題で、此れは露都で開かれました。我が使臣はチョン監二本棒で出掛けたといふ始末でしたが、此の人は非常な技倆で、佛や英の世界地圖を暗に袖裏にして居つたのみならず、露都博物館でも露の有する地圖を調べておいて、談判の席上で先方が持出した樺太全部露

の色彩となつたものを、此れを證據として言ひ破り、餘程有利に談判して歸りましたが。歸つて見れば留守は維新のごた／＼で一時中止となり、遂に彼の龐大なる五十度以南と些々たる千嶋の一系列と交換せねばならぬ羽目となつたのは、當時の狀勢止むことを得ぬことであつたとは云へ、我が國の不利は云ふ迄もありませんでした。

それから後も屢々東洋問題の起る毎に横車を押し、我が國民をして北方の強鷲と畏懼せしめたことは一度や二度に止まりませんでした。遂に明治二十四年五月十一日露國皇太子ニコラスが來遊せられたとき、(此の時は露國が未だ強勢の極にあつた時であります。今思ふと何の變もない様ですが、上下非常に心配狼狽したのも無理はありません。此の皇太子は何處迄も不運な人でありまして、後、帝位に就かれ日露戦争には敗北し、此の度の世界戦中革命軍の爲めに、遂にエカテレンホルグの一民家で一族と共に虐殺せられました。所謂大津事件なる事變を發生しました。是れは素より一巡查の暴舉に過ぎませんでした。又我が國は露國に對して積り積りし怨みのありましたことの一證にはなります。眞に晴天の霹靂で、我が國の上下を震撼したことは一方ではありませんでした。これは文明國として曲の我にあるは明かで、一言の言ひ譯もありませんから、畏れ多くも我が皇室の御憂慮も推し測り奉られた次第で、明治天皇陛下は翌十二日京都行幸を仰せ出され、常盤華園に親しくニコラス皇太子を御見舞ひ遊ばされました。此の報が露都に到りまして、大いに露國君民の情を融和したといふことでありました。此の時供奉の露人中には見るに堪へぬ禮を欠いた言行もあつた様に洩れ聞きました。

露國はビーター大帝以來の遺策として不凍港を近東に得んと、幾度企てましても歐洲諸國に妨げられ、數次のあの慘澹たるクリミア戦争となつたのですが、志を遂げることが出



來ませず、轉じてこれを東洋に求めんとして、支那及び朝鮮に向つて頻りに東方策を施さんどしました。朝鮮と我が國とは眞に唇齒輔車で、王仁以來同文同種で深く親密の關係にありました。近時交通が開け歐米との交渉が頻繁となりますに従ひ、我が國の利害に關することも一層切實となりました。が、朝鮮は國礎確立しませず、只事大を主とし、或は支那の半屬國の如く、時としては露國の隨使に甘んじ、丁度日本といふ大紡績工場の隣地に防火の準備も衛生の設備もない火藥工場のある様なもので、一朝事あればそれが導火線となつて、我が大工場の危急存亡に關するといふ有様でありました。故に我が政府は屢々忠告もしたり助言もしたり、世界に向つて其の獨立を宣言もしたり、種々保護しましたが、韓人は我が國の隆運を見まして一種の猜疑心を生じ、兎角我が國に信賴しません。世界の注視が東方に注ぐことが深くなるに従ひ、我が國人は一日も枕を高くすることは出来ない有様となりました。朝鮮には上下とも古くより事大思想が浸透してをり、露或は清は頻りにこれに乗せんとし、種々巧みな手段を逞うして居ります。然れども露は素より清國といふても、地勢上利害關係が我が國の様に切實ではありません。我が國はもし一朝朝鮮が他國の爲めに亡ぼされたとすれば、丁度門扉を去つた家屋の如く國防を全うすることは出来ません。況んやこれに清或は露をして據らしめるのは、眞に自分の臥榻の下に他人の鼯聲を聞くと同様な始末で、とても我慢が出来ません。これが明治二十七八年戰役の、止めようとしても止めることの出来な原因でありまして、數億萬の國帑と數萬人の兵員を犠牲とした所以であります。

此の勝利の爲めには我が國はどんな犠牲を拂つたでせうか。飢える妻子や病める老親を後に見捨て、國家の爲めに勇ましく出征戰死し、寡婦・孤兒を残しましたことが幾万人

でしたか。併し立派なる戰勝を收め清廷とは満足なる馬關條約を結び、遼東半島も割讓せしめました。所が所謂三國干涉なるものが突發して寢耳に水の如く、當時廣島にありし大本營を震撼し、我が五千萬人をして眞に血の涙を絞らしめました。三國とは露・獨・佛で其の發頭人は露帝だとも云ひますが、此度世界戰爭の發頭人のカイゼルが、暗に露帝を諷したとの噂もありました。天罰觀面では今は廣い世界に身の置きどころもない哀れな一人となつて居ます。佛はほんの御附合ひ位な様子でありました。其の言ひ分は、遼東半島を日本が領有するは東洋の平和に害があるを認め、清國に返したがよからう、若しも日本がこれに應せねば止むなく我々三國は、干戈に訴へても干涉する覺悟である。諾ども否ども何日間に確たる返事が欲しい。と、三國所屬の東洋艦隊を集合し盛んに威嚇しました、何んにも東洋のことに關して深く西歐人の顧慮を要する譯はない筈であります。若しも我々が英人に向つて、英國がデブラルタルを占領するは歐洲の平和に、露がセバストポールを守るは中亞の平和に害があると認めるから、これを放棄せよと迫つたら、英・露は何んど返事をするでありませんか。理に於てはこれと少しも異つた所はありませんが、實際のことは理屈も條理もあつたものではありません、つまり強いもの勝ちの弱いもの虐めであります。我が國は大兵を動かした後ではありますし、國力も疲れてをつて、とても三國聯合の兵に當る見込は立ちませんでしたから、廣島の御前會議に於てもこれを容るゝの外なしと決せられました。

當時陸奥外務大臣は病中馬關講和談判に折衝せられ、日夜多忙と心勞の爲めに病勢が進んだ様子でありましたが、談判も思ふ通りに結着して先づ一安心と、京都まで歸つて静養せられてをりました。一日大本營より長い電報が達しました。此の日は餘程容体も悪るか



つたし、此の電報では國事に何事か心配事があるかも知れぬ、此の上に心勞をかけてはど令夫人もよほど心配せられ、醫師とも相談して藥など進めた上で、何時迄も隠す譯には行かぬからこれを出された。それを讀まれた時は、手先が顫へて蒼ざめてをつた顔にサツと血が上り、赤くなつて兀奮せられ、きかぬ体を無理に起さうとせられ、「駐外公使は一体何をして居るのぢや」と煩悶せられたといふことです。實に無理からぬことでありませう。

翌日陸奥伯の枕元に伊藤公・松方侯・西郷侯・樺山伯など列んで色々相談せられました。何分今となつては後手を踏んでどうすることも出来ません。それでも流石刺刀大臣で、轉んでも只は起きない手腕で、國家の体面を言ひ立て、馬關條約は一旦批准せしめ、日本の厚意を以て清國に還附すること三國の了解を求め、又これに對して清國より別に償金二千万圓を増求することに一決し、其の使臣としては伊藤公が、當時失意の境にあつた伊東已代治男を推舉せられた。此れは男が一世一代の花役で、又能く使命を恥かしめられなうのでありませう。此の際露・佛は我が國には未だ一隻もなかつた新式の甲鐵艦數隻を長崎に碇泊せしめ、俄かに戦時の色彩に塗り替へたり、何時でも出港する様に晝夜盛んに石炭を焚いたり。伊東全權委員長が批准書を携へて其の交換地と定めた芝罘に向はれませう。期に先だつ五日即ち五月三日晝長崎を發して遼東灣に入りました。

伊東委員長は一旦旅順に入り、それから芝罘に向はれました。かゝる際本來なれば我が國の軍艦を用ゐらるゝ筈ですが、軍艦を用ゐて萬に一端を生じてはどの遠慮より、一商船に乗じて出かけられました。此れも平和の爲めには止むを得ません事情もあつたでありませうが、國威に關することがないとも云はれません。我が國民中にもこれを聞いて要らぬ遠慮であると奮慨したものでありましたが、これは要らぬ遠慮ではなかつたので、若し

軍艦でありましたらば、どんな變事が起つたか分りませんでした。委員長此の注意があつたからこそ、我が國をして判官たるの慘めさを免れしめて、若狹之助たるの安泰を得せしめたのでありませう。

伊東委員長が芝罘に入られたときに、英米の軍艦は禮砲を發してこれを祝しました。此れはかゝる際國際禮法の慣例でありますにも拘はらず、三國の軍艦は委員長の乗船に禮砲を發せざるのみならず、無禮至極にもこれを取り巻き、列國環視の中で砲門を開いて乗船の方に向けました。此れを個人としますれば、丁度衆人満座の中で嘲罵せられ剩つさへ其の面に唾きせられたに等しい恥辱であります。判官ならでも己れ師直と一喝せねばならぬ所であります、判官は短刀を帯びて居りましたが、悲しいことには商船には一臺の砲座もありません。若し此れが軍艦でありましたら、此の無禮に對して大和魂の日本水兵、上官の制止も聞かばこそ、屹度發砲したものがあつたに違ひありません。果してさうなつたらば、國際間に如何なる變事が生じて居りましたか測り知られませぬ。或は我が國は一度は判官の様に切腹をせねばならん立場になつたかも知りませぬ。忍ぶべからざるを忍んだのは、只國家を重しとせられたので、我も人も口にくそ出して云はざれ「己れ今に見よ」との一語は、深く心肝に銘じて忘れられなうのであります。誰云ふとなく臥薪嘗膽の四字が國民の腦裡に深く印刻せられ、筆にも口にも盛んに用ゐらるゝ様になりました。

猶一層我が國民の熱血を沸騰せしめましたは、我れに兵力強壓を以て迫り、清國に返還せしめた遼東半島を、期年ならずしめて露國は濡れ手に粟で二十五年間これを租借し、旅順は軍港として盛んに砲臺を築き、最新式の巨砲を備へ、大連は商港としてガルニールと改稱し着々設備を完成し、此の一商港に一時に一億以上を投じたに證しても、其の意の少



々ならんことが知られます。ハルビン市を大市場とし、事ある日の兵站本部の準備をなし、當時已に歐亞を一貫したる西比利鐵道を段々完全にし、自由に支線を南滿に延長し、多數の兵員を滿洲に駐屯せしめ、極東總督府を旅順に新設し、惡辣極まる手腕家アレキシーフを總督に任じ、兵馬の權までこれに委ね、さなきだに事大主義なる韓の宮廷に其の勢力を扶植し、眞に滿洲より朝鮮に至る一木一草も、露國の風に靡かぬものはないといふ有様になりました。

日清戦争は何の爲めに起したのですか。韓國を清の覇權から脱せしむるのが主眼ではありませんか、此の有様を見ては我が國も黙止することは出来ません。英・米の贊助を得て屢々折衝の上露國に迫り、漸く其の撤兵を誓言せしめました。露國は三國干涉の成功以來、飽迄我が國を輕蔑つて、撤兵の期日が來ても言を左右に托して撤兵しない許りでなく、却つて益々増兵の事實がありました。加ふるに東洋艦隊を銳意増遣し、殊に新式の堅艦を撰抜して來航せしめました。我が國より違約を責めれば責むるほど戰備を整へ、餘りと云へば傍若無人の振舞ひに、重ねての遺恨は勘忍強し我が五千萬人の心根に徹し、明治三十七年二月に至り、遂に十年間寢た間も忘れず研ぎ澄ました一劍を抜いて立たしめました。露國は此の戰によりて其の東方計畫の大意を成し遂げんとし、我が國は又多年の遺恨と國家の存亡を賭しての戰で、海陸ともに未曾有の大戦となつたのであります。利劍一たび鞘を脱するや、恰も弦を離れた箭の如く、一往邁進攻勢を取りました。マサカ此の小嶋國人がと侮り切つて居つた露人には、慥かに寢耳に水音を聞いた感がありました。江戶兒は喧嘩をして貴様の頬邊を擲るぞと、前觸れをして手を上げる奴はありません。國交斷絶は即ち宣戰です。

仁川沖の一發は世界を驚かしました。豫て露國の横暴を心惡く思ひし世界各國人の同情は、多く健氣にも立ち上りし我が國に歸しましたが、又暗に我が國が露國の敵でないことを覺束なりました。が戰を開いて見れば豫て陸軍では世界一を以て自らも許し、世界からも認められた露國が、意外にも連戰連敗、豫定の退却々々で、遼陽こそはと世人も露人も望みを囑して居つたが、これも數日を持ち耐へず、鯨は遂に鯨にしてやられる状態となりました。その意外の結果に露國も愈々禪を締め直して、國を擧げて必勝を期し、奉天の戰を作戦しました。我が國も全力をこれに注ぎましたに無理はありません。奉天の戰は戦線五十哩以上に互りまして、相方合すれば眞に百萬人以上の軍勢を對抗せしめたのであります。よく歴史や軍談に何十萬の軍など、書いてありますが、アレハ餘程掛價があつて、風袋が重く、無論實數ではありませんが、此の奉天の戰は實數百萬以上に達したので大したものでありました。

海軍の方はどうかといひますと、敵は主に旅順に據りまして、一支隊を浦塩に置き、また此れを第一太平洋艦隊と稱して、開戰の當時には艦種優秀で勢力遙かに我が上に出ました。我が軍は愈々と臍を固めれば一分の猶豫もありません。準備は昨冬から整へてをりますし、將士の氣は張切つてをりますし。愈々二月六日には東郷司令長官は旗艦三笠に座乗せられ、白波を蹴つて佐世保を抜錨し旅順港に向ひ、一支隊をして仁川に向はしめられ、同港にあつたワリク・マレーツの二艦を一撃の下に撃ち沈めしめられました。爾來裏長山列嶋を根據地として旅順港口を封鎖し、我が陸軍の輸送を安全ならしめられました。二回迄も海戰史上に勇壯無比とせられた旅順港口の閉鎖の壯舉となり、軍神と謳はれし廣瀬



中佐も、部下杉野兵曹長を助けんが爲めに、一塊の肉片を残して遂に戦死せられた次第でありました。

如何に傲慢なりし露人も連戦連敗で、陸に於ては最早や我が敵でないと言つて見え、唯一勝戦の道としては制海権を得て、我が陸軍の後方を遮断する外なしと看破し、重きを海軍に囑し、頻りにこれを刺戟しましたが、海軍も亦我が艦隊の爲めに旅順港内に逐ひ込まれ、時々港口附近を游弋するのみで大なる活動も出来ぬ間に、その司令長官マカロフ大將は、我が附設水雷にかゝり旗艦と共に憐れ水底の藻屑と消えたのであります。屢々浦塩に逃げ込まんと企てましたが、何時も我が艦隊に妨げられ、猫に逐はれし鼠の如く、旅順口といふ穴の中に引き込む外なかつたのであります。其の内に旅順の背面攻撃は頓に進捗して、最早や陥落は時日の問題となりました。

旅順が一たび陥れば、露國の君民唯一の頼りとしてゐる第一太平洋艦隊は自滅する外はありません。露帝憂慮措くところを知らずといふ有様で、遂に本國波艦隊中の精銳を抜き、これを第二太平洋艦隊と稱して、ロジエスト・ウエンスキー中將を提督として四十餘隻の大艦隊を率ゐ、東洋に急行し旅順の殘艦と力を合せ、内外より日本艦隊に當らしめんとする策を樹てました。後方連絡を絶たれては、我が滿洲軍は戦はずして潰ゆる外ありません。此れは實に賢き作戦でありました。近い例が浦塩に逃げ込みし三艦がありましたのみで、濃霧に乗じて屢々我が沿岸、甚だしきは津輕海峽を出て東京灣附近を侵し、遂に金洲丸の慘劇を演出し、上村艦隊の六隻を割いて此れに備へねばならぬ羽目に陥らしめたにも拘らず、再び常陸丸の慘劇が起りました。第二太平洋艦隊が來着して挾撃の厄に逢へば我れに必勝の算は立ちません。これが旅順背面攻撃の一日も忽せにすることの出来ぬ第一

の理由でありました。

當時東郷大將と乃木大將との心配はとても吾々の想像が出来ぬ位で、東郷大將が一日も忽にせられざる艦隊を離れて、旅順の攻圍軍に乃木大將を訪れて、親しく戦況を聞かれたり、乃木大將が屢々書を寄せて旅順の陥落がとても短時日にならざるを報じ、戦艦を一隻づつにても本國に返して修繕し、東航敵艦に對する準備をなされんことを勸告せらるゝなど、その當時の両大將の心痛はなみ一通りの事ではありませんでした事が此の頃漸く發表せられました。

## 二、波艦隊の東航(即ち第二、第三太平洋艦隊のことです)

抑も露國の旅順口に據りたる第一太平洋艦隊(旅順艦隊とも云ひました)が、朝に一隻を傷つけられ、夕に一艦を撃ち沈められ、手を撈れ足を取られ、屢々浦塩に逃れ込まんと企てましたが、何時も我が艦隊の爲めに要撃せられ果すことが出来ませんでした。制海の權は全く我が手に歸して、黄海上を往き交ふ旭の御旗は織るが如く、滿洲百萬の軍兵の後方勤務は我が思ふ儘となり、陸軍も連戦連勝破竹の勢で、奉天攻圍の形成も既に成らんとしました。露帝これを聞いて足を跳らし眼を噴かせ、世界の軍事通が疑問とした、戦時に大艦隊を一万六千有餘哩なる東洋に増遣するの議を決しました。先づ四十餘隻の給炭船を各要地に先發配置し、本隊は戰艦七隻・巡洋艦六隻・假裝巡洋艦四隻・驅逐艦六隻・及び工作船・病院船を以てこれを組織し、加ふるに義勇艦隊に屬する運送船隊を附して約四十隻、これを第二太平洋艦隊と稱へました。現に露國海軍々令部に其の人ありと聞えた、海軍中將ロジエスト・ウエンスキー中將を起たして、これが司令長官とし、旗艦クヤニージ・



スワロフに坐乗せしめ、司令官フェルケルザム及びエンクイスト兩少將を従へまして、明治三十七年九月十三日錨をクロンスタットの軍港に抜き、ケウエリー（リボウ？）軍港に入つて萬事の準備を整へ、十月十二日盛んなる國民の歡聲の裡に本國をあとに見捨て、發航しました。發するに臨み露帝は皇后及び幼冲の太子を伴はれ親しくこれを檢閲し、將士を甲板に集め激勵し、勅して

朕は今より此の艦隊を東洋に送る。乗組の諸士よ、御身等は誓つて敵を打ち破り、ワリヤク・コレーツの雪を打てよ。

と、天に向つて嚴かに航路の安全を禱られました。これは寔に露國の名譽を、一層適切に云へば全歐洲の名譽を擔ひ、一國の勝敗を賭し、露の君民二億餘万人の唯一の希望を乗せましたもので。舳艫相含み、旗指物は天に連り、威風堂々と四邊を拂ひ、行くものは甲板に、送るものは岸邊に立ち盡し、或は手巾を振り或は帽子を上げ、影消ゆるまで共に餘波を惜しみ、堅氷を蹶破りつゝ（北海は已に結氷する）萬里遠征の途に上りました。それが後日どんな運命に遭遇するやは、神ならぬ身の今は知ることが出来ませぬけれども、亦一代を空しうするの壯觀であつたに相違ありません。

旗艦スワロフに乗り込み日本海で戦死しました技師にポルトウスキといふ工學士がありました。日々の出來事を日記して各寄港地より其の愛妻によせました記事があります。これによりますと、此の航海は海上にて石炭食糧の積み替へ、破損の修繕など、想像も出來難い困難に出逢ひ、彼の艦にも此の船にも破損が出來、その修繕に忙しく、志氣常に銷沈して、爲めに色々な事件が生じたことが明かであります。今其の一二を挙げて見ますれば、未だ本國を去る遠からずして所謂ハル事件なる戦劇一番を演出しました。英・佛の海

峽も近くなりますし、英國は日本と同盟國ではありませんし、日本水雷艇が英國で製造中であるとか、日本海軍々人が多數英國に入り込んでをるごかの風説が、出發前に盛んでありましたから、臆病風に吹きまくられびく／＼者で航海してをりました。前工學士の日記を繰り合して見ますと、十月二十一日夜十時艦隊より非常に後れて居つた、運送船カムチャツカより無線電信が旗艦に來て、

旗艦ですか、カムチャツカですがねえ、今四隻の水雷艇が襲來する様子です。今我が艦隊はどの邊にあるか知らせて下さい。

とかかりましたが、旗艦ではヒョツとするど日本人の策略で、我が艦隊の所在を探るのではないかと、返電しませんでした。夜一時頃突然前程に當つて變つた船影を認め、戰艦準備の號音が鳴り響き、枝隊の諸艦は一時に皆砲火を開き、探海燈は暗を破りました。所が他の方面から無線電信が來ました。嗟！如何なる不幸不運ぞや。

アウロラですがねえ、水線上に味方の外れ弾四弾が當り貫通孔を受け、烟筒を射抜かれ技師は重傷、砲術長も負傷しました。

と。昔平家の軍兵が水禽の羽音に驚き、源氏の兵と誤つて逃走したのによく似た滑稽で、卑怯者のすることは昔も今も同一轍であるのが面白いではありませんか。日本水雷艇と誤つたのは英國漁船で、クレイン號は撃沈せられ船長以下死傷者も少くありませんでした。叩頭陳謝し賠償金まで出し、漸く謝びが協うて發航しましたが、世界の物笑ひとなり、前幸のよい兆ではありませんでした。

十月三十日西班牙のウイゴー港にて本支二隊に分れ、吃水深き本隊は口中將自らこれを率ゐて喜望岬を迂廻し、支隊はフェルケルザム少將を司令官としてナワリシに乗じ、蘇土



に向ひました。更に十一月十六日後發隊としてトブ・ロンテンスキー少將を司令官として巡洋艦オレーグ・イツムルトの二隻、假裝巡洋艦六隻及び驅逐艦をリボウ軍港より發せしめました。故に本艦隊は三隊からなり侮ることの出来ぬ大勢力となりました。三隊共に中立港に立寄り、中立國の船舶を臨検したり、これを用ひて石炭食糧を轉載したり、毫も中立の實がありませんから、十二月三日我が政府は獨・蘭・丁の三國に對して抗議を申込みました。英國外務大臣はカーヂフ税關長に訓令して、獨逸汽船キャブテン・メンツエル號の石炭積込みを禁止しました、これは曩に同船が積込んだ石炭を第二太平洋艦隊に賣渡したといふ確證が舉りましたからであります。

十二月二十二日露政府は第二太平洋艦隊司令官ロ中將を、改めて太平洋艦隊總司令官に任じ、更に第三艦隊の艦裝に着手しました。これは申すまでもなく、その勢力を愈々大にして、遙かに日本艦隊の上に出でしめんとすの計畫であります。支隊は十一月二十六日蘇土に入り、本隊は十二月四日喜望峯を迂廻し、明治三十八年一月一日滞りなく馬嶋の東岸セント・マリー嶋に到着し、支隊は西北岸なるノツシヒに集合しました。トブ・ロンテンスキー少將の後發隊は一月十二日午後蘇土に入り、十九日紅海の佛領ジフチーに着し、二月二日馬嶋に向ひました。

お話しが一寸後に戻りますが、是より先に旅順は已に陥つて第一太平洋艦隊は全滅し、是等の援助は最早や望むことが出来ぬ有様となり、第二太平洋艦隊のみでは日本艦隊に對して必勝は期し難いこととなりましたから、豫ねて準備中にあつた第三艦隊を急派することとなりまして、一月二十七日ネボカトフ少將を司令官に任じ、戰艦ニコライ一世を旗艦とし、裝甲艦三隻・巡洋艦一隻・假裝巡洋艦二隻・特務船等を率ゐ、二月十五日リボウ軍港

を發せしめました。次いで同月二十四日更に十四隻よりなる第四艦隊の編制に着手しました。(此れは實際發航しませぬ内に日本海々戰の勝負がつきました)。さあ露國も一生懸命です、我が國でも決して油断は出来ぬ状態となりました。馬嶋にある白耳義新聞通信者は一月二十四日附で左の如く通信してをります。

ノツシビ嶋沖にある露國諸艦隊は大小四十五隻で、又四橋三烟筒の多數の大型獨逸運炭船がある。遠く洋上を眺むれば極めて壯觀で、夜に入れば無數の燈火は巡洋艦の探海燈と相映射し海天の寂寥を破る。

と、又ボルトウスキー工學士の航海日誌中には、此の滯留中日本艦隊の來襲を恐れ砲艦を放ち、水雷網を張り、一夜も安き心はなかつた、と。

白晝公然大手を振つて佛國の中立を侵し、數日間滯留して、或は演習を專とし、或は軍需品を積み取り、且つ第三艦隊の東航を待ち合せた。此の時最も此の艦隊の將士をして驚膽氣死せしめたのは旅順陥落の悲報であつたでありませう。世界軍評家の注目は一時此の艦隊に集まり、多くの人の考へでは旅順が陥つた以上は引き還すの外はなからうと云ひましたが、スラブ人の拗執なる進みもせず退きもせず、處は瘴烟深き熱帶の孤嶋、時は恰も南半球の盛夏で、北歐の寒國に生れた露國の兵士、恨みを飲んで病苦に斃るゝもの日として絶ゆることがなく、士氣日に衰へ、兵士は徒らに飲酒に耽り、將校は不平に滿ち、運送船など屢々ストライキを起し、ロ提督の苦心も察せられました。提督は第三艦隊を待つより日本の充分準備の整はざる内に、一日も早く東航勝負を決せんことの得策たるを再三電奏せしも遂ひに勅許を得られず、又解職を請ひても許されず、荏苒として三月中旬に至



り、漸く或る秘密命令の下に發航しました。

當時佛人の中立を守らざるを聞いて我が國人は皆怒りましたが、此れは却つて我が國には幸であつたので、餘り早く來られては困つた事情が澤山ありました。かく久しく碇泊してをった第二太平洋艦隊の本支隊及び後發隊全部は、何れの日に拔錨しましたか當時は全く不明でありましたが、後日に至つて三月十四日午後三時であつたことが分りました。

第三太平洋艦隊は四月一日ペリムを経て三日佛領ジブチーに達しました。ロ中將は發しまするときに露帝に訣別の辞を電奏しました。

臣今後の行動に付いては、幸にして臣能く勝を得ればこれを傳奏するの日あるべく、然らざれば東郷これを世界に報すべし。

と、戰つて勝てなかつたならば戦死せんとの意は暗に見えてをります。それはその筈であります。此の重任と此の大艦隊を托せられた總司令長官としましては、此の位の覺悟はあつて然るべきでせう。それがどうでしたらう。負傷の結果人事不省で、止むを得なんだとは申しながら、最も厭ふべき捕虜となつたのは、何處まで武運に拙き人でしたか、敵ながらも氣の毒の至りであります。

馬嶋を發してから杳として行くところを知らせませんでした。東航第一の難關と聞えたる印度洋三千二百海里の横斷には、一つの寄るべき嶋嶼もありません。三百噸にも足らぬ載積量の驅逐艦を伴ひ、その石炭や食糧の轉載はどうしてこれをなし遂げましたか、海軍技術上の一問題となりました位であります。苦熱肉を爛らすの赤道直下、三週の長き間、明けても暮れても舷側に散る潮を花と見て、航海せし將士の苦痛は並み大抵ではありません。航海の頻繁なる印度洋中大艦隊を率ゐて如何なる航路をとりましたか、三週間の永き間人

目を掠めて、これが消息を洩らさなんだのは決して悔ることの出来ない技倆であります。

我々は朝夕新聞を手に取るごとに、これが消息を得んと励めました。少しも聞く所はありませんでした。國民は皆悶々として月を超へ、四月五日に初めて飛報がありました。

四月四日午前二時ビーオー會社の汽船アルモラ號が、錫蘭嶋の東南三百五十海里の所で、三隻の巨艦東北に向つて航走するを見た。

と、次いで  
七日午後一時英國郵船々長は、新嘉坡の西百三十海里の海上で三十隻以上の艦隊に追及した。

と、第三艦隊も亦此の日を以てジブチーを發しました。果然……八日午後三時、待ちに待つた第二太平洋艦隊の四十二隻は、長蛇の如く連つて新嘉坡沖を通過したとの確報が着きました。かくの如く長途の航海を了へし艦隊が、直ちに戰場に臨むことの出来難いは戰評家でなくとも考へねばならぬ所であります。此の近海には又一つも露領がありません。果して何れの中立地を侵して最後の戰備を整へますか、我が五千万人が耳を聳て、聞かんとした所でありました。

### 三、旅順の陥落

第二太平洋艦隊は已に喜望岬に至り、増遣後發隊も已に發航の報が傳へられ、而かも旅順の要塞は中々陥らない。我が艦隊の封鎖も一日として疎かには出来ない。こゝも守らねばならず、東航艦隊に對しても防戦の準備をせねばならず、前も油斷が出来ねば後も心配。政府も人民も氣が氣ではありませんでした。旅順の攻撃は日露戰爭中の激戦難關で、十ヶ



月に亘り、從來二回の總攻撃に多大の犠牲を出し、文明の要塞に速射砲の前に、自擲隊などの決死隊を組織し、しかも中將ともある中村師團長が自らこれを率ゐられたなど、苦戦の跡があり／＼と忍ばれますが、今思へばあれほど堅固な要塞が十ヶ月やそこらでよく落ちたものでありません。第三回總攻撃に當つて、陛下も宸襟を惱ましたまひ、

旅順要塞は敵が天險に加工し金湯となしたる所なり、其の攻略の容易ならざる固より怪しむに足らず。朕深く爾等の勞苦を察し日夜軫念に堪えず、然れども今や陸海軍の状況は、旅順攻略の機を緩うするを得ざるものなり。此の時に當り第三回總攻撃の舉あるを聞き其の時機を得たるを喜び、成功を望むの情甚だ切なり。爾等將卒夫れ自愛努力せよ。

と、日露戦中の詔勅は多くありましたが、戦前に下つた詔勅は一つもありません、唯此の詔勅がある許りであります。又此の位痛切なる御詔勅はありませんでした。此の御詔勅によりまして軍略上重要な時機であつたことがよく分ります。第一には露の東航艦隊を迎撃するの準備が迫つて居りますし、第二には奉天の攻圍戦の期が近づいて、一人も多くの兵種がほしいといふ大切な時でありました。そこで參謀總長兒玉大將も北方のことは放擲して、自ら來つて帷幕に參せられ、此の御詔勅に對し奉りても、どんな犠牲どんな困難を忍ぶも、此度こそは將卒共に固き決心をせられました。

全体旅順の背面には小丘が連延として、敵が其の上にも三重にも三重にも強固なる文明式砲臺を築き、最新式の巨砲を備へ、要害眞に堅固であります。只一ヶ所西北部に少しの平地がありまして、其の中に二〇三高地が孤立してをりました。二〇三高地といふまでもなく水面上二百三米の高さであるから、假りにかく名付けたのであります。こゝにも砲

臺はないことありませんでしたが、敵もこゝ迄はまだ手が廻りかねたか、他の二龍山・松樹山・望臺などの様に堅固ではなかつたのであります。その代りに多數の兵を屯ろし、且つ他の諸砲臺から掩護せられる位置にありましたから、こゝとても容易な業では落ちないは分り限つてをりますが、我が軍議は愈々此れを強襲することに決しました。十二月下旬より難戦惡闘一分時の間斷もなく、新手を引き替へ入れ更へして、激戦實に五晝夜に亘り、一たび占領しては又奪ひ返され、二たび攻略しては逆襲せられ、第一師團は全滅して、第七師團これに次ぎ、我が戦死實に一方を超え、砲聲銃音天を撼かし劍光砲火地に閃めき、伏屍野を蔽ひ流血壑に滿ち、戦後檢する所によれば磐谷の如きは彼我死屍相重なる七重に及ぶものありしと、此れを以て其の難戦が偲べれます。乃木大將の生存の一子保典中尉も終に此の役に殉じられました。此の要地は實に旅順の死命を制するを以て、敵軍もこれを防ぐに全力を盡し、最も衆望あるツエルヒツキ將軍親ら戦を督し、終に戦死するに至りました。日露戦中激戦も多くありましたが、此の役に比するものはなかつたさうです。戦後山縣元帥が旅順を巡視せられたとき、此の戦跡に案内せんとしましたら、元帥は泣然とせられて

我が將士があれほどに悪戦苦闘した跡は、實に行つて見るに忍びぬ。と涙を垂れて遂に行かれなかつたさうであります。元帥は未だ十七八才の頃より維新兵馬の間に人となられ、西南・日清の役にも常に彈丸雨飛の間に立たれ、戦場の惨態には慣れられた方である、それでも猶ほ此の嘆きがありました位で、酸鼻痛烈の惨状が想像せられるではありませんか。けれども此の犠牲は決して高價でありませんでした。一たび二〇三高地が我が手に歸してから、こゝから俯して港内を望めば、一塵の眼を遮るものもなく敵



艦の所在は歴々之を掌に指すが如く、其の地点は電話にて砲手に傳はり、間接射撃は恰も池中の鴨を射ると一般となり、著しく効果を増し、數日にして之を撃沈し盡しました。間接射撃とは諸君も御存知の通り、或る遮蔽物を間に於いて、例へば山を隔て、向うにある物を、砲口を斜に天に向けて弾丸は山を超へさせ、丁度目的物の上に落ちかゝる様に照準して射撃するのであります。旅順敵艦攻撃にも、西方鳩灣には日進・春日の二つの新式艦を廻し、此の二艦は其の十二吋巨砲が他の戦艦と異り、強く仰向くことの出来る様な構造で、間接射撃も大きく様に出来て居ります。又大孤山・小孤山の方にも重砲が備へられて二龍山・松樹山などの砲台の上を超へて、是迄も間接射撃は行はれて居りましたが、何分盲滅法の仕事で多く其の効力は現はれませんでした。所が二〇三高地が手に入りましてから、旅順口内は一目ですから、こゝが恰も軍艦の哨樓の様に観測が自由で、着弾の結果が一々電話で砲手に傳へられます。

哨樓員 おい！（軍人ですからもし／＼などは呼び出しません）日進の砲術長ですか。

今この弾丸は敵艦を飛び超へて十米向ふの水中に炸発しましたから、角度を二度許り北に向け直し、十米手前に照準して下さい。

砲術長 分かりました。次のを直ぐ發射しますから、能く観測して委しく知らせて下さい。

哨樓員 御立派です、美事に敵艦の中央艦橋の下に命中炸発しました。今大變な烟です、

火災を起したら幸いです。船員が右往左往して負傷者を運んで居るらしいです、今の

照準で次手に、もう二三發見舞ふて遣つて下さい。

砲術長 宜しい、續けて撃ちますぞ。

哨樓員 三發とも甘く命中しました。大變な火災で水を運ぶやら擔架が動くやら、露助奴

大狼狽です。あれ／＼一人滑つて海中に落ちやがった。砲手の諸君に一寸見せたいなあ。

砲術長 諸君は愉快でも、我々は縁の下の力持ちで草臥れ儲けた。

哨樓員 今の艦はまあ少し許して遣つて、今後は其の南に五度角位で、今のより六十米向

うに無傷の一敵艦が浮んでをります、それに一彈を見舞つて。

砲術長 分かりました、よろしい。試砲を一發やりますからどの邊に落ちるかよく観測して

知らせて下さい。

一方の方には又一方の方で、全体海軍は陸軍とは違つて、東北の水兵も九州の水兵も同

じ艦中に勤務してをりますから、色々な國訛りが出て、茶話會などやると我が國俗言の共

進會の様なことがあります。此方の方で秋田出身の哨樓員が、（此の問答は總て秋田と薩

摩の土語を譯す積り、其の土地出身の人を得て）

哨樓員 あなたは大孤山の重砲隊ですか。

と呼び出せば、薩摩出身の砲手が、

砲手 左様です、大孤山の重砲隊です。

哨樓員 それなら今撃たれた弾は、大變の方角違ひです。百米も左によつとります。高價

な弾丸を勿体ない。

砲手 そんなら今撃つから観測して呉れい。それ出た、當つたか。

哨樓員 當るには當つた。

砲手 變な云ひ様をすない、艦首か艦尾か観測してしつかり云へい。何處だい。

哨樓員 何處とも一寸云ひ様がないわい。廣々とした、



砲手

廣々としたと、甲板の中央かい。

哨樓員

人を笑はせやがる、宜い氣なものぢや。廣々とした水の面に當つたわい。

砲手

何んぢやと、人を馬鹿にしてをる。観測が悪いのぢや、よく観てよく分る様に云へ。

哨樓員

怪たいなことを言ふない。よく聞いて上手に打てい。貴様の方から来る弾は、皆

はづれ弾だぞ。一つも命中つてをらぬわい。日進や春日は甘いものぢや、そら又命中

つた。貴様等に見せてやりたい。

砲手

貴様の見そこないで、當つたのが此方の弾丸で、外れたのが艦から来たに違ひない。よく見て云へい。

哨樓員

何を云ふぢやい、貴様ぢやあるまいし。観そこなうてたまりつこがあるか、此の

馬鹿もの奴が。

砲手

なに、馬鹿ものぢやと。

と、始めは兩方成るべく氣を付けて國訛を避けてをりましたが、段々言ひ合ひ、双方痾がたつと國訛の丸出しで、何を云ふてをるやら分らぬ様になり、殊に一方は九州男子ときてをるから、今迄一つも當らぬ、艦のは皆當ると聞いて氣がむしやくしやしてをる所に、馬鹿ものと云はれたものであるから、鸚鵡返しに、「なに馬鹿ものぢや」と云ふ拍手に、我れ知らず電話機の横顔でもボカツと一つ遣つたと見え、「ガーン」と響いて電話が通じなくなりしました。かう云ふ工合で、港内に引き籠つた第一太平洋艦隊は日ならずして全滅しました。此れも二〇三高地が陥つたお蔭であります。艦隊が全滅した以上は旅順を守備する必要はなくなつたといつてもよい位でありますから、遂に守將ステッセル將軍も開城を

決心しました。

旅順開城の報が一たび露都に至るや、從來の不平黨一時に烽起し、長老カボン衆を率ゐて憲政改革を絶叫し、各大学生之に應じ、大同盟罷工は各地に起り、鎮撫の兵士と人民と衝突し、同胞無辜の鮮血を以て街頭の雪を染め、或はセフストホリー軍港水兵の叛乱となり、或はモスコイ總督セルジ侯の暗殺となり、國內の騷乱蜂の巢を破つた様な有様でありました。

東郷司令長官は、十二月二十二日を以て休光赫々たる報告を發して海戦の一段落を劃せられました。

武勇絶倫なる攻圍軍の猛烈不撓の攻撃により、旅順口の死命を制すべき二〇三高地が我が軍の有に歸せしより、港内の敵艦に對し攻城重砲の擲射益々其の威力を逞うし、ギルダハ・レトウキンザンは忽ち沈没し、ポベータ・ベレスウエード・バルラタ・パーヤン相次いで撃沈せられ、獨りセバストポリのみ去る九日朝背面よりの砲火を運れて港外城頭山下に逸して碇泊せしも、是れ亦我が水雷艇隊の連續勇敢なる襲撃に傷き、今や殆んど戦闘航海力を失ふに至れり。旅順敵艦隊の主力は事實上茲に全く滅亡に歸し只残存せるものは無勢力なる砲艦オトワーズヌイ及び驅逐艦數隻に過ぎず。是に於て聯合艦隊は去る五月一日以來施行したる封鎖配備中、不必要の一部を撤すると同時に益々旅順口及び港外よりの破封鎖船の監視を密にし、且つ残存の敵艦隊に對する警戒を嚴にせんぞす。

此の長日月の封鎖中、敵の敷設及び浮流水雷の危害、風濤濃霧の險難等常に絶へず、前に宮古・吉野・初瀬及び海門の災厄あり、後に平遠・濟遠の遭難起り、忠死の將卒亦少



なきに非らずと雖も、幸にして終始封鎖を維持することを得、時々敵の脱出せんとすることありしも毎に其の企圖を破り、終に攻圍軍の至大なる協力に因り、茲に殆んど當方面の敵艦隊全滅の成果を見るに及び、又浦塩方面の敵艦隊も、先に我が第二艦隊の爲めに大打撃を受けて午後再び出動するの氣勢なきに至り、只益々大元帥陛下御稜威の及ぶところの洪大なるに感激するの外なきなり。而して此の間又麾下各部隊が各其の能力に應じ始終能く其の任務を遂行し得たるのみならず、死を決して敵港を閉塞したる閉塞隊、連戦倦まずして敵前に機械水雷を沈置したる艦艇、危険を冒して敵海の掃除に従事したる特別掃海隊、並びに敵弾に曝露して敵艦を監視したる前進望樓員等の特別勤務が、當方面の封鎖戦に至大の効果ありしことを具報するは、本職の上下に對する職責と信する所なり。

開戦已來殆んど一年の間、全軍の將士日となく夜となく躬を鞠くし碌々眠る暇もなく、悠然箸を持つことも出來ず、身を風雨怒濤の間に曝し、命を砲彈や水雷の前に委ね、或は鼻をつまゝるゝも分ち難き濃霧の裡に作業し、或は暗夜に燈を滅して敵の注視を避け、或は沍寒指を落すの候、氷点下何十度の舷側に奔走し、炎熱金を爍かすの時、百何十度の艦底に執筆して一日の休憩もなく、足地を踏まざるもの實に三百有餘日、海軍々務上最大至難と聞へたる封鎖の偉効を完成して、海戦の一段落を告げられた。

是に於て畏くも大元帥陛下の思召を以て、一時凱旋するに決し、十二月三十日午後九時聯合艦隊司令長官東郷大將、第二艦隊司令長官上村中將以下、幕僚と相携へて佐世保より上陸し、萬民歡呼の裡に上京せられました。沼道各驛四民歡迎する雲の如く、萬歳の聲は耳を聳する許りでありました。汽車の將に岡山驛を發せんとする時の如きは、群民の熱

情は遂に黙止する能はず、蟻の如く車邊に集まり、窓に攀づるもあり、欄を押すもあり、狂喜喝采何とも云はれぬ有様で、汽車も發することが出來ず、發車十數分を後るゝに至りました。これ國民が我が提督及び海軍々人に感謝するの深きによりましたけれども、亦目前に露の東航艦隊を迎撃せねばならぬ更に大なる任務があつて、これが成功を希ふことが切なるが故でありました。

こゝに襟を正して拜聴せねばならぬことがあります。一日東郷大將等登營、戦況を伏奏せられしとき、龍顏殊に憂はしげに、露の東航艦隊來着するも、我が海軍これに對して勝算があるかとの旨を下問遊ばされた。諸將相顧みて默然として敢えて奉答する人もありませんでしたが、暫くして東郷提督は恭しく立たれました。例の謹嚴なる態度にて、

陛下願くは甚だしく聖慮を勞し給ふなかれ、臣等私かに決する所なり、犬馬の勞を盡し誓つてこれを撃滅し萬遺算なきを期すべし。

と、其の語氣あまりに斷定的なりしを以て、側にありたる山本海軍大臣・伊東軍令部長も重厚の人亦斯の如き奉答をなすかと、思はず其の面を凝視せられたと云ひます。退出の途中、上村中將心配氣に大將に向はれて、

今日御前にて御奉答の通り、閣下に充分の御成算がありますか。

と。實際東航第二・第三艦隊合すれば勢力遙かに我が上に出ます。殊に海戦上貴要なる甲裝艦に於て大いに我れに優つて、上下の大いに憂ふる所でありました。大將は例の打ち俯し勝ちなる面を徐ろに擧げられて、

陛下が開戦已來國家臣民の爲めに寢食すら安んじ給はず、軍事に御憂慮遊ばせられ、畏れ多くも今日の如く稍憔悴遊ばせられた龍顏を拜し奉つては、今日の如く奉答する



より他、事の前後を考へる暇はないではありませんか。

と、相顧みて共に潸然と落涙せられましたといひますが、當時に於ける陛下の御心事はいまさら申上げる迄もなく、戦艦準備の充分ならざる我が海軍當局者の苦衷を推想すること、暗涙の点々たるを禁ずることが出来ない話ではありませんか。御製にも、

夢さめてまづこそ思へいくさ人向ひし方のたよりいかにと

何れの時の御感想を詠み出で給ひしか知られませぬが、實に拜讀するにも落涙を禁ずる能はざる次第であります。

去年二月六日諸艦艇の佐世保を抜錨してより以來、著しく損傷したものの、外は一回だも入渠するの暇なく、多少の損所は間に合はせの修理に止めて、日々夜々劇しき海戦に従事し、人と共に船も亦久戦疲労の状がありました。是に於て始めて各軍艦の船渠に入り、艦底の苔を掃り、舷側を新に塗り替へ、砲塔は磨かれ、損所に修理せられ、再び海上に游弋した時は、恰も人が久しぶりて浴後の人の如く、船走も軽く氣も揚がつて見えました。又久しく海上の難事に従ひました將卒は一時歸休を許されて、一年振りて青々たる山や廣々たる野を見、生死の間にあつても夢の間も忘れざりし慕はしき故郷に歸り、親戚や故舊の歓迎に逢ひ、父母や妻子の團樂に酔ふ、時に恰も旅順開城の快報傳はり、こゝ數日間は眞に樂園に入るの思ひがしたてでありませう。さもあらばあれで、西海の雲行は久しく人と艦との休養を許さぬ事情でありました、新年屠蘇の醉未だ醒めるか醒めざる一月二十三日に、上村司令長官は先づ佐世保軍港に赴かれ、東郷提督は微恙あり稍後れて、昨年我が艦隊の抜錨した吉辰二月六日午後四時三十分新橋を發し、同十一日再び三笠に坐乗せられました。片岡中將は二月十六日凱旋參内せられ、三月十二日再び征途に上られました。更に聯合艦

隊の組織を更へ、新しき作戰の任務に就き、將卒皆勇氣凜烈として蛟龍の深く地下に潜むが如く、將に起らんとする新戰場に向つて姿を隠しました。果してどんな時どんな海上に其の堂々たる雄姿を現はし來るでありませうか。雲烟渺茫として遂に行く所を知らせませんでした。唯一二數片的の報道が微かに天の機密を洩しましたのみであります。

三月十五日午前八時十五分日本巡洋艦四隻新嘉坡に入り、日本總領事旗艦某號を訪問す、二十四時間以上滞在を許さざる國際中立法規を遵行して、直ちに某方面に向つて發航した。

四月十四日勅令第三百三十號

澎湖嶋馬港要港境域内及び其の沿海を臨時戰地境とし、本令發布の日より戒嚴令を行ふことを宣告す。

澎湖嶋戰時指揮官を以て、前項戒嚴地の司令官とす。

次いで臺灣全島に戒嚴令を布かれました。戰機は段々熟して來まして、暗雲は密に西海の天を覆ふてをります。國民の頭上に降り來るものは雨？霰？はた雪でせうか？

#### 四、カムラン灣事件

四月八日新嘉坡沖を通過した第二太平洋艦隊四十餘隻は、十一日北緯八度十分、東經百八度三分の海上を北航して居りました。もし蘭領バンガ嶋のミントー港に碇泊しはせぬかとの心配から、和蘭政府の東洋艦隊は封緘命令を受けて、バタビヤを發して北方に急航しました。十三日諾威汽船ブルンヒルデは盤谷より東航中、西貢の北東約百六十海里なる安南カムラン灣の北方で、露艦に停船を命せられ、六名の將校臨檢して後解放せられたと



言明しました。安南は云ふ迄もなく佛領で、カムランは安南中の良港であります。露國艦隊はこれに據つて集合地点となさんとし、佛國も亦知らぬ顔の半兵衛を極めんとするの態度でありました。仍て所謂カムラン灣事件なるものが生じたのであります。

四月十八日我が政府は露艦隊のカムラン灣碇泊に付いて佛國政府に抗議を申込まました。同月二十日開會中の同國下院で議員デロンクルは、

露國東航艦隊が我が安南カムラン灣に碇泊し、日本政府より此れに付て抗議ありしと聞く、果して事實にや、詳細の説明を請ふ。

首相リーウエは、

露艦隊の碇泊の確報は得ぬも、若し來れば直ちに退去せしむべき手段を取ることを我が東洋艦隊司令長官に通知した。

と答へてをりますが、實際は依然として佛領を去らなないのであります。二十一日に佛國政府は日本駐劄佛國公使アルマンに打電して、佛國は飽くまで嚴正中立を守るべきことを日本政府に保証せよと訓令したといふことであります。鐵面皮しいにもほどのあつたもので、人を見くびつた話であります。馬嶋でもカムランでも佛國の援助がなければ、どうして東航艦隊は能くその航程を全うすることが出来ませうぞ。此等の事は東航艦隊が發航する前から佛國の了解黙諾を得て居つたものと、解釋する外はないではありませんか。又、面白いことには同月二十四日佛國駐劄の露國の大使は、佛國外務省に通牒して、

露國艦隊がカムラン灣に碇泊するは國際公法の先例に則るもので、日本政府がこれに對して異議を云ふは殆んど了解出來ぬ所である。

と、しかも一つも其の前例なるものを擧げては居りません。此れを平氣で受け付けてをる

佛國政府も一つ穴の狸に相違ありません。世界の公法學者は公平に如何にこれを解釋せんとするか、又嚴正中立とは全体何を意味するや、人を馬鹿にするにも程のあつたものであります。同月二十七日獨逸汽船ステツチンは、三十七隻よりなる露國艦隊がカムランの北方約五十海里なるホンコーフ灣にあるを見たど報じました。聞けば聞くほど怪しい話であります。五月一日倫敦發電によれば、駐佛日本公使は佛國外務大臣デルカツセに向つて、貴國印度支那總督は十分沿岸監視を行つたか、又戰時禁制品の賣り渡しを抑制したかを質問し、その回答を求めました。三日佛國政府は其の絶東艦隊司令長官海軍中將ペールを旗艦モントカルムに坐乗せしめ、東京灣に艦隊を集合し、司令官ジョン・キエール少將をホンコーフ灣に向はせたと報じましたが、露艦隊は佛艦が來たれば一時港外に出で、佛艦が去れば再び港内に這入り込み、此等はほんの言譯だけの仕事に過ぎませんでした。

同月五日午後五時ネボカトフ少將の率ゐる第三太平洋艦隊は新嘉坡沖を通過したが、天候不良で正確なる隻數を知ることが出来なんだとの報が達しました。駐佛本野公使は佛相の言明あるに抱はらず、露艦隊が依然としてホンコーフ灣にあり、縦まゝに行動するを詰りました。テルガツセは答へて、

カムラン灣事件以來佛國政府は印度支那總督に訓令して、交戰國の船艦を佛領海内に入らざらしめ、露第三太平洋艦隊近接するの報あるや、再び訓令して極力これを監視せしめると同時に、露政府にも其の旨を通知したれば、最早や露艦は一隻も佛國領海内にて居らざる筈である。

と、「筈である」とは随分巧な外交言辭である。けれども我が軍略上に重大の關係ある日本の近海に碇泊を許す許りでなく、哨艦を放ちて中立國の船舶を臨検したり、石炭・食糧・



軍需品を搭載したり、また自由に陸上に往復して第三艦隊の來着を待ち受けること恰も自國の根據地にあると一般、遷延に遷延を重ね、日を送り月を亘り、公使の交渉虚日なきもその答ふる所は瓢蕈で、各國亦知らぬ顔をしてをります。これを聞いて我が國民は憤慨し腕を撫り牙を咬み、氣早いは江戸兒の持ち前、我が政府は何をしてをるのだ、我が得意の水雷艇をして安南を衝かしめ、居るか居らぬか霹靂一聲でこれを定めるがよいと。五月七日付で安南碇泊中の露の一青年將校がその本國の近親に寄せた書翰の一節に、

○中將は甚だ慎重の態度を取り、艦隊を前進するときは絶えず掃海を行ひ、夜中は巡洋艦と驅逐艦よりなる哨艦を派出し、將校下士卒の勤務は當直やら、絶間なき操練やら、辛勞は言語にも盡せない。又晴雨にかゝはらず行はるゝ石炭・糧食・軍需品の搭載も疲勞の原因である。何よりも苦しきは此の地の恐るべき炎熱である。今迄我が艦隊は完全にして戦列を脱したものは一隻もない。これ已に優秀なる勢力である上に、ネボカトフの戦隊合同する曉には、猶更に優勢となる筈である。復活祭はこれを海上で迎へた。此の日哨艦の順番はドンスコイ・ウラルの二巡洋艦で、終夜港口附近を巡航しその大探海燈は盛んに地平線を照した。これは日本軍艦が祝日に際して何か計畫を逞うせんかを恐れた故である。

と。氣早は江戸兒の言のみではなかつた。當時露艦隊の將卒が疑心暗鬼の狀が此の書翰でも見える様に察せられる。同月八日我が同盟國である英國外務大臣ラーワンズダウン卿は佛國政府に向つて、最も強硬なる照會狀を發しました。

日本政府の言ふ所が果して事實である事が憚められ、日本より英國に同盟義務の遂行を迫り來れば、英國は最早やこれに應ずるより外に取るべき手段はない。

軍事と外交は平時でも多く密接の關係にあつて、兩々相對應せしめねばならぬ。殊に戦時では大切な關係にあつて、馬嶋にては深く抗議もせなんだが、此れは此方にも少々御都合があつたので、併しカムランは我が國の近海ではあるし、我が準備も充分出來たあとであるから、同盟國をして強硬に迫らしたのは外交の妙機でありませう。

九日午後二時、カムラン沖に露の巡洋艦數隻哨戒中、遙かに沖合に煤烟數條天に冲るを見、それ日本艦隊の來襲だと、將校も士卒も皆顔色を失ひました。漸く近づいて旗色が見分けられ、ば何ぞ計らん第三艦隊の來着でありました。各艦狂喜して覺えず手を挙げ、ウラー／＼と三唱した。一方では第三艦隊は今頃は何處をどう彷徨て居るかといふことは、自分等が航海の苦勞なりしに思ひ比べて、日夜心頭に絶えぬ道理ですし、一方には第二艦隊は何處に居るか、果して滞りなく會合し得られるかとの懸念は寸時も忘れる暇はなかつたのでありますから。又實際、昔江戸で國人に逢つてさへ嬉しさに堪へなだると云ひます位ですから、地獄で佛で此の時の兩艦隊將士の喜びはおしはかられます。毛唐はこんな時の表情は饒山ですからその騒々敷い有様が想ひ遣られます。第二・第三艦隊はこゝに全く合同し各員甲板に整列し、露帝の万歳を三唱し、實に天にも上る勢でありました。總司令官○中將は此の機會に部下一般に左の通り命令しました。

日本軍に在りては我れより重大なる優勢あり、即ち多くの日月戦闘經驗と射撃の術に長じたることなり。諸士須臾もこれを忘るべからず。故に彼れ急速の射撃を以て我れに加ふるも、我れこれに倣ひ空しく彈丸を抛擲することあるべからず、我れの彼れに當り勝利を望まんとするもの一に是れあるのみ、將校下士卒たる者深く此の一事を体せざるべからず。日本人は皇室國家に對しては無比の忠順を現はし、不名譽を忌み、勇



壯にして死を見ること鴻毛よりも軽しとする國民なり。然れども吾人の此の行亦上帝に誓ひしものなり、神は既に吾人の精神を強めさせたまひ、今日に至るまで行軍の難を救ひ無上の加護を垂れさせたまへり、神よ願くは我が右の手を固くせられ、偏に誓へる吾人の信條を遂行せん爲めに、吾人の鮮血を以て祖國の被れる傷ましき恥辱を雪がせたまへ。

○中將が諸方面より種々の抗議あるに拘らず、長くカムラン灣に逗留せしは、戦備を整へると、第三艦隊を待ち合せるが爲めと、又一つには日本艦隊が果して臺灣戒嚴地に集中してをるや否やを探知せんとするが爲めでありました。已にして待ちに待つた第三艦隊も來着するし、日本の抗議は素より、英國よりも強硬の通牒があるし、世界の輿論も餘り佛國の傍若無人のやり方に呆れ返り、漸く日本に同情する有様となり、且つ準備もあらかた出來ましたから。五月十四日順次錨を抜いて、十九日夜臺灣と呂宋の間なるバッシン海峽を、北より南に抜け臺灣の東岸に出ました。これ一つには我が枝隊の水雷艇などが戒嚴地に待ち合せ居らんかを恐れましたと、二つにはかくして我が艦隊をして敵を索むるの岐路に迷はしめ、其の隙に乗じて目的の地たる浦蘆に逃れ入らんとする猥策に外ならぬのでありました。我が賢明なる將卒は、まさかそんな甘手に乗るものは一人もありませんでしたが、彼が慥かにこれに苦心した跡は瞭然と見えてをります。臺灣海峡で諾威の汽船を停船して検査したことがあります、其の時に船員に對してこれから對馬海峡に向ふと、故更に揚言して船員を放つたといふことであります。かゝる際にはそのとるべき航路は秘するが上にも秘するのが當前でありますから。此れは日本の軍事探偵の耳にも入るに相違ない、此れを聞いた日本艦隊は常識を以てこれを反對に解して、注視を津輕か宗谷に向けるであらうとの、子

供だましの様な考えであつたでせう。猶ほ上海沖に向ふ際にも數隻の運送船を假裝して、小笠嶋より千島列嶋の間に向はしめ、只管我が注意を北方に引き付けんとしました。其の上故更に速力を緩うして進航を後らかすこと二日以上で、通常速力で算出すれば、疾くに我が先頭哨艦より何らかの報に接せねばならぬ筈の、廿四日に至つても廿五日に至つても、猶ほ何の報もありませんでした。先きの揚言はその猥策であるを看破した我が艦隊でも、此の二日の遅延は大に我が將校間に異論の種となり、今一步にして東郷大將の耐忍を破り、我が艦隊を危地に陥れんとしました。實際此の時は我慢し切れず、廿六日には諸艦隊鎮海灣を出で加徳水道に出動して居つたのであります。

敵も色々の手段猥策の限りを盡し、我れも亦さほど必要もない臺灣に早く戒嚴令を布いたり、新嘉坡以西に巡洋艦を派出したりなど、専ら敵の注視を支那臺灣海峡に引きよせんと、双方贏けず劣らず手段を盡して居ります。戦機は漸く熟して來ましたが、我が國民の信頼する聯合艦隊は何處にどんなことをして居りますか、二月以來杳として一つも聞くところはなく、國民も氣が氣ではありませんでした。果して網に飛び込んだ巨魚を逸すが如き悔いはないかと、首を長くして其の消息を俟つたことは、只に大旱の雲霓の様なものではありませんでした。

### 五、一日千秋の思ひ

敵の艦隊の目的は云ふ迄もなく我が艦隊の目を霞めて、一と先づ浦蘆に通れ込もうとするのであります。故に成るだけ我が艦隊の目に觸れない様にと力め我が隙を狙ふでせう。浦蘆の港口は前面に大嶋横はり、水路は東西の二つに分れ、その近傍に占領して根據地と



するに足る適當の地点もなく、これを封鎖するの難き、とても旅順と比べものにはなりませんが。もしも東航艦隊を半數以上浦塩に入り込ませるが如きことあれば、日本海々岸は一日も寧き日とてはないでせう。尙一層悲觀すれば、万一我が艦隊が大損害を受けて、制海權が動く様なことがあれば、滿洲百萬の軍はとうなるのでせう。實に海軍の大敵たる許りではなく、又陸軍の勝敗を左右するに足る譯であります。加ふるに沿岸線を侵され、貿易の途絶ゆれば、戦時唯一の後援たる内地の産業も大いに衰へ、或は食糧問題も起らぬとは云へますまい。我れも人も口にこそ言はなんだが、心ある國民の寢食を安んぜずして、西方を睨み暮した所以であります。口中將が、

我が艦隊を二十隻以上浦塩に入るを得せしむれば、日本がどんなに強勇でも、胃を脱ぎ戈を伏せて、我が軍門に降らねばなるまい。

と、云つたさうですが。僅かに三隻の装甲巡洋艦が逃れ込んだ許りで、我が作戦上に大なる齟齬が出来たと聞いた位でありましたから、口中將の此の豪語も、一言に無稽とは評し去ることが出来すまい。皇國の興廢許りでなく、實に全東洋の安危に係ると云はねばなりませんまい。若し旅順の陥落が一步後れ今日まで數隻の殘艦があるとしたら、我が海軍の作戦は果してどうなつたであらうませう。又昨年八月十四日蔚山沖の勝がなくて、浦塩の三艦が猶出動し得たとしてもすれば、上村艦隊は何處迄も此の方に備へて、日本海々戦に参加することは六ヶ數かつたであらうませう。果して然れば日本海々戦の艦隊配置はどうにかうにも仕様がなかりませんか。今思つても冷汗が背を潤はす次第であります。旅順の陥落は云ふまでもなく、蔚山沖の勝利も眞とに大した手柄でありました、眞に危機一髪でありました。

さて、我が聯合艦隊は二月初旬佐世保を出てより、何れの地点を占め、どんな神算鬼筭を逞うしてをりますか、國民は皆東郷提督の注意周到にして深謀遠慮なると、その部下將卒の忠順にして勇悍なることに信頼し、僅かに衷情を慰めて居りました。膽大心小、其の大なる所は天地を覆ひ、その小なる所は水も泄さぬ、古今稀れに見る東郷大將の様な名將と、忠魂義膽生を輕んじ死を甘んずる勇卒とを、かゝる國家多難の際に降し給はりしは、天の祐けとも云ふべく、國民が皆謹んで天恩を感謝した次第でありました。

一たび臺灣の東岸に現はれし敵艦の航路を考へるに、琉球群嶋の間を通つて對馬海峡に向ふのが最も近いが、是が敵艦にとつて最も危険が多い。東西何れの海峡を通つて浦塩に向ふであらうか、此の時の心配は今四十歳以上の御方は決して御忘れにならない筈です。日本國中の人が有識者は素より、左迄深き教育なき人でも、碌々眠られない位心配して、集ると觸ると此の噂で持ち切りしました。それはその筈で、此度こそ眞に皇國の興廢、猶痛切に云へば、國の存亡に關する海戦であります。

こゝに東京を去る遠からざる或る山間に、百戸許りの一村落がありました。所謂山明かに水清く、人情も敦厚で。此の村の出身者に海軍の參謀として、嘗て日清役に參加した將校がありました。老年と何か大したことではないが病氣もあられた様子で、休職して數年來舊里に歸養せられて居られました。性質が極めて淡懷活達で眞に軍人肌で、所謂竹を割つた様なこんな人をいつたのでせう。身体も偉大で白髯胸に垂れ、何となく仙容を帯びてをられた。家族も少く甚だしく富めるではないが、多少父祖の遺産もあり、年金とで悠々生活せられ、娛樂として花卉や野菜を栽培し、時に謠曲の聲が門外に洩れることもある。よく村人を集めて新聞雜誌上や、世間の出來ごとを話して聞かせ、暗に此の交通の



不便な村人の知識が世間並に後れざる様にと、一つには忠君愛國の志氣を涵養せらるゝを、唯一の樂しみとせられて居つた。口癖の様に「己が十年若いと、こんな山間に百姓をしては暮さんが、年には勝てぬ」と、何かに付けても山間に「と年のことを能く云はれるから、誰云ふとなく陰で山間老將といふ綽名を付けて居りました。時々自村のみならず、近隣の學校・青年會・軍人會などから、頼みに來ると喜んで出かけて演説などせられ、海事思想を吹き込まれ、山間老將の名は近郷の通りものとなりました。此の綽名が自然に自分の耳にも入る様になり、此れは己にはもつてこいで、滅相氣に入つたと、自ら此の山間老將がなどと、演説などにも用いられる様になり、本名よりは此の方がよく通つて分りよい位になりました。こんな氣質の方ですから、日露の風雲が急になつて、撤兵問題などが矢ヶ間敷なりかけてからは、常に慷慨せられ殊に開戦後は、村人の會合も屢々行はれて、海陸の戦況などで、素人に分りかねる所は委しく説明せられ、我が軍が大勝利の報があつた時などは、百姓仕事の邪魔になるも拘はらず、呼び集めたり、數人集まつて居れば出かけて話し掛けられたものであります。能くある例ですが、村内に碁や將棋の強い老人が住んで居ると、其の村の若ものや子供まで、皆んな自然にこれが強くなり、他國の商人などが入り込んで、手合せをして驚くことがあります。こんな工合で此の老將の住んで居られる近村のものは、自然に軍事思想に富んで居る所に、此の敵艦隊の航路問題が起つて、彼の處にもこゝにも、三人集まれば口角泡を飛ばすといふ有様でした。一日何かの事で村内集會があつたが、其の相談の要件はそつちのけとして、此の議論のみに驚々として決しません。或る一人が「こゝで自分天狗の論ばかりするより、此れは山間老將を御訪ねして捌いて貰ふ方がよからうと云ひ出すと、皆々「それが宜い」と打ち揃つてこれを訪

ねることになりました。村長・小學校長・醫師・在郷軍人・村會議員などで出かけました時、老將は縁先に踞つて自培の花弁を眺めて居られたが、村人が集まつて來訪する様子を見られて、待つて居つたといはぬ許りにこれを迎へられた。時候の挨拶が済むや済まずに先づ村長が口をきつて、

村長 今日是非貴下の御裁斷を願はねばならぬことがありまして揃ふて伺ひました。

老將 それは何かよつばご六ヶ敷いことかな、己れには村内のことは一向分らない、まあそれよりは今日の新聞を見たかい、愈々敵艦も臺灣の東岸に出かけたぞ。

學校長 いやその事に就て皆んなで伺つたのであります。

老將 さうか面白い、それなら話せるぞ、さあ、聞かう。

村長 先刻の元氣で先生の二道論から始めて下さい。

醫師 眞打ちは後からぢや、先づ前坐から。

校長 そんなら露拂ひは僕がやりませう。僕は敵艦は臺灣の海峡を避けて東に廻るは廻つたが、必ずその北端即ち臺北邊を衝いて、我が守りが薄ければこゝを假根據地として、時期を見計らひ對馬海峡に出でんとするであらうと思ひます。

村長 私は對馬海峡は我が守りが最も固いことは敵艦も想像しますから、難きを撰んで來る筈はないから、必ず日本の東岸に廻り、津輕か宗谷に向ふものと思ひます。其の間には一時は大嶋か或は小笠原嶋に、據りはしまいかと心配します。

甲議員 私も東方論者でありますが、私は一度は必ず東京灣口に威嚇砲撃をするであらうかと、此れが一番心配であります。

老將 皆んな一理があつて面白い、さあ眞打の二道論を聞いて、僕の考えを話して批評



を仕様う。

醫師 僕の二道論はかうであります。敵艦隊は必ず東西二隊に分れ、一隊は儀容を盛んにして、此れが本隊なるかの如く装うて、對馬水道に向ひ、我が主力隊を此方に引きつけ、一會戦して敗北は覺悟の前で、善い加減の時に上海邊の中立港に逃げ入り、眞の有力艦はこつそり東を廻り其の隙に浦蘆に逃げ込まんとするではなからうかと憂ふるのであります。結局我にも二道を扼するの準備も手運びも出来て居るには違ひはありますまいが、我の手薄き方に彼の主力が現れる様な手違ひは出来ないかと、心配で心配でならぬのであります。

老將

成程、外には最早御議論のある御方はありませんか。

乙議員

私の心配を一つ聞いて下さい。前に村長も述べられた様に、對馬海峡は制海上、國防上最も大切なことは誰でも、素人でも想像するところでありますから、敵もこれを避けるであらうとの常識論で。我が海軍は若しこれを利用し、對馬海峡は却つて手薄にして、東方に我が主力艦隊を廻して居られ、然るに敵の主力が此の海峡に現はれる様ふなことはないかと心配します。

醫師

一体我が聯合艦隊は今何れの處にあると御考へになるのですか。

老將

そんなら先づその問題から私の考へをお話しませう。平生なれば私の所には新聞や世間に洩れぬことでも、舊同僚から内報があつたりなどして、分つことも多くあります。私も色々探つては見ましたが、此度許りは一向分りません、方角がつかえません、これが即ち東郷大將の御偉大ところであります。然し諸君一体軍艦の食物とは何ですか、石炭でせう、人間の食物は申す迄もなく米麥が主です。何万といふ兵員

と、十何万噸といふ軍艦とが、三ヶ月以上根據地としてをるには、先づ此の二つが豊富で自由な所でないならばならぬ筈です。然して交通が頻繁の所では直ちに外間に洩れますから、九州の北端などではとても秘密は保たれません。第一に朝鮮の南端か、第二に北海道の一部より外に地はありますまい。敵艦が對馬水道に來れば朝鮮、津輕水道に來れば北海道にあつた方が便宜は多いに違ひありませんが、又何れにあつて何れの水道に敵艦隊來るとしても、哨船・望樓等は各要地に手落はありせんから。たとへば諸君は未だ知られませんが、此の海戦前迄に海底電線が、ちやんと八丈嶋まで通じたといふ内報を私は得てをります。我が國の日本海沿岸線は、太平洋沿岸線よりはよほど短い位ですから。此等の諜報一電があれば、敵艦より我が艦隊は先き廻りをして、要撃するに少しの差支もありません。先刻八丈嶋・小笠原嶋などの話も出ましたが、此れにはとても充分の防備はありませんのは分り切つとりますが、又少しも其の必要はありません。例の石炭と糧食との話で分る通り、敵艦一日こんな無益の所にぐずぐずして居れば、一日だけ最も大切な石炭と食料が減る譯です。東京灣口には觀音崎に砲臺があります。此れも心配はありません。

村長・甲議員（小聲で） 我々は落第ですか。

老將は續けて

老將 臺灣も先づ心配はありません。或は我が海軍では故意にこゝに隙を見せたのかも知れませんが。敵艦よし臺北に這入つて一時碇泊したとしても、旅順の様に一つの砲臺もなく、封鎖して撃滅するのは易々たるものであります。たとへ一ヶ月や二ヶ月こゝに據つて見ましたところが、敵に不利でこそあれ必勝の算は立ちません。敵もまさか



そんな愚策はどりますまい。二道論も一寸面白いが深く軍事眼から見れば心配するに  
足りません。

醫師は手を拍つて、

醫師 皆んな落第です。そんならちよつとも心配ありませんか？

老將は真面目の顔色をせられて、

老將

いや、外に大いに心配があるのです。戦艦及び巨砲は遙かに我が上に出てをるし、  
其の乗込将卒も久しく歐洲に雄飛したる精銳を抜いて、又戦時大艦隊殊に三百噸以下  
の多數の驅逐艦を伴つて長路の航海を遂げ、一隻の落伍を出さなんだ手際に見ても、  
決して侮るべき敵でありません。その上に祖國の存亡を一艦隊に乗せ、將卒と共に必  
勝を誓ひ、所存の臍を固め生還を期してをりません、相手に取つて不足のない敵であ  
ります。我が海軍でも疾くにちやんと準備が出来て、手ぐすね引いて今や遅しと待ち  
受けられてをるに相違ありません。が私の心配するのは唯天候であります。近日例年  
になく風が荒く、又此の時節は濛氣が深い、實際日本海の濛氣は實際したものでなく  
ては想像も付かぬ位で、真に鼻を摘まゝれても分らぬとは此の事でありませぬ。運悪し  
く暴風でもありますと、充分の會戦は望まれません。併し天祐は常に我が國にありま  
すから、當日は相當會戦の出来る天候であらうと慰めてをります。

醫師

若し夜間に忍んで艦列も整へず、各艦散在隨意的な航路を取つて遁竄する様なこと  
はありますまいか。

老將

その御心配御無用です。彼の一番恐れてをるのは、我が水雷及び驅逐艦の襲撃で  
あります。此等は夜間が最もやりよいのですから、必ず夜間に來る様な心配はありま

すまい。何うしても我が東郷大將の御戦略は畏れ多くも 陛下の御前に誓はれた通り、

敵の艦隊を全滅せしめんとせらるゝにあるのですから、容易の仕事ではありません。

こゝ一週間を出でずして愉快なる御報導をして、共に喜ぶことが出来ませう。

皆々 いや有難う御座いました。御説明でよく分かりました、大いに安心した所もありま

す。何れ又伺ひします。

萬人皆こんな心配や疑ひは持つて居たので、此の一週間は到る處此の噂さでもち切つて  
居りました。それにしても我が東郷大將は何處にどうして居らるゝやら、少しも我が機密  
は洩れませんか。我々國民には海軍の作戰計畫は少しも知られて居りませんか。盲  
ら探りに探つて、我が海軍の籌謀が一々その圖に當つて居りますか、或は多少の齟齬が出  
來てをりはしませんか、茫乎として窺ふことが出来ませんか、却つて大いに心配が少く  
悶々の情を緩うしたものがありませんか。彼我對勢の狀を詳にしませんから、喜ぶにも感ふ  
るにも、自然に輕いところがありました。大本營及び海軍當局者は、探偵嚴密で謀報が  
頻りに至り、敵艦の行動時々刻々の狀を詳にせられ、一々これを圖上に記入せられ、或は  
我が思ふ程に來るか、或は外れはせぬかと、作戰上に照し合せて俟たるゝ心事に至つては  
眞に切實にして、一報から一報の來る間、覺えず手に千鈞の汗を握られたことは、幾度あ  
つたでありませうか、察するに餘りがあります。勝算はあると云ひながら、戦は時の運に  
よる、敵艦バツシ海峡を通過した確報を得られてから、一かばちか乗るか反るか、國運を  
一舉に決する大海戦も、愈々こゝ一週間を出でざるべきことを覺悟せられました。當局者  
は當局者として、大なる責任と心配と戒心を以て、此の一週間を過ごされ、國民は國民  
として、或は杞憂し、成は期待し、此の一週間を過しました。實際當時國民の情としては



又止むを得ぬ次第でありました。

恐懼の極みではありませんが、仄かに伺ひ奉つる所によりますれば、大元帥陛下にも此の程より御假床に入らせられ、政事も聞かせられず、寢食をも安んせさせ給はず、時々神祇祖宗を禱り給ひ、屢々沈痛にして優渥なる詔勅を我が艦隊に下し給ひ、大いに海軍人の士氣を奨励し給ひしと。これを承はる臣民誰か陛下の臣民を愛し、國家を念慮とし給ふ聖恩の厚きに感謝し、流涕滂沱たらざる者がありませうぞ。況んや海軍の將士おやであります。其の苦心慘澹骨を刻み、肉を殺ぐの思ひあられしは、當局者の外、到底その一端をも想像出来ません。一夜にして頭髮の白髪となつたといふは、かゝる際のことをいつたのでありませう。

#### 六、日本艦隊の軍議

蛟龍の深く九地の下に潜むが如く、我が艦隊は何れの海峡を扼し、如何なる謀を廻らせしかば、その詳細なること軍事の秘密に屬して知ることが出来ませんが、一日の懈怠もなく一の遺算もなかつたことは測り知られます。唯三四の世に公にせられた從軍將校の談話を綜合して、其の一端の窺ふの料とし、軍謀の主要を補綴記述し、國民たるもの、切情を慰する外ありません。夫れ我が聯合艦隊司令長官東郷大將は二月六日東京を發し、佐世保にて再び三笠艦に坐乗し、豫て調査選定されたる鎮海灣に入り、これを根拠地とし巡洋艦を派して臺灣を警戒し、偵察艦を放ちて新嘉坡以西を探知せられました。鎮海灣は三面山を負ひ、其の嶺高く煤烟を泄らさず、前には嶋嶼横はりて灣口を覆ひ、波浪を防ぎ、且つ人の視界を遮り、水道爲めに三派に分れ、灣内水深く大船巨舶も岸近く泊し、其の廣さ大

艦隊を容るゝに充分で、もしこれに設備を加ふれば、世界有数の良軍港となるに足りませうです。附近物資豊かなるも交通甚だ不便にして、我が秘密を保つに最も適當でありました。又敵艦東方に迂回するも、悠に之れを遊撃するの手筈が出来ます。眞に好箇の根據地で、我が海軍が此れを選定せられたのは最も得策でありました。天朗かに風靜かなるの日遙かに灣内を望めば、東郷・上村の主力艦隊を始めとして、片岡・出羽・瓜生等の巨艦四十餘隻、旭の御旗を春風に翻へし、春潮波穩かに恰も巨鯨の眠るが如く、驅逐艦・水雷艇は其の間を点綴し、小蒸汽船は水禽の如くこれを縫ふて走り、運送船は港口に向つて去來し、水面遠く線を残して馳せ、夕陽斜に照して煤烟數條空に棚引くの邊、海鳥飛揚す、好景眞に燈臺の様ですが、一たび射撃演習の始まるや、百雷一時に發し、水柱天に朝するの壯觀を呈します。其の將校の從軍記に、鎮海灣の五ヶ月といふものが、博文館の日露戰爭實記に出て居り、此の時の實況が分りますから、其の文を摘録しませう。

今になつて二十ヶ月の戦闘生活を懐ふと、まるで夢の様で、何が何だか未だに頭が判然しない。然し經て來た戦を思ひ浮べること、艦内生活を回顧すること、いつでも最先に念頭に現はれるのは、水兵の苦勞と水兵の勳功で、一將功成つて萬骨枯るといふ通り、水兵ほど無名の英雄はありません。將校は何れも戰鬥が其の身の天職であるから、死なうが傷つかうが、豫め覺悟して居るが、下兵以下はさうではないです。彼等は國民として戰ふのであつて、其の本分は別にあるのです。身を軍籍に置けばこそ軍人として闘ふのであつて、彼等平時に在つては一個の良民である。此の良民が國の爲めとは云ひながら、命を失ひ身を傷け、戰鬥狀況が公にされても、著しく其の名の擧るの將校ばかりで、下士以下は多く其の名も知られず、永久に海底に眠つて了ふ、死は本懐とは言



ふものゝ人間としては恨み長しと云ふべきでせう。然るに戦闘は半以上彼等の良不良によりて勝敗が定まる、これは私が云ふまでもなく誰でも知つて居ることですが、私は生れて始めて戦場に出て殊に此の感が深かつたのです。彼等は不自由な艦内生活に對して毫も不満を訴へぬ、のみならず一度戦場に出たからは、身は亡きものと思へ、家事は顧るな、骨肉は念頭から去つてしまへなど勵まされ。且つは此度の敵其の者が、過ぎし日清の役とは自ら其の性質を異にして居るからでもありませうが、彼等がイザ戦闘といふ場合になつての膽力と勇氣とは、殆んど想像以上であつたさうです。成程將校は命令する、併し將校は命令することに止まつて、其れ以上敵艦を打ち又これを沈めるのは、一に下士以下の勳功であつたことを深く國民の腦裡に刻んで貰ひたい。命令だけで戦は出来な

い。最一つは彼等の實力、此れは正に特筆大書すべきでせう。實力とは外でもありません、彼等が大砲を打つに巧なことです。砲を打つのが役目であるとは云へ、彼等は一戦を経るごとに一段巧となり、一演習を行ふごとに一階だけ進歩する。聯合艦隊が鎮海灣に集まつて、敵に對する準備をして居つた折です。此の頃の日課といふては唯だ實彈射撃の演習ばかり、明けても暮れても砲の演習のみやつて居つて、私等も終には飽きが來た位でしたが、此の結果は實に驚くべきであつて、恐らく砲手の精神は一管の砲身に打ち込まれたのでせう。戦争以前には一割五分乃至二割の命中であつたものが、四月の末五月の初頃には、圓らざりき七割の命中といふ好成绩を得たのです。あゝ此の熟練敵艦來るとも怖るゝに足らず、イザ來れと腕を振して待つて居た所え現はれたのが運の悪い波艦隊でした。のみならず練りに練つた砲手の快腕はいよゝゝ其の効を逞うし、所謂鬼に金棒であつて、終に日本海の空前の海戦となつたのです。私に云はせると波艦

隊を全滅せしめたのは勿論、上の御威稜が第一で、次には長官の機畧が宜を得たのであるが、さてこれに次ぐものはと云つたら、憚りなく砲手の心血と答へよう。勝利の要素は全く砲手の熟練にあつた、そして其の熟練は一に鎮海灣の五ヶ月にあつた。

此の飽きつばい演習の際東郷大將は、一日否、一時間の懈怠なく、來る日も來る日も艦橋に立たれてこれを監視せられました。これに勵まされて將校より兵員に至る迄、その奮勵は並み一通りではなかつたといふことであります。

敵艦の狀報至るごとに各司令官及び參謀等は旗艦に會して、時々軍議を凝らされたは云ふまでもありますまい。一日敵艦は果して何れの水路を選んで浦蘆に向ふであらうこの最重要なる問題に就て會議が開かれました。多く津輕と宗谷を擧げて論争し、その云ふ所は各一理がありました。東郷大將は埃期せらるゝ所あるが如く一言も發せられぬ、頭を俯して黙聽して居られました。論議容易に決しさうにも見えませんとき、加藤少將を顧みられ、參謀長の御意見はと聞かれました。

參謀長 敵も去るもの色々の術策を弄してをりますが、何れの海峡に向ふも我が迎撃を免るることの出來難い位の覺悟はして來て居る筈である。全しく一決戦を免れぬとすれば最も近航路を選むのが當然であります、敵艦隊の航路は對馬水道より外ありませんと辞色頗る嚴然たるものがありました。

大將 參謀長の意見は最も當を得てをる、諸君と共に其の備へをなさう。

と。これを敵方の記事に比べて、口中將も恰も參謀長の此の言を鸚鵡返しにした様な意見述べてをる。名將と名將の考が符節を合せるが如きものがある。此の兩名將両横綱が晴れの土俵に上るのであるから、此の角力は面白く見えたえのある勝負に相違ありません。



五月十六日に至りカムラン灣に一敵艦なしとの確報を得てより、小蒸汽船の往復一層頻般となりまして、各艦隊何となく活氣立ち、人々喜色に満ちて見えました。旗艦の會議室は屢々開かれ、細心にして膽大なる東郷大將を助くるに冷靜にして果斷なる加藤參謀長を以てし、策定せられた戦略は次の如きもので、東郷司令長官は全將校を旗艦に集め、其の軍議を傳へ且つ訓令せられました。

諸君決戦の期も數日の内に迫つて、敵の艦隊も愈々對馬水道を強行通過するの意志であることが略推想せられる。此れは我々が豫て期した所で、又我に最も便宜の多い所である、諸君が待ちに待たれた日は近づいた。諸君の忠勇及び各兵員の技倆、殊に砲手の精練を現はすの日は來た。我が勝利は疑はないが、我々は勝利位には満足が出来ない、是非とも敵艦を全滅せしめ後顧の憂ない様にして、大元帥陛下の歡慮を安んじ奉り、國家を泰山の康きに置き、五千萬の國民をして枕を高くせしめねばならぬ。此の大覺悟を以て各員手落なき準備と奮勵とを祈る。敵も決して侮ることの出來ぬ敵で、敵にとつて不足のない敵である。諸君も疾くに御承知の通り、敵の主戦艦の噸數は我よりは却つて五割強く、巨砲の數は殆んど倍してをる。併し我には驅逐艦・水雷艇が多數である、又速力に於て我が大に優つて居る。砲術に於ては黃海の戦に見るに照準の迅速確實なること、彼れ一發する間に我は三發し、併かも命中數が彼は十發二中以下なるに、我は十發七中である。此れ等の魚形の優秀なる点を以て見れば、我が一門は克く彼の三門以上に當るに足る、必勝は期せられるが、此度の戦は勝利のみにては決して満足せられぬ、若し彼の有力艦數隻をして浦壙に入らしむるも我が國安の妨げとなることが多い、故に誓つて敵艦隊を全滅せしめねばならぬ。故に安然の上

にも安然を謀りて、諸司令官及び諸參謀と胥ひ議して策定した戦略がある。今よりこれを説明して傳へるから、諸君に於ても氣付かれた点があれば遠慮なく發言せられて充分に審議を盡されたい。我々が策定したのは先づ假りにこれを、七段戦法と丁字及び乙字陣法と名付けておく。

七段戦法とは四晝夜を期し、濟洲嶋沖に始まり浦壙港口に至る間を七區に分ち、晝夜連續攻撃するのである。第一段は前夜を以て、我が驅逐艦及び水雷艇をして敵の進路に待伏して夜襲し、第二段は其の航路に浮流及び敷設水雷を蒔き、此の二段の豫備戦で、我より優る敵艦の勢力を幾分なりとも殺いで、後に本戦に入らんとするのである。此の豫備戦と本戦に於ける夜襲に就ては、一に我が勇悍なる驅逐艦隊及び水雷艇隊各員の奮勵を望むので、其の結果如何は直ちに此の海戦の勝利に至大の影響を與へることである。

第三段は最も貴要で、白晝を選び我兩艦隊の決戦で、いふまでもなく此の會戦の主眼目である。此れには餘り海面が茫漠と廣過ぎては敵艦を逸走せしめ易いし、狭きに失しては彼我百餘隻の大艦隊の變針回轉が意の如くならぬ憂ひがあるから、先づ沖の嶋附近に邀撃するのが適當と思ふが、これは敵艦の來る時刻にも大いに關係があるから、臨機處置を取らねばならぬ場合も出來る。我の主力艦隊は先づ十二隻で、これが先頭に進むが順當であるから、余及び上村艦隊がこれに當り、敵の後尾なる補助艦隊には片岡・出羽・瓜生・東郷(正路)の諸艦隊を勞し、反航し後方から包圍掩撃して、敵の後尾を亂し、且つ退却通走せんとする敵艦を攻撃して、逃がさざる手段を取りたい。敵艦を後方に逸せしめても戦果を全うすることは出來んから、我が補助艦隊員の



責務も重大である、最も慎重の態度を望む。

第四段は晝戦につゞく夜襲で、其の効果は一に驅逐水雷兩隊の勇戦による。

第五段は我が速力の優勝なるを利用し、晝戦が終ると後を夜襲隊に一任して。夜襲戦の間に先駆けて、鬱陵嶋を東西に引く一線に、我が全艦隊を排置して待ち受け、翌朝逃れ来る敵の殘艦を掩撃するのである。

第六段として猶殘艦あれば、更に鬱陵嶋と浦湊間に一會戦し、再び夜に入るべきを以て、夜中に前夜の如く先駆けて浦湊港口の東西兩水道に我が艦列を敷き、此の七段返しを以て最後の殘艦を殲滅せんとするのである。

次に丁字及び乙字陣法の大要を云ふと、此れは我が主戦隊が敵の主力に對する陣法で、丁字とは敵の先頭を壓して、始めはイ字形に段々丁字形に近く進むのである。戦海史上に古來より空前の大海戦として今日迄戦例の第一と推さるゝ、トラファルガルの海戦に、英の名將ネルソン將軍が採られた陣法は、西佛聯合艦隊が將に通過せんとする舷側に向つて、殆んど直角に勇敢に突撃したのである。當時英國海軍々人の元氣旺んなりしと、ネルソンの沈勇と砲術の敵に優りたることにより、遂に空前の大勝を博して今日英國隆盛の基を開いたが、英國の損害も亦尠くなく、主將ネルソンも名譽の戦死を遂げたのは諸君が知らるる通りである。余の丁字法は殆んどこれを倒用した觀がある。これは敢て新奇なものではない、我が國にては數百年前水軍と稱した頃より行はれた所で、敵の航路にイ字形を取つて進み、敵の先頭を壓して段々丁字形に近づくと、我が速力が彼に優らねば實行し難い、敵の後續部隊は未だ充分射距離に達せざる内に、我が全線の砲火を敵の先頭艦に集むるのである。敵の先頭艦は旗艦である、

旗艦をして戦闘力を失はしむれば、敵の陣形が亂れる、隊形を亂さしむれば、我が勝勢は已になつたものと見てよい。乙字法とは一隊は猶前面を壓するのみに、早く進みし一隊は、回轉し折れて其の側面を攻撃し、乙字に近く敵艦を兩隊の十字火下に立たせるのである。昔の水軍これを正奇の二法とした。先づこれを大要方略として細かいところは、其の時々により臨機應變の所置をとり、信號を以て訓令することもあらう。諸君、能く此の旨を体して策戦に翻轉なきを期せられよ。今日の一戦は大局の決する所であり、我が聯合艦隊の上下各員は各々其の職責に應じて畢生の心力を竭し、必勝を期し有終の功を遂げられよ。

尋て戦闘實施の覺悟に付き、

改めて云ふ迄もなく平素充分の修養があることは深く信じてをるが、此の最後の戦は寸毫の違算なきことを期せねばならぬ。總て戦時に於て士氣の消長は直ちに戦果に關するものである、敵の艦の慘状は見へ難く、我が損害は直ちに心目に觸るゝを以て大抵敵を強く、我を弱く見勝ちである。我苦戦に陥れば敵は更により以上難戦してをるものと看破せねばならぬ。古の兵家はこれを七分三分の叶合と戒めた、即ち敵七分我三分の勝利と思ふ時は實際五分五分である。又既に戦を接するに至りては又防禦を云ふの要はない、積極の攻撃は最良の防禦である。

と、諸將校皆よく此の旨を了解し、各歸艦し其の部署を定められた。此の作戦の前二段は、天候險惡で風波高く、廿五日より廿六日は哨艦さへも任所に就くことが出來ず、五嶋に假泊して難を避けた位でありますから、遂に實行の機會なく、又後の二段は敵艦隊早く殲滅して、これを行ふ必要を見ませんでした。此等の作戦を見ても東郷大將の細心水も洩ら



さざると、勝利位に満足せられず、如何なる困苦を忍んでも必ず敵艦隊を全滅せしめんと、大覺悟大勇猛心を存せられしは明であります。又天候の爲めに初二段の作戦を實行することが出来なれば、我が海軍の名聲を全うするに於ては却つて僥倖であつたかも知れません。なせなれば、既に幾干にても手を負ふた敵艦隊と勝負して勝つたのでは面白くない所があります。未だ無傷のしかも我より優勢なる敵艦と、正々堂々と戦つて全勝したのであるから、一層名譽な譯ではありますまいか。又敵に果して七段まで戦ふ準備を整へてあつたかどうかと疑ふものもありますが、これは敵の某參謀將校が書残した次の捕虜の實驗談がよく證明してをります。

我々は日本海大戦の翌朝になつて、始めて浦塩に入ることが出来るであらうと稍安心した。我々は昨日の戦で殆んど弾丸を射盡した、此れは日本艦隊も同一であるべきを以て、何れかの根據地に歸りてそれを補給する必要がある、我々は其の間に北走する暇があらうと思ふたが、計らざりき鶴岡嶋に先き廻りせられて、遂に降伏の止むなきに至つた。捕虜となり日本艦に入り、第一に驚いたのは、猶弾丸が石炭庫の隅にゴロゴロ澤山残つて居つたことである。是れは日本艦隊が、石炭は十日位でその餘分を積む必要ないとして、石炭の載量は減せられるだけは減じて、其の代りとして弾丸と火薬は充分に積み込まれたのであつた。

ど。これを以て見ても七段戦法を實行する準備はチャンと整ふて居つたのは明で、正を以て合し奇を以て勝つる原則により、正攻奇襲交々加ふるの大方略でありました。東郷大將の執られたる戦法はネルソンの如く、一氣呵成に功を一時に争はれたのではなく、數段の大計畫と、巧妙なる陣法により、大事をとりつつ漸次に全勝を處せられたので、その細心真

水も漏さぬ金でありました。是は當時我が國海軍の現状より打算せられた賢明なる仕方である。艦積の大なること、速力の疾きこと、兵器の鋭きこと、甲裝の堅きこと、探海燈がある、無線電信がある、水雷がある、此等を實戰場裏に遺憾なく運用する手極は、昔日の簡易なるものとは比べものになりません。東郷大將の策戦が果して適中するや否や、又如何なる効果を収めしやは、これを當日の戦況に徴するより外ありません。

謀報の通り十九日バツン海峡を通過したとすれば、既に先頭の哨艦より何等の報に接せねばならぬ日取となつた、二十四日に至りても何の様子も分らず、今日こそはと待ち暮した二十五日も少しも消息が来ません、將卒皆千秋の懐ひでありました。是は敵將の猜策で上に一言した如く、ことさらに航程を遅延せしめ、我が注意を東方に誘ふたのであります。従来稍々勢力ありし敵艦の東走説又起り、我が戦策もこれに應じて、艦隊の一部を北航せしむべしとの論愈々勢力を加へた。今まで斷乎として退けられし東郷大將も、二十五日に至り敵の消息を洩さざるに至つて、稍々色を動かさんとせられました。各艦隊司令官に嚴封命令書を交付し、變に應ずる準備とせられました。此れまで不秩序に碇泊せし艦隊は已に艦列を整へ、出羽艦隊は去つて九州の一角を守り、片岡艦隊は遠く出でて遙かに西方を警戒しました。よし敵艦此の海峡に来るとも、東西何れの水道に来るや、頃日來濛氣多く豫定通り敵と遭遇するは中々容易のことでない、一たびこれを謬らば、折角の好客を北方に逸がすことがないともいへない、其の重任は一に哨艦の双肩にかかるとあります。二十五日敵の特務船數隻上海に入るとの報があつてより、又々公衆を迷はしめました。是も我が注視を西方に引き、敵の主力は東方に向つたのではないかと疑へば疑はれます。然れども東郷大將の明察なる、敵は手足纏ひを去りて此の方面に来るものと斷せられ、各艦



をして實戦に際し障害となるべき帆網を去り、ボートヲ下ろし、甲板上無用の長物を片付け、着々實戦準備移らせられました。次で敵艦三十餘隻ザツトル嶋に集まるこの報がありました。更に哨艦を増した、各艦は能く命せられた哨所を守り、連日連夜風の朝も雨の夜も、一寸の油断も出来ません。哨艦や望樓員の艱難困苦は、實際に當つたものでなければ想像も出来ぬ位で、戦争は心配には違ひないが、又壯快な所もあるし、時間も海軍では一會戦が數時間を出でることは稀であります。望樓員と來ては、數ヶ月の長き一孤嶋を守り其の人員も數人に過ぎず、外部との交通は絶へ、物質も欠乏勝ちで、晝夜渺茫たる海原と睨み競で、一寸の外見も出来難い位で、此の戦時中にも、望樓員に往々發狂者を出したといひますが、無理からぬことでもあります。見込通りに敵と出會せしむるは哨艦の責務であります。目的通り敵と出會へば我が海軍當局には充分成算があつたさうです。歐米人中には戦艦巨砲などより割り出し其の勝敗を懸念した論も、外紙上に散見した所でありました。邦人中にも同一の心配を抱くものは少くありませんでした。實を白状しますれば私も當時これを心痛した一人でありました。こゝ數日間の新聞は飛語紛々虚實交々至るといふ有様でありました。其の二三を擧ぐれば、

本日對馬海峡附近に露艦見ゆとの報あり、一時船舶の出港を警戒せしも今これを解かる。(二十三日釜山發電日本新聞社着)

府下某所に達したる情報によれば、露國第二第三太平洋艦隊は支那海滯在中、其の組織を改め分れて二派となり、一部は太平洋一部は日本海方面に向へり。(日本新聞) 北海道廳は、擇捉嶋ルモイ村長より左の電報を受取り、直ちにこれを其の筋に報告せり。二十五日午後日本帝國軍艦ならざる艦型の軍艦の進行するを認めたり。又或る漁

船は艦型不明の艦船五隻を認めたり。(東京朝日其外)

外務省着電には、二十五日午後二時半頃、軍艦五隻、運送船三隻よりなる一艦隊吳淞沖に現はれ、同時に其の中の二隻は東北方面に向ふて去り、残る三隻と運送船は、午後八時頃吳淞に入港せり。軍艦三隻は假裝なるや否やは不明なり。(時事新報)

去る二十六日露艦隊二十一隻ザツトル附近に現はれたり、又他の情報によれば二十七隻なりと。(日本新聞)

此の様な情報は櫛の齒を引く如く至り、二十六日以来、諸新聞社は競ふて頻回の號外を發し賣子の鈴の音は東京全市に充ちました。此等は又電線を傳ふて數時間ならずして全國各所に傳へられ、日本全國五千餘万人仕事の手にくく人もなく、彼處に三人此處に五人と、恂々として此の噂さで持ち切り、快報を待つうちにも、亦一片不安の念を去ることは出来ませんでした。例の山間老將などは山莊に村人を集め、白髯を撫しつゝ得意の怪氣焰を吐いて居らるゝ狀が觀える様であります。

平時の考では、あの交通類般な琉球諸嶋や上海沖にて、一つも敵艦の牒報が得られなんだとは如何にも不思議なことの様ですら、嚴戒令後殊に露艦隊が近づいてからは、此等の航海は全く途絶して、稀に冒險的に航海したのも、皆我が艦隊に捕獲せられ、一時海上に全く煤烟を見なんだ時であります。

### 七、波艦隊の軍議

五月十三日安南カムラン灣を發せんとするとき、旗艦は信號を掲げ、敵は近く目的地は遠し、露國の運命此の一週間に決せん、一死祖國の爲めに盡せよ。



と、全艦隊に告げて出發しました。十九日夜ハツシ海峡を通過しても、ロ提督は猶ほ航路及び一般戦略を傳へなうださうですから、各艦將校達の間に種々の想像議論が盛んに行はれた様であります。セメノフ中佐の記事によりますれば、

此の日艦隊最後の演習は匆忙の間に暮れ、我がスワロフは士氣大いに振ひ甚だ有望であつた。或る所に多くの將校集まりて、

對馬海峡で我等の邂逅すべき敵艦隊は日本艦隊の全部であらうか、或は其の一部であらうか。

に付き問題が起つた。樂觀的の士官等は斷言して、

東郷は我等に欺かれて、屹度我が艦隊を北方に扼し居るに相違ない、何せと云へばテレーグ並びにクバンの二艦は、既に日本の東岸を航し、此の事實は日本國中に喧傳せられて居るに相違ない。

と主張した。されど運命は我に不利であつた。之れに反對する一部の將校等は、東郷の事態に通ずる決して我等に譲るまい。日本の東方を回航するには石炭積み取りの必要もあり、又津輕・宗谷海峡はごちらも狹隘であるから、敷設水雷の遮斷や浮流水雷の危険がある、

と。旗艦の航海長ソドフ大尉は議論好きの辯者であつた。彼れは他將校等の談論を制止するが如き調子で、

諸君一寸待ち給へ、僕の説はかうだ。我が艦隊の通過すべき最良航路は對馬海峡の東水道であることは云ふまでもない、若し天候不良なりとすれば、我が艦隊には寧ろ幸福である。東郷も此等の事は疾くに知つて居ると想像せねばなるまい、又東郷にして

兩脚器と四則の應用を知つて居るとすれば、假令日本の東岸を迂廻するとしても、これに應戰するに苦しまぬであらう。宗谷・青森は側面防禦で水雷艇隊の支隊を分置してあるに相違ない。その主力或ひは全艦隊を率ゐる東郷は、何れの邊にあるであらうか、或は更にこれを適切に云へば、主力艦隊を率ゐて居る東郷は何處に在らねばならぬか、まさか外洋に漂蕩して居る譯にも行くまいから、何れかの灣内に居るに相違ない。

航海士の一人なるパーリ少尉は、ソドフ大尉の言を遮つて、

然り、例へば馬山浦？

と叫んだ。大尉は更に辭を繼いで、それは或は馬山浦であらう、然し先づ我が輩のいふ所を聞き給へ。日本主力艦隊の留守を狙ふが如きは、最も幼稚の考へである、我等は今實に最も危険の絶頂に達して居る、萬事は近日を以て解決せられるであらう。(彼は手を上より下に強く動かしながら)或は一力兩斷に決せらるゝか、(又手を靜かに右方に動かして書物の上に置きながら)或は段々日の暮れる様に決せられるか。其の一を出でまい。

ソドフの言終るや否や四方より

どうして何の暮るゝ様に？  
との反問が起つた。ソドフはこれに答へて、  
一力兩斷に決せらるゝとしても結果は同一である、我が艦隊が勝利を得て浦撞に赴き制海權を握らんなどは、夢にもこれを想ふことは出来ぬ。二隻か三隻多くとも四隻こゝを通過し得るとも、其の時は石炭も焚き盡し、花滿開に至らずして先づ散るの運



命を免がれまい。大砲を艦上より引き上げて、浦墮籠城の準備をする位が積の山であらう。

此の時或るものは「えらい豫言だ」と叫び、謹聴々々、素張らしい議論などの聲が聞えた。水雷長バグノフ大尉は昔年太沽攻撃の際負傷した勇者であるが、銅羅聲高く全然で奥太利の國會の様な騒ぎぢやあないか。

ど。他の各艦にもこれに似た議論は屢々行はれたこと、思はれる。某艦に於てもこれに就いて議論が交はされたとき、其の艦長は聲を激まして、

余等は遠く地球の半面より發して、地球の半面に航し來り、ネルソン艦隊の後繼者たる名譽を以て自から任ずるもの、何を苦しんで當面の敵を捨て、遠く太平洋に逃げ隠るゝ必要があるか。一擧臺灣を屠りて、こゝに假根據地を置き、徐かに後圖をなすに若かず。

ど。年少氣鋭の參謀等は手を拍ち足を鳴らして多くこれに賛成した。が、ロ提督の意見としては、

例へ東西何れの水道を選むとしても、事なくして浦墮に入り難いは明らかである。又一時臺灣によるとしても、唯時日を遷延するのみで、遅かれ早かれ、東であれ西であれ、一決戦は到底免がれぬ。又此れは武人の本意で、我々歐洲を發してよりの素願である。故に最良最短の對馬水道を強行通過する外はない。

と宣言し、又ロ提督は其の陣形に付て、東郷は其の最良なる戦艦十二隻を編して、我等を迎ふるに相違ない、我も十二隻を以てこれに當らん、始めより單縱陣としては徒らに長く、十數哩に亘り、統率にも不便

多く、且つ早く敵に發見せられ易い憂ひもあるから、二列縱陣を作り、優等艦を右側に劣等艦を左側として進航し、中間に假裝船運送船を入れ、ウラル・アルマー・ツ・ヌウエー・トラナの快速巡洋艦を先頭哨艦として進み。敵艦を發見すれば直ちに右列の戦艦隊は先進左轉して、左列劣等艦の先頭に進み、單縱陣に變じ、假裝船運送船は右側に避け、哨艦は引き返して此れが保護に就くこと

を訓令した。會議終りて三鞭酒の盃を舉げた。提督は崇嚴なる口調で祖國及び艦隊の武運を禱り、露帝及び波艦隊の萬歳を唱へ、各員これに和し、握手訣別して各々自分の艦に歸つた。其の時旗艦に樂聲が起りて嚟曉としてこれを送り、南海中一種悲壯の光景を現はした。

五月二十七日未だほの暗き内に濟州嶋沖合を過ぎ、雲煙模糊の裡に同嶋影を認め、豫ての訓令の通り二列縱陣で進んだ。此の時早くも先頭艦は日本艦隊の出現を認め、敵は近し警戒せよ。

の信號を與へた。須臾にしてその進路を遮らんとするものは日本の弱小巡洋艦隊なるを知つた。そのまゝ少しの動搖もなさず、戦闘準備に着手し、進航をつゞけた。日本艦隊は一旦數哩の近距離に接せしも、漸次北方に引き返した。是に於て我が艦隊は旗艦スワロフを先頭として、濟州嶋東南より對馬東水道を指して突進した。

五月二十七日に至つて報導は段々確實となつてきて、觸接点は愈々近づいた。

今朝敵艦對馬附近に現はれたりとの報があつて、西航船舶の出港を禁止された。

(下欄二十七日午前特電東京朝日社着)



敵艦隊對馬海峽に近づきつゝありこの報があつた。(福岡二十七日正午發電時事新報社者)  
敵艦隊對馬海峽に出現の模様あり、遙かに砲聲を聞く。(二十七日午後唐津特電時事者)  
對馬海峽の風雲は愈々急にして、

砲聲夜に入りて止まず、遙かに遠雷の響くが如し。

などの急報頻々として至る。敵艦三十七隻我が艦隊も亦之れに匹敵す。大なるは一万五千噸、小なるも數千噸を下らざる、巨艦艦種百餘隻、歐亞兩帝國の運命を賭して、今現に戦ひつゝあることを想ひ、其の龍の攘ふが如く虎の搏つが如き狀を想見するも、砲聲殷々として耳に滿つるの感があります、覺えず腕を扼すれば骨鳴り肉躍る。

二十七日朝、敵艦隊對馬海峽に現はれ、午後より夜を徹して砲聲の頻りに聞へしことは各種の報道によりて最早や蔽ふことの出来ぬ確實の事實となりました。故に同日夜半には遅くも戦況の一半を聞くことが出来るかと、種々の想像に耽り枕に就くも眠りを安んずる人は恐らく一人もなかつたでありませう。號外の鈴の音を待ちつゝ夜を明しました。勇ましき鶏聲は曉きを報じ、東天紅を潮し二十八日の天は已に明けるも、猶一つの聞くところもありませぬ。數日來の心配と昨夜の不眠で、各人まるで狐にでもつまゝれた様なもので茫乎して噂するにも元氣が抜けました位で、又此の朝三笠沈没の報さへ傳はりました。漸く日晡近く二三の私報を得ました。

昨日の海戦開始より今日に至り、敵の戦艦及び巡洋艦六七隻を撃沈し、尙退路を扼して包圍中である。

開戦は昨日午後二時に始まり、直ちに敵の巡洋艦一隻を撃沈し、尙奇襲を試みて敵の戦艦一隻を海底に葬つた。

昨日より今日にかけて、敵の戦艦及び巡洋艦四隻を撃沈した。

勝利は勝利に相違ないでせう、けれども從來誤謬の多い私報のことですから、未だ俄かに信ずることも出来ませぬ。果して吉？ 外字新聞中には我が國の敗報を傳へたものすらありました。何にしてひ海軍省の公報の遅いことは第一の氣がゝりであります。二十八日夜は前夜にも優る煩悶を以て夜を徹しました。戦勝は吾人の信ずる所であるが、其の程度が分りませぬ。我が艦隊の損害死傷は何程なりしや、敵艦は果して幾隻位捕獲に連れ入りしや、これを聞かねば安心が出来ませぬ。二十九日の午砲は既に響き渡りしも、尙一つも公報に接せず、人々稍不安を醸し、萬々一、眞に萬々一にも凶事あらざるなきか、さても海軍省の意地の悪さよ。唯一二事其の消息を洩すものがありました、萬朝子曰く、昨夜より今朝にかけて、海軍省は活氣に充ち、徹夜にて大本營との往復頻繁を極むと。此の海戦の確報は我が國人がこれを俟つのみならず、世界の人々が首を長くし、足を爪立て、待つところでありますから、外國通信員も我れ高名をなさんづと、皆な通信紙を携へて海軍省に詰め切りましたが、その檢閲が終らねば戦時の法規で一音信の電報も國外には出すことが出来ませぬ。或る米國の通信員は檢閲官に迫り、奇智極まる一電報を示し、

日本海軍省は今正にシャンパン酒の栓を抜きつゝあり  
と。悶々の情推するに足るものがあります。然れども海軍省は大なる馳走を、一舉に世界公衆の前に陳せんとするにや、公報猶寂として聲なきこと數時、時計は刻々として既に午後三時に垂らんとするにや、出でたり出たり、其の前半の公報は始めて出ました。次いで矢継ぎ早に公報は發せられました。我れ人ともに其の結果の偉大なるに驚きました。更に我が損害の僅少なるに驚きました。餘りに安價に、餘りに土産物の澤山なるに驚きました。



た。

さて私は此れより満堂の諸君を伴ひまして、吾人及び吾人の子孫が永久に世界に向つて誇りとするに足ります、開國この方、否、人間あつてよりこのかた、其の忠烈、其の技術、其の勇氣、眞に人性美の極を發揮した、この曠古未曾有なる大海戦のパノラマ場裏に赴かんとしますが、諸君よ、しかく性急に急ぐなく、こゝに猶耐忍して聴講せられねばならぬ一章があります。それは何んでありませうか。

### 八、彼我艦隊の組織

先づ日本海々戦に参加して此の大活劇を演じ出した彼我の艦隊の組織・艦種・速力・噸數・砲種等を委しく云へば限りもないが、其の大意は前以て知らねばなりませぬから。それを表示し、且つ其の艦隊の精神とも云はるべき司令長官、司令官、參謀長等の性行のほんの一端を述べませう。これは曾我物語で講釋師がやると高見より例の六十餘大名の陣營を眺めて、遠州は相良の城主御高何万何千石御紋所は、又其の左側はと、張扇で滔々どやる所で、ほんの數字を並べたのでも云ふに云はれぬ中々興味があるものであります。こゝでも三笠は噸數一万五千、馬力は何万何千で、これを東郷司令長官の御乗艦たり、次なるはと机を叩く所ですが、私にはとて眞似も出来ません、唯表にして掲げておきませう。

### 日本聯合艦隊の組織

聯合艦隊司令長官	海軍大將 東郷平八郎	第二艦隊司令長官	海軍中將 上村彦之丞
第三艦隊司令長官	海軍中將 片岡七郎	聯合艦隊參謀長	海軍少將 加藤友三郎
第二艦隊參謀長	海軍大佐 藤井 誠一	第三艦隊參謀長	海軍大佐 齋藤孝至

第三艦隊司令官	海軍中將 出羽重遠	第四艦隊司令官	海軍中將 瓜生外吉
第一艦隊司令官	海軍中將 三須宗太郎	第六艦隊司令官	海軍少將 東郷正路
第五艦隊司令官	海軍少將 山田彦八	第二艦隊司令官	海軍少將 島村速雄
第七艦隊司令官	海軍少將 武富邦輔	特務船司令官	海軍少將 小倉鉄一
驅逐艦隊司令	海軍大佐 藤本秀四郎	驅逐艦隊司令	海軍大佐 矢嶋純吉
驅逐艦隊司令	海軍中佐 吉嶋重太郎	驅逐艦隊司令	海軍中佐 鈴木貫太郎
驅逐艦隊司令	海軍中佐 廣瀬順太郎		

### 各艦隊艦長

東郷大將旗艦		三笠艦長	海軍大佐	伊地知彦次郎
東郷艦隊		敷嶋艦長	海軍大佐	寺塚猪三
第一艦隊	春日艦長	富士艦長	海軍大佐	野元綱明
三須中將旗艦	日進艦長	報知艦龍田艦長	海軍大佐	加藤定吉
出羽中將旗艦	笠置艦長	山縣文藏	海軍中佐	竹内平太郎
第三艦隊	千歳艦長	山屋他一人	海軍大佐	山縣文藏
	音羽艦長	高木助一	海軍中佐	山縣文藏
	新高艦長	有馬良橘	海軍中佐	山縣文藏
		莊司義基	海軍中佐	山縣文藏

第一・第二・第三驅逐隊第十四艇隊之れに屬す。



上村中將旗艦

出雲 艦長 海軍大佐 伊知地季珍

上村艦隊

常盤 艦長 海軍大佐 八代六郎

第二戰隊

八雲 艦長 海軍大佐 吉松茂太郎

島村少將旗艦

磐手 艦長 海軍大佐 村上本有信

瓜生中將旗艦

報知艦千早 艦長 海軍中佐 川嶋令太郎

第四戰隊

浪速 艦長 海軍大佐 和口鱗六

高千穂艦

高千穂 艦長 海軍大佐 毛利一兵衛

明石艦

明石 艦長 海軍中佐 宇敷甲子郎

對馬艦

對馬 艦長 海軍中佐 仙頭武央

第四・第五驅逐隊、第九・第十九艇隊之れに屬す。

片岡中將旗艦

嚴嶋 艦長 海軍大佐 土屋保

片岡艦隊

松嶋 艦長 海軍大佐 奧宮衛

第五戰隊

橋立 艦長 海軍大佐 今井正義

鎮遠艦

鎮遠 艦長 海軍大佐 今井兼昌

報知艦八重山艦

報知艦八重山 艦長 海軍中佐 西山實親

三

東郷少將旗艦

須磨 艦長 海軍大佐 折内會次郎

東郷正艦隊

秋津洲 艦長 海軍大佐 廣瀬勝比古

第六戰隊

千代田 艦長 海軍大佐 依仁親王

武富少將旗艦

和泉 艦長 海軍大佐 石田一郎

武富艦隊

扶桑 艦長 海軍大佐 長井群吉

赤城艦

赤城 艦長 海軍中佐 羽喰政次郎

宇治艦

宇治 艦長 海軍中佐 金子滿喜

摩耶艦

摩耶 艦長 海軍中佐 藤田定一

岩城艦

岩城 艦長 海軍中佐 山澄太郎

第七戰隊

鳥海 艦長 海軍中佐 牛田從三郎

第一・第十・第十一・第十五・第二十艇隊之れに屬す。

水雷母艦

豊橋 艦長 海軍大佐 土屋光金

其他海防艦七隻、砲艦七隻、水雷艇四隻、假裝巡洋艦十七隻、御用船七隻よりなつた。東郷艦隊・村上艦隊を又主力艦隊とも云ふ。

東郷提督 此の大艦隊の主腦は言ふ迄もなく東郷大將であります。大將は西郷南洲及び大久保甲南と同じく鹿兒島鍛冶町に生れたのは一奇であります。僅かなる一町内から三人まで偉人を出したのは例のないことで、我が國に來遊せらるゝ外國の貴顯はよくあの邊鄙なる鹿兒島を訪はるゝが、實は鹿兒島を訪はるゝのではなく鍛冶町を訪はるゝのでありま



す。維新の際、薩艦春日丸に乗り込まれ、幕艦と戦ひしを手始めとして。明治六年英國に留學せらるゝこと實に六年間で、此の時代より頭腦明晰・剛毅・沈勇を以て學生間の評判となつて居られました。明治二十六年二月布哇の政變に際し、命を受けて渡航せられ、昨日迄は小さくとも獨立王國たりし宮城に、米國々旗の翻々たるを見、其の周邊を喪家の犬の如く往來する土人を疑視して俯仰去る能はざりしと、又米國々旗に對して敬禮をなすを肯んられせず、その假政府の大統領が米艦を訪ひしときも一も禮砲を發せられず。且つ其の上此の警備中に邦人たる一青年が、布哇政府の捕吏に追跡せられ、海中に投入し浪速の舷門に泳ぎ付きしものあるを保護し、米人の懇請終りには恐喝するにも關せず、恬としてこれに應せられず、遂に本國政府の内命下るに及び、本人自己の意志として艦を去らしめられたといふ。此等は皆大將の常に國際法に明かなるに出でたる所で、確乎たる信念の下になされたのであります。大將は平素其の部下を警めて、海軍々人は多く外國人にも接せねばならず、又屢々外國にも寄港せねばならぬから、是非國際法に通じておく必要があるといはれ、且つ自らこれに委しかりしは、高陸號擊沈の際の決然たる所置においても明かなる所であります。

日清役の際は大佐を以て浪速の艦長として、豊嶋沖を警戒して居られました。時に清國運送船高陸號なるものが、英人某を船長とし麗々敷英國々旗を掲げ、清兵千五百名を乗せ牙山に向ひました。若し此の兵を事なく牙山に上陸せしめますれば、日清役最初の戦たる牙山・成歡の役は我が國に勝算はなかつたのであります。浪速艦は直ちに砲門を向けて停船を信號した、高陸號はこれに應じて進行を止めました。更に「我に續行せよ」と命じられましたところが、「清兵船長の命に従はず」と答へました。そこで端艇を下ろし使節を遣

して、言を盡し理を解きました。時に北方にては海戦が既に開けた様子で、般々たる砲聲が遙かに聞えて來ます。人々は氣が氣ではありませんが、かゝる危期一髪分秒を争ふの際にも拘はらず、大將は耐忍慎重使節往復し、應答將に二時間半に垂んとしました。清兵英人を拘禁して逃走を企てんとする狀がありましたから、今は止むを得ません。旗信で「外國人は今なり十五分間を期し立退けよ」と命じられました。少壯士官等は切齒扼腕することゝが已に久しいが、橋頭には立派に英國の旗が翻つて居るのを如何ともすることは出来ません。大將は艦橋に立たれ沈思時計を睨めらるゝ少時にして、大聲「打て」と命せられ、砲聲數發高陸號は忽ち沈没し、清兵千五百は大方無益に水底の藻屑となつて仕舞ひました。大將此の果斷の一喝が遂に日清役の機先を制したのであります。此の報の英國に至るや上下忿慨して、將に國際談判の大事を生せんとし、我が政府内にも此の際大事の英國の機嫌を損じてはと。軍人の無謀にも困ると嘆息した人もあつたさうですが。彼の二時間餘に亘りし隱忍淹留が、一の大なる理由となり、英國上下の同情を得、殊に英國國際法の大家ホルラント博士なども、國際法の違反でないを切論せられ、遂に事なく解決しました。大將の慎沈事に處し、忍ぶべきは忍ばれ、斷すべきは斷せられる、これを以てもその一斑を知るに足りります。又大將は留學以來三十餘年殆んど海上生活を主とせられ、俺の病氣は船にさえ乗れば治ると云はれた位でありました。

日露間の雲行き何となく穩かならず、今に暴風強雨が來らんとし聯合艦隊が組織せらるるや。時に大將は舞鶴鎮守府に長官となられ些事は主に屬僚に任せて、風月を伴とし釣を唯一の樂境として一竿に親しまれ、大公望を氣取られて居られました。十年前黃海の海戦ありしとき、軍令部に長たるの身を以て出でて親ら戦を觀、無甲裝なる一郵船に乘じ、戦



場を縦横に馳突せし、西京丸の豪將といへば誰れ知らぬ者もなき樺山海軍大將が、東郷大將を聯合艦隊司令長官に推して、「東郷にして出んか、我が艦隊のこと一つの心配も要らぬ、我々は安心して宜しい」と云はれた位で。樺山大將の此の知言は、寔に誤りでなかつたといふことは、旅順艦隊に對せられた善謀善戰に証しても餘りがあります。

大將が又自ら奉せらる事の極めて儉勤なるは、乃木大將と好一對で、乃木將軍の遺邸を訪ふたものは皆その質素に驚くが、東郷大將の邸宅も今猶これに類し、とても元帥の住居とは誰も思はぬ位で、私が始めて其の御門前に佇立したときは思はず落涙しました。有名な外國人も時々大將邸を訪ひ、その握手を得て國の土産にしますが、何れも其の質素に驚きます。明治第一、も一つ適切に云へば、我が開國以來臣下として第一の勳功者は大將であります。是には誰も御異論がありませんまい。あれば私が御相手をする、さう威張るに及びませんが。此の戦時にも中佐時代其のままにて、門傾き扉破れ電話の備へすらなく、電話は御得意の米屋のを借られたとは全くの話で、唯主人の功德が門戸に燦爛たるのみでした。大將時に年方に六十才になりました。

上村中將 第二艦隊司令長官となられた上村中將も亦、薩摩華人にして、時に御年齒五十六でありました。少きときより一通りの勇悍ではありませんでした。十六才のとき戊辰の役を初陣として、白川の戦に胸部を打たれ、其の創未だ癒えざるに強て請うて箱根に轉戦せられました。後、海軍兵學校に入られ、日清役の際秋津洲に艦長として操江號を砲撃捕獲せられ、澎湖嶋占領には其の參謀長となりました。役後海軍省人事課長、造船造兵監督長となり、海軍省軍務局に轉じ、海軍軍司令部次長を兼ねられました。中將の才幹は何處にもつて行つても間に合ふのは、この官歴がよく物語つて居ます。三十五年三月

常備艦隊司令官に任せられ、聯合艦隊の組織せらるゝに際し、第二艦隊司令長官となられました。彼の蔚山沖の戦に於て恨み重なるリリックを撃沈し、コロンボイ、ボカチールを大破せしめて再び起つ能はざらしめ、遂に日本海を戦に此の三隻をして参加することの出来ぬ様にせられましたのは實に大なる功績でありました。

片岡中將 第三艦隊司令官片岡中將も亦薩南の藩士にして、資性温厚沈着、事に臨んでは快刀乱麻を断つの手腕があります。海軍兵學校を卒へ、公使館附武官として獨逸に留まれること實に六年、日清役には金剛艦長より浪速艦長に轉じ、役後常備艦隊參謀となられ。三十五年竹敷要港司令官となり、今回第三艦隊司令長官となられました。

加藤少將 謀を帷幕の内に廻し勝を千里の外に決するは參謀長の任であります。此の重任はそも何人の手に歸したてありませうか。開戦以來第二艦隊參謀長として冷靜果斷の聞へ高く、北門鎮鎗の任に當り、蔚山沖の勝利を博し、其の人ありと知られたるその人であります。好漢は好漢を知り猩々は猩々を知ると、山本海軍大臣曾て人に語らるるに、「彼の漢年少未だ太だ世に聞えないが、今の時に當り、好參謀官とならんものはあの漢を措いて他には求むることが出来ぬ」と、これは眞に知己の言でありました。島村前參謀長が司令官に轉せらるゝや、第二艦隊の參謀長より入りて聯合艦隊參謀長となりました。平素最も讀書を嗜まれ、その讀まるる所が又悉く兵學軍事に關するものゝみで、曾て無用の書を讀まれたことがない。倦めば大白を滿引して、長寛の如き氣を吐かれる。これを誰とかなす、實に加藤友三郎少將其の人であります。安藝に生れ海軍兵學校に人となられ、齡正に男盛り分別盛りの四十六、未だ一たびも外國の空氣を吸はれざる、生粹の日本男子であります。



波艦隊組織 (即ち第二・第三太平洋艦隊)

日本海々戦に参加せし、露國第二及び第三太平洋艦隊の司令長官以下、各艦長及び其の他の職員は主なるもの左の通りでありました。

第二第三太平洋艦隊

司令長官	海軍中將	ロジエストウエンスキー	全司令官	海軍少將	エンクイスト
全司令官	海軍少將	フエルケルザム	全司令官	海軍少將	ネボカトフ
全參謀長	海軍大佐	クラビエロング	全航海士官	海軍大佐	フヒリボウスキー
全航海士官	海軍大佐	アムチンスキー	全航海士官	海軍中佐	オシーボフ
航海士官	海軍中佐	バルセーネフ	水雷士官	海軍中佐	ムチドンスキー
機關官	海軍中佐	オソノルスキー	經理官	海軍中佐	フォン・ウイツテ
運送船指揮官	海軍大佐	ラトロフ			

各艦隊艦長

ロ中將旗艦

スワロフ艦長

海軍大佐

イグナチウス

第一戦隊

歴山三世艦長

海軍大佐

ブフウオストラ

ボロチノフ艦長

海軍大佐

セレブレンニフ

フ少將旗艦

オスラビヤ艦長

海軍大佐

ベール

第二戦隊

シソイウエリキー艦長

海軍大佐

オーゼロフ

ナワリン艦長

海軍大佐

ファイチンゴフ

ナヒモフ艦長

海軍大佐

ラチネーフ

巡洋艦隊 裝甲海防艦隊 驅逐艦

第三戦隊

エ少將旗艦

セムチエーク艦長

海軍大佐

レウイッチツキー

イヅムルド艦長

海軍大佐

ヘルセン

アルマーズ艦長

海軍中佐

チャーギン

アウローラ艦長

海軍中佐

エブリエフ

オレীগ艦長

海軍中佐

ドフロツウオウリスキー

ドンスコイ艦長

海軍大佐

レベデフ

スエートラナ艦長

海軍大佐

シエイン

モノマフ艦長

海軍大佐

ポーボフ

ネ少將旗艦

第三戦隊

ニコライ一世艦長

海軍大佐

スミルノフ

アブラキシ艦長

海軍大佐

リーシン

セニヤークウイン艦長

海軍大佐

グリゴリエフ

ウシヤコフ艦長

海軍大佐

ミクルフ

ビエードウイ艦長

海軍中佐

コロマイツエフ

ブイヌイ艦長

海軍中佐

グロムスキー

海軍中佐

ボードルイ

海軍中佐

ブレステースチー

海軍中佐

ブラーグイ

海軍中佐



其の他戦場に現はれしものは、假裝巡洋艦數隻、特務船六隻、病院船二隻であつた。外國の艦名・人名は記憶し難きものなるも、前記の、印を符せしものは記事に貴要なるものにつき、略記憶せられんことを願つておきます。

司令長官及艦其の他司令官及艦參謀等の人と爲り、官歴等はこれを詳かにすることは出来ませんが、露國海軍の發達は、其の造船術といひ、其の海軍教育といひ、歐洲に於て一二を争ひ、殊に海軍兵學校に於ては、世界に有名なる大家を出だした事は少くない。又其の將校は近代實戦上に於ける經驗にも富んで居る、而もロ中將は海軍軍史上最も貴要なる軍令部に長たるの人、其の技倆當時露に類がないと見て宜しい。此の人が轉じて司令長官となり、其の艦隊は本國を空うして組織したる處、連戦の恥辱を一戦に雪がうと期したるものであります。其の司令官を選むに於て、技術衆望第一人を抜きしに相違ありません。ロ提督夫人と親善なる露都の英國婦人が、其の本國に通信したるものによりますれば、提督の邸宅は彼得堡なる海軍省の側にあつて、一夕その晩饗會に招かれた席上に、妙齡の一少女が居られて款待に努められた。これは提督の愛嬢にして、豫て特志看護婦としてハルビンに在られました。父君が極東遠征の途に上られたるによりて、夫人が特に呼び歸されたのであります。同邸は裝飾極めて質素なるも莊重で、壁上にはクロンスタッドに於ける海軍將校が、提督の前途を祝して贈つたといふ提督の大肖像が、生けるが如く掛つて居りました。夫人令嬢は日夕これに對して功名を祈つて居られる。肖像の主人公は露帝の使命を

果すことはとても出来難い、憐れ果敢き運命に向つて進みつゝあられるを思へば、夫人の心中もまた察せられる。

前掲した日露兩艦隊の勢力を比較するに、一見我が隻數多き如きも、我には沿岸防禦哨艦等の任務に就きしものも多く、或は艦積小に、或は老朽にして實用にならぬものもあつて、實際の大海戦參加せしものは、さほど多くありませんでしたが、我に大なる利となりましたのは、所謂逸を以て勞を待つたにありました。其の主なるもの、噸數と巨砲の數との大要を表示しますれば、

艦種	日本	露國	優劣差	砲種	日本	露國
戰艦	四隻	八隻	三・七五〇	十二吋	十六門	三十門
裝甲巡洋艦	八隻	三隻	二〇・三三七	十吋	十門	九吋十二門
裝甲海防艦	二隻	四隻	一三・五六六	八吋	三十四門	十六門
巡洋艦	十六隻	六隻	二・七六六	六吋	二百二門	七吋廿八門
驅逐艦	廿一隻	九隻	三・一五〇			百五十九門

右の通りにて、八吋以上は甲裝を貫通する力があるものであります。補助艦隊に於ては日本艦優勢なりしも、オーロラ、オレーグの如き巡洋艦は、日本に其の比倫を見ざるほどの良艦で、共に七千噸近くの快速力艦でありました。復讐で反り討になつたものは古來たんとありませんから、諸君、まあさう御心配なさるな。



前講が長くなつて御体屈様でありました。さあ此れから諸君も御待ちかね、私も待ちかねて居つた復讐の場面即ち戦場に入りますから、大車輪でやりませう、其のお積りで。私も出来るだけ氣を付けて口演する積りでありますが、諸君も御注意下さつて御聞き落しのない様に願ひます。一つ聞き落すと手続きが分らぬ様になつて、殊に彼我艦隊の變針方向と時間に御注意下さらんと分らぬことになりません。一回我が艦隊の記事を申上げては同時に起つた敵艦隊の記事に移り、常に代る／＼に申述べますが、其の我と彼との間にあつて、連鎖となつてをるものは時間でありませう。此れを唯一の手がかりとして注意して聞いて下さると、戦況が手に取る様に分ります。こゝに一寸御注意しておくことが有ります。それは外でもありませんが、敵方の記述によると我が海軍省御報告とは、時間に於て約十五分の差があり、敵の記事は約十五分宛後れてをります。例へば三笠が始めて順次回轉を信號して、敵の先頭を壓した時は、我が海軍報告には二時五分とあり、敵の記事には二時二十分とあります。斯様に何處でも約十五分宛後れてをります。私はこれを斯様に想像します。敵が舟山嶋を發し愈々戰場に上らうとしました時に、正午計によつて舟山嶋邊で時計を合せたものと思ひます。經度の關係から考へても、舟山嶋邊は我が標準時より約十五分位正午が遅れてをる譯であります。此れを豫て御注意願ひます。もう一つ御注意を願ひますのは、口演が敵味方と両方面からになつてをりますから、往々重複しまして、一つ出來事を両方に述べねばならぬ場合がありまして、或は味方の方に詳しく或は敵方に委く述べねばならぬ場合がありますから、両方を聞きくらべ取合せて下さい。こゝには敵方の記事は總

て一字低く下げて區別しておきます。

開戦の前日五月二十六日には、前にも云つた通り、東郷艦隊(第一戦隊旗艦三笠)、上村艦隊(第二戦隊旗艦出雲又甲装巡洋艦隊と云ふ)、瓜生戦隊(第四戦隊旗艦浪速)は我が根據地鎮海湾に居られ、出羽戦隊(第三戦隊旗艦笠置)は海を隔て、九州の西北隅を守り、片岡艦隊(第五戦隊旗艦嚴島)は、第六戦隊(山田司令官旗艦扶桑を率ゐて)、更に西方の偵察を専らとして居られました。此の日は二十五日夜からの暴風が、未だ全く治まらず浪が非常に高く、各艦寂として大聲を出すものもなく、天の明けるを待つて居られました。丁度暴風雨の来る前に天地が何となく物凄いな有様と同様でありました。

二十五日敵艦隊が舟山嶋を出發したとの知らせがありましたから、哨艦の任務は一層重大となりました。我が艦隊をして克く其の任務を果させますと否とは、一にも二にも哨艦の偵察の如何に關してをります。先づ第一番に敵艦隊を發見した手柄は、成川大佐の乗つて居られました假裝巡洋艦信濃丸でありました。同艦は二十七日午前二時四十五分、五嶋白瀬の西方二分の一、北方四十海里の地点を警戒してをつたとき、遙か左舷に當り、ほんの微かに見えるか見えぬか位の、チラッと一点の燈火らしいものを認められました。其方に向つて段々船を進めた所が、丁度燈の光りを望む様に、忽ち現はれたと思ふと忽ち消えた、これが此の大海戦の導火線となつたのであります。だん／＼近づくと我が艦側を過ぎて東航する様に見えました。我も燈火を消して忍んでをるし、敵も殆んど燈火なく、只時々艦尾で微かに、僚艦に航路を合圖するのみでありますから、互に近づいても意外に知れ難く、これと思ふ方に近づいて往かれました。此の日は丁度舊曆の二十日過ぎで、運善く東の海上に下弦の月が出ました。幸に敵艦らしきものは、我が艦と月との間に挟まれ、



光は猶ほ淡くありましたが、烟筒・帆檣・氣筒などの半面は綠色に、甲板を歩む人影長く黒色に描き出され、風光何となく物凄くありました。月光に透してこれを眺めますれば、宛然郵便船の様な一艘の船が、東北を指して進行するのを見ました。これを臨検し様として近づきました所が、夜は未だ明けず、濃氣は深く後方に猶ほ續く船がある様に思はれました。信濃丸は何時か知らぬ間に敵の艦列の中に這入つてをりました。進むも敵、退くも敵、囊中の鼠か釜中の魚か、無甲装の一商船、若し發見せらるればそれ迄である。成川大佐は將卒に告げて、

不幸此の窮地に陥る、敵の一艦を衝撃して共に沈むは易にして快であるが、それでは大切な哨艦の任務を盡したとはいへない。やるだけのことばやらねばならぬと、唯運を天に任せ、轉舵一杯全速力で脱却せよ

と、次で無線電信機は火花を散らして、  
敵艦二〇三地点に見ゆ、對馬東水道に向ふものゝ如し  
と、本隊に向つて第一の警報を傳へられました。これが朝五時頃で、まだ少しも夜明けの景色もなかつた時でした。

又第三戦隊に屬した軍艦和泉は、石田中佐を艦長として哨艦の任務に服し。五月二十六日は濟州嶋の南の遙か沖合を警戒して居りました。此の日は濃氣が深くて展望も出来なかつた爲めに、僚艦と離れぬとなり、笠置、千歳も亦臨時哨艦の命を受けて來ましたが、濃氣は益々加はり風濤も強く、到底任務に就くことも出来ませんでしたから、各哨艦は一時五嶋に假泊して、天候の定まるのを待つて居りました。明けて二十七日はのくの頃、濃氣はまだ散じませなんだが、風は少し風ぎ浪も前日ほど高くありませんでしたから。午

前三時三十分假泊地を出航して、復び偵察に従事し、宇久嶋の西方四十海里に達しようと思つた時、南方にありました信濃丸より、「敵艦見ゆ」との報知がありました。時は午前五時頃で、和泉は若し敵艦を發見しましたら、これと離れない様にして段々東方に引き付け、本隊に合すべき命令を受けて居りましたから、直ぐに命令通りに行動しようと思つたが、信濃丸の發見したのは果して眞の敵の主艦隊でありますか、又其の隻數・陣形等はどうかつてをりますか、よくこれを見極め様として、敵艦の嚮ふであらうと思ふ航路を考へて、力めてこれと出會ふ様に進行しました。七時に垂んとした時、遙か前方に四五條の煤烟の塵くのを見、双眼鏡裡に白く塗つた一隻の病院船らしいものが現はれて來ました。総て戦艦は愈々實戦に入らうとする時は、少しでも敵の見難い様に、海水に似た色に塗り變へるのが例であります。病院船は誤つて砲撃せられるのを避ける爲めに、事更に白色に塗るも例であります。次で其の北方に十五六隻の敵艦を發見しました。此等は今宇久嶋の北西二十五海里の地点を、北東に向つて航走して居りましたから、直ぐと我が旗艦三笠に報じました。斯様に和泉は約二万米突の距離で、敵艦隊と駢行して馳せること約一時間、午前五時に及び彼我の距離八九千米突となりました時、これを熟ら／＼視ますると、其の隻數は三十に餘り、ゼムチユーク型の巡洋艦を先頭としまして、主戦隊は右翼列、劣等艦は左翼列に、特務船を中間としまして、大凡十二ノットの速力で北東に進んでをります。是で敵艦隊の勢力・陣形及び對馬東水道を通過仕様とする目的であることが明かとなりました。再びこれを旗艦に報告し、猶ほ敵艦隊と離れぬ様にして進行しました。

時は何年なんめり、輝ける我が大御代、明治三十八年五月二十七日で、此の日は我が皇后陛下の地久節で、露國にては皇帝戴冠式の第七年に當る祝日でありました。此の日こ



その後にも前にも忘れることの出来ない、日本海々戦の大記念日となりました。此の朝午前五時過ぎ「敵艦見ゆ」この警電が大本營に達しました。大本營でも海軍々令部でも、徹夜で此の警報を俟つてをられたのでありますから、直ぐに宮中にも傳奏されましたに相違ありません。それと殆んど同時に、

敵艦見ゆとの報に接し、聯合艦隊は之より出動し敵を撃滅せんとす。本日天氣晴朗なるも浪高し。

この快報がありました。我より有力な敵の艦隊でありますのに、撃滅せんとするなどの語は、此等は無論 大元帥陛下にも奏上せられる筈でありますから、よほどの自信力があつて、非常な覺悟でなければ輕々敷言ふことの出来ぬ語であります。時に山本海軍大臣、伊藤軍令部長等皆徹夜して海軍省に居られました。互に顧みられて覺へず茫然とせられまして、直ちに連署を以て、單簡で痛快極まる返電を發せられました。

聯合艦隊の絶大なる成功を禱る。

平生死亡や病人の凶報を主に取扱つてをる心地の電信機も、此の時のみは勇み立ち、爽快の音を出したてでありませう。此れは東郷大將をして九段大呂よりも重からしめました。大將の責任は又益々重大となりました。絶大なる成功、眞に絶大なる成功でありました。大本營でも敵艦隊が愈々對馬海峡に現はれたと聞かれましたは、充分成算の覺悟もありました。半ば安心せられたことでありませう。

旅順艦隊が亡び盡きてから、殆んど半年骨肉を叩き、待ち倦んでをりました我が聯合艦隊の將卒は、敵艦來ると聞き、全軍小躍りして各々定められた部署につき、對敵行動を開始せられました。

昨日以來の濛氣が未だ残つてをって、風も暴く浪も高く、曉の空に残る月影は白い光を波間に漂はし、東海に潜む太陽は未だ顔を出さぬも、已に金波銀波を碎き、海氣は膚を打つて、何となく人心が爽かであります。午前六時過ぎ總艦点火拔錨出艦の信號が揚り、次で勇ましい進軍の樂聲が起りました。艦長は艦橋に上り「出艦用意！當直錨り揚げ方」と命せられました。士官水兵は艦の前部に集まり、直ちに拔錨の準備がなると、艦長が「巻き始め！」で蒸氣力が機械に加はり次第に回轉を始め、今迄鐵棒の様にピンと張つて居つた錨鎖がジリ／＼と巻き上ると、豫定の部署に従ひ、山の様な艦体が漸々動きかけたかと思ふ間に、速力を早めて疾風の様に走り去り、一艦が出て行けば又一艦がつゞぎ、正に蛟龍が九天の上に昇る様な勢であります。我が主力艦隊は十二隻よりなつて、第一戰隊は東郷司令長官が自らこれを率ゐ、三笠を旗艦として先頭に立ち、敷島・富士・春日といふ順序で、日進は殿艦で三須司令官が座乗せられました。裝甲巡洋艦隊(第二戰隊)は上村中將が司令官で出雲を旗艦とし、八雲・淺間・常盤・吾妻・磐手がこれにつゞきました。瓜生戰隊直率驅逐艦隊及び水雷艇隊等に従へ、東南の向を取つて出港し、次で南西に變針して進行せられました。昨年旅順艦隊に敵對行動した時は、何にしる敵は黄金山や老鐵山などといふ、堅固の砲臺の掩護を受け、鼠が穴口にちよ／＼頭を出す様に、コトといへば直ちに港内に逃げ込み、どうにもかうにも仕様がありませんでした。第二太平洋艦隊は已に發航し大敵は却つて後ろにありまして、我が一艦を失つても、急にこれを補給するの手段はありませんでした。故に昨年八月十日黄海の大會戦の時は、成るだけ我が艦を損傷せない様に、遠距離射撃で戦はれました。これは東郷大將が今日あることを計られた遠謀で、砲臺下に據る敵艦に對し、我が艦隻を愛護しつゝ、戦はねばならなかつた大將の苦心は、日



本海々戦より遙かに多かつたといふことであります。けれども今回の會戦は敵も本國の精銳を盡して來た第二第三太平洋艦隊の主力である。此れさへ打ち沈めれば、我が海軍の任務は全く終つたといつてもよい譯で、假令我が數隻を失ふも惜しむには足りません。其の接戦の酣なる最中には一千二百米突に近づいたことがありますが、戦場はどいへば、利害を同一にしてをる太平洋中で、また此の戦は二千五百年來一たびも汚されたことのない、我が國運のかゝる所でありまして、陛下も屢々優詔を下して獎勵し給ひました。こんな名譽の戦場で討死せんことは、將校といはず兵卒といはず、皆覺悟する所で、日本男子として此の上もない死場所を得たのを喜んでをりました。出發する前日迄に、遺書遺物を故郷に送らなんだ人は一人もない位であります。さて愈々出動してからは、最後を期する武夫の嗜み、沐浴してシャツからズボン下迄すつかり新しきものと替へ、先づ皇天を拜し遙かに東に向つて、陛下の萬歳を禱り國運の隆盛を祝しました。

甲水兵 貴様は何んだい、シャツやズボン下迄更へて、髪も梳いて、一体めかして何處へ行く積りぢやない、嫌にでも逢へるのか。

乙水兵 貴様こそ何んだい、髪は茫々、シャツは眞黒、日本男子の面汚しになるな。今日こそは吾々は何千万圓といふ船に乗り込んで、嫌どころぢやない、龍宮に入り込んで乙女を手捕りにしてやるんぢや。

丙水兵 うん／＼、何千万圓といふ棺桶で、數百人の殉死者と共に、大手を振つて龍宮迄も行くのぢやない、話に聞いた埃及王のピラミッドとか云ふ墓場も、此れにはとても及ばんぞ。

と、めい／＼勝手なことを云ひ合つて、心にかゝる限もなく、心も廣く体もゆつたりとして、武夫の覺悟はさすがに健氣であります。開戦にはまだ少し間もありますから、其の進行中の有様や二つ三つの面白い實話を述べませう。その内には船も戦場まで進むであります。

三笠の艦橋に立ちて後方を望めば、五百米突後に續く敷島は、濃氣に包まれて見えがたいが、艦首に碎かるゝ波は白雪を蹴り碎き／＼と鳴つて、舷側を打ち去り、船は霧より出でては霧の海に入り、大橋頭の大將旗さえ見へたり隠れたりして居ります。十時頃に漸く霧晴れ、誰云ふとなく「對馬が見ゆる」との懐しき叫びを聞き、皆其の方の舷側に集まりました。一重／＼に剣がれゆく濃氣の切れ目より閃めく日光に眺めすれば、漲る英炭の薄煙は數條後ろに立ち上つて、敷島・富士・朝日等次第／＼に其の姿を現はしました。次いで「食事せよ」との喇叭が響いた。口にこそ言はざれ互に心に覺悟する所がありました。食事も常に勝つて美味く、一杯の酒にも何となく名殘が惜しまれました。平生海軍では麥飯を用ゐますが、此の日には出雲艦などでは米飯を用ゐました。是は戦が手間取れるとき空腹を感せしめの準備でありました。出雲は勇悍の聞へ高い上村中將の旗艦であります。常に兵員水上の無聊を慰むる爲めに、勇武的な游戲・擊劍・角力など獎勵せられて居りました。今しも一方に擊劍道具を擦ぎ出すものがあると、一方にはコリジョンマツトを敷き、釣床を圍らして土俵として、さあ來いと兩手を廣げる者もありました。出雲艦中に横綱と許されし一水兵がありました。身の丈も五尺八寸餘もあり、肉付もよく大阪在の出生で、水兵に志願する前には好んで草角力を取つたさうであります。何時でもニコ／＼した愛嬌者で、鷹揚な性質で、時々とんだ間違ひなご仕たり云つたりして艦中の飄輕者とされ、又



その大阪辯が一興で多くの將校達からも愛せられて居りました。鉢に合せて常に大食であつたが、今日に限り物案じ顔で、箸を取つても抄々敷掻き込みませんから。關東生れの元氣に満ちた某兵曹長が、側から、

兵曹長 おい横綱、何を思案するのだい、敵艦が近づくとちやないか、何時もの手際で早くどしどし〜かき込めい、口でもまづいのか。

水兵 いやや常日は麥飯でおますが、今日は米の飯どおいでなさつて、美味うて〜。

兵曹長 美味うて〜なら何せ早くどし〜やらかさない。

水兵 澤山食べても大事おまへんか。

どけ〜んな顔をすれば、

兵曹長 當り前ぢやないか、艦長殿が腹を減らかさない注意で、米飯を命じなされたのではないか、腹一杯詰め込まんでどうするかい。

水兵 私は聞いておました、昔の勇士はんは、戦場に出やはるときは、おまゝをたんと食べやはらんど。

兵曹長 そりや又どうかした譯で。

水兵 戦場で運悪く負けはりますやろ、敵に首を擧げられる時、切り口からむさいものがたんと出ると、死んだ後まで日本兵の恥やおまへんかい。

兵曹長 何んのごたください、吾々が戦死する場合は、組打ちやの首を擧げると、そんな間どろしいことではないぞ。大きな奴がどんと来て、花火の様に此の肉が（胸を叩いて）ばつと散るんぢやい、胃袋も腸管ものこつたものぢやない。拘はずにどし〜詰め込め、下手をすると此れが地獄に行く迄の食ひ仕舞ひぢやぞ。

水兵 成程なあ、そんならやらかしましたよか。

ど、いやはやかき込む事、他人の残した残肴に迄箸を衝き込んで、幾杯といふ限りもなさうであります。

兵曹長 何十杯食ふ、餘り腹の皮が突張ると自由に働けんど。

水兵 食べねば笑ははる、食べりやおこりやはる、うら飯いことや。

兵曹長 何んぢやと、鰹腹食やあがつて、まだうら飯いぢやの表飯ぢやのと戯言どころぢやない、敵艦がもう彼邊に來さるぢやないか。

食事終れば非番の者は隨意休憩の命がありました。腹の皮が突張れば眼の皮が纏るむ道理で例の横綱先生もぐう〜大駢の態でありました。何を積りか他の一水兵は細引を持ち出して横綱の足を縛り、他の端を傍の器物に結び付けて居ります。

兵曹長 おい何をするのぢや、徒らもいゝ加減にせい。

水兵 此の奴が何時でも私を土俵の上に投げくさりませう。最早や再び逢ふことが出來ぬかも知れませんが、行きがけの駄賃に、今日は思ひ切り鬱忿を晴してやります。今に非常喇叭が鳴り出しますと、此の大きな頭体がパツタリドテンです。兵曹長殿、首尾克いつたら拍手御喝采を。

兵曹長 馬鹿！ そんな卑怯なことをするな、日本人の恥ぢや、外傷でもするといかん、解いて遣れ〜。

彼の隅にも此の隅にもごろ〜と横はり、愉快氣に談笑するものもあれば、鼾聲雷の如く夢を結ぶものもあります。夢魂の飛ぶ所は果してどこでありませうか。故郷の空ではなく



必ず敵艦を撃ち沈め巨盃を擧げる壯夢でありませう。今や其の夢を現實にすべき瞬間は迫つて來ました。如何に昨春來の百戦に鍛へ上げたる膽魂であるとはいへ、沈勇のほど驚くに足りません。各艦の有様が皆同様で、眼前生死の戦場に臨む様な様子は少しもなく、丸で演劇見物にでも行くやうな元氣であります。三須司令官これを見られ、

水兵は寔に天真爛漫で、丸で子供のやうな可愛らしいものであるが、又其の覺悟は非常なものである。

と感嘆せられ。今日の勝利は最早や少しの懸念もないと云はれました。

戦闘準備は全く出來上り一つの残る隈もない、いざと云へば何時でも火蓋を切つて放つまでは、唯その豫定の位置に進むのを待つばかりでありました。我が司令官長官東郷大將も、初めて「安心した」と云はぬ許りに悠然と安樂椅子に横はられ、假寐の夢を結ばれました。英雄胸中の開日月とはかゝる有様を云つたのでありませう。實に綽々たるものではありませぬか。

開戦の始めに仁川沖で、八代淺間艦長が千鳥の曲を奏しつゝ敵艦に向はれましたのは、古の敦盛が青葉の笛と、陣中好一對の風流事として傳へられました。片岡艦隊の旗艦松嶋では、沖嶋附近で敵艦隊が段々我が視界に這入り、威風堂々と長蛇の陣を作つて進み來るを眺め、將卒甲板に集まつて、さあ珍らしい好客さん、御出でなされたか遠方御苦勞様。敵ながら天晴の武者振りよ、此れはスワロフであらう、彼はボロヂノならんと指点區々なる折から、奥宮艦長も出て來られ、日頃薩摩琵琶に自慢の一軍醫がありましたので、これを引張り出して一曲をこそ望せられ、皆々拍手して之を迎へました。軍醫欣然として今日までも傍を放ち得なんだ秘藏の琵琶を取り出して、撥音高く弾き出しましたのは、武門の

花や川中嶋の名残の一曲、一急一緩嘈々切々として、自己の決意を示すに似て、弾く人も最後を期すれば、聴くものも亦生きて還るを願はず、敵の火蓋を前にして、泰然自若と古武士の覺悟を朗吟しました。音調清爽、呂律絶妙、常の技術にいや勝りて、滿艦の人皆な酔へる如く聞きとれて、暫し時の經つのも知りませんでした。振りかへれば敵艦既に目睫の間に迫つてをりました。

千代田艦長東伏見宮依仁親王殿下には、艱難多い警備哨戒の大任を帯び給ひて、強風怒濤に身を曝され、碌々寢床にも就かせられず、軍服を解かせられる暇だになく、常に艦橋に立ちて指揮せられました。部下が暫時の休憩を勧め奉れば、

艦の運命は艦長の責任である、責任を盡すは武人の當然である。風雨と戦ひ怒濤と争ふは、吾々海軍々人の茶飯事ではないか

といはれて、一向に用ひなされぬ。其の敵艦と觸接するや、

見よ大塚、(御附武官) 第二第三太平洋艦隊の主力は殆んど盡されて居るぞ、決議の用意は善いか、必ずこれを全滅せねばならぬぞ

と。晝飯の如きも艦橋で粗末なるサンドウキツチを召させたのみで、始終健闘せられました。戦の終りしときは炮烟の爲めに、左半面は話さずみ給ふたと。金枝玉葉の貴き御身で、士卒と艱難を共にし給ふ、全軍の士氣に關することも少くありませんでした。磐手艦長川嶋大佐は、十一時三十分全艦將卒に訓示して、

今や待ちに待つた敵艦隊は愈々當方面にやつて來た、一同が練磨した腕前を現はすは數時間の後である。男子と生れ軍人となり、此の千載一遇の戦場に參與するは、此の上の光榮、此の上の愉快はない。余は乗組員の勇氣と熟練とを以て、陛下並びに國



家に對し、忠勤奉公を期する上に、深く各員を賴信するものである。唯一言しておきたいことは、各員沈着冷靜で、恰も演習の如く動作し、遺算なからしめんことを切望する。今こゝに名譽ある軍艦旗を掲げ、大元帥陛下の萬歳を三唱し、次に聯合艦隊及び磐手の萬歳を三唱しやう。

和泉が敵と觸接しつゝある間に、片岡中將の率ゐた巡洋艦隊、東郷少將(正路)及び出羽少將の艦隊は、午前十・十一時の交、壹岐・對馬の間で右側に敵艦隊を望んで、沖嶋附近に至る迄、時々刻々敵情を電送しました。故に我が主力艦隊は、敵艦隊は宛もこれを手掌に指す様に、其の戦列部隊はいふ迄もなく、其の速力でも方向でも悉知せられました。東郷司令長官は豫ての計畫通り、我が主力艦隊十二隻を以て、午後二時頃これを沖嶋附近に邀へて、先づ其の先頭艦より撃破しやうと心算を立てられました。東郷艦隊・村上艦隊・瓜生艦隊及び驅逐艦隊は、正午頃既に沖嶋北方約十海里に達して、敵の左側に出でんが爲めに、更に針路を西方に轉じ、午後一時三十分頃、出羽戦隊及び東郷(正路)戦隊等も、敵と觸接しつゝ相前後して漸次來り合せられました。主力艦隊よりは同時四十五分に我が左側前方七海里に、始めて敵影を發見しました。敵は預て期した様に、其の右翼列の前面にボロヂノ型戦艦四隻の主力戦隊を置き、オストラビヤ・シツイウエリキー・ナワリン・ナヒモフより成る一隊を、左翼列の先頭におき、ニコライ一世及び海防艦三隻よりなる一隊之に次ぎ、セムチューク・イヅムルドの二艦は、兩列の間の前方を警戒してをりました。其の後方濠氣の内には、オレーグ・アウロラ以下の二・三等巡洋艦の一隊、ドンヌコイ・モノマフ其の他特務船等、數涅に亘り連綿として續航して來ました。

東郷大將は司令塔よりこれを望まれ、傍にありし加藤參謀長を顧みられ、

お目出度う、あなたもこれを見ては腹を切るにも及びますまい  
と、これは軍議決定の際、參謀長の辞色決心たるものがあつて、若し敵が他の航路を取る様な事があつたら、切腹して國民に申譯せんと決心を、顔色から讀まれてをつたからであります。

彼我の距離約一万余米突餘、今や兩軍の全力を擧げたる艦隊は、將に最後の決戦を試みやうとしてをるのであります。東郷司令長官は西に變針を命ずると共に、三笠の橋頭高く戦鬪旗を翻へさしめられました。各艦皆これに倣つて、次から次と戦鬪旗を掲げました。風力は波を搏つて天色も轉た慘憺とし、同五十五分我が全艦隊に對して旗艦より、千代万代を飾る日本海々戦で有名なる信號が掲げられました。

皇國の興廢此一戦にあり、各員一層奮勵努力せよ。

其の語は短きも火の如く錦の如く、之を見て感興奮起せぬものは一人もありません。總て信號旗は先づ旗艦が掲ぐれば、それに次ぐ敷嶋が同一信號を掲げ、朝日又これに倣ひ、段々各艦に及び、翻々として各艦の橋頭に飄るので、遠方から見ると立派な眺めであります。次で驅逐艦に向つて、

各驅逐艦隊は最も近き着弾距離外に開き、自由の行動を取り監視を怠る勿れ  
と信號せられました。我が主力隊は午後二時二分針路を變じ南西微南に航し、先づ敵と反航通過するが如く装つたが、同時五分に至つて其の儘直進すれば、互に反航通過し去りて利害相均しく、所謂五分々の勝敗に了るべき形勢をなしました。かゝる平凡の戦鬪に甘んずるは、敵の滅滅を期された東郷大將の與する所ではありません。大將はつらく之れを望まれて、頭を廻し屹度加藤參謀長を見られました。同時に參謀長も大將を見返され、



両者の視線期せずして相會せる一刹那、參謀長は聲高く、

長官！ 取梶になすべきか？

大將は「諾」と答へられて、思はず共に會心の笑を浮べられました。

數片の彩旗信號桁に翻へり左十六点の回轉を命じ、三笠先づ大速力にて波上に大圈を描きつゝ急に左折し東北東に變針し、各艦これに倣ひ順次廻轉し、猛然と敵の先頭を壓迫して丁字陣形を取られました。此れは非常に大膽で寧ろ冒險的な行りやうで、敵の幕僚は危険と評して居りますが、東郷大將には細心なる成算があつたに違ひありません。村上艦隊も之に續いて回轉し十二隻を單縦陣とせられました。出羽艦隊・爪生艦隊・巡洋艦隊・東郷（正路）艦隊は、豫定の戰策に従つて、孰れも反航南下せしめて敵の後尾なる補助艦隊を衝き、敵の後尾を乱さしめて、且つ其の退路を扼して全滅せしめようとして畫られました。東郷大將の水も泄さぬといふ細心の戰作の一つであります。

さて今から少しく敵艦隊の側に廻りてその有様を述べて見ませう。（此の敵艦隊記事は主として時事新報に譯載せられた、スワロフ乗込の幕僚であつたセメノフ中佐の手記、及び海防艦セニヤウン某參謀將校の記述中より採萃しましたが、文章は自己流が雜つて居ります。此の參謀將校は自艦隊滅亡の慘情を有りのまゝ、世に公にせしを以て、世を憚つてその姓名を秘してあります。セメノフ中佐は昨年十月黄海々戦にも參加せし人で、今はロ中將の幕僚となり、スワロフに乗込む）何にしろ戰艦のみでも十隻許も撃沈せられたので、悉く詳しく御話しようとするに非常に長く、ナンボ舖の刺身でも三度々々食へば飽く道理であります。火災・爆發・撃沈と略ぼ全じ状態にありましたので、御話も重復勝ちでありますから、最も慘狀のあつた二三の戰艦、殊にスワロフは敵の旗艦として最も奮戦し、且つ日本艦隊より

最も目標とせられ慘狀も甚かつたし、又其の最後も悲壯ですし、最も委しく記録が残つて居りますから、主に之に付て委しく述べませう。他の艦も火災・爆發の慘狀は同一と御想像になれば違ひありません。故に他の艦に付ては特別の事情の起らななことは大抵略しておきますが、併し此の御話は悉く正史によるのでありますから、興味が薄くとも全く略せぬことあります。先づセメノフ中佐の記述より述べれば、

上海沖にて運送に別れを告げた日は一千九百〇五年五月二十四日午後で、桅檣の帆架や索條に激する海風は物凄き音をなし、斷れんくなる黒雲は、低く天涯の彼方に追ひ遣る如く吹きつけ、黄海の澎湃たる波浪は、猛獸の吼ゆるが如き音して戰艦の舷側に碎け、蕭々したる細雨は、面を打ち冷た敷、濕氣寒涼殆んど骨身を徹せんとした。かゝる薄寒き雨中に數人の將校が一團となり、艦橋の上に行立して、今しも薄絹の幕を下げる如くに降り注ぐ細雨の裡に、次第／＼にその影を隠し行く運送船の行手を見送りて居るは、旗艦スワロフの幕僚である。橋頭高く帆架の一端に翻翻として蕭條たる海風に飄へるは、これ萬里遠征の至難なる長航海の我が同伴者たる船舶の、今我等に訣別せんとして最後の別辭を告げ、最後の希望を數片の信號旗に語らしめて居るのである。海上に翻翻たる旗色の配合にて表示せらるゝ、此の友愛深き別辭は、諸艦の祝砲よりも歡呼の聲よりも、囁々たる音楽よりも、尙ほ強く我等を感慨に堪へざらしむるは何故であるか。嗟呼此の信號旗は、これ只海風に飄り微雨に潤るゝ薄色の布片ならず、是れは實に活ける語である。人々は互に沈黙で熱心に眺めて居たが、其の信號旗の残り惜しげに靜かに下げられし時、皆物案じ顔に首打ち伏し散じて各自の任務に就いた。嗚呼是れ實に我等に最後の無言なる握手を爲して、惜しき別れを告げたのである。突然に「嗟この厭



な天氣よ」と叫んで、艦橋上の寂寞を破つたものがある。誰とも知れず應ふるが如く又嘲るが如き口調で、

結構な天氣ぢやないか、若し浦蓋まで行く間こんな天氣が続くなら、それこそ感謝の至りぢや、砲臺も何も要つたものぢやない。

日没後我が艦隊（敵方の記事故に我が艦隊と云ふは皆敵艦隊のことである、以下も全じ）の各艦は成るだけ互に近接して航進した。敵（日本艦隊を指す、以下皆全じ）の水雷攻撃を豫期し、士官水兵の半数交代を以て備砲を警戒し、他の一半は其の部署の附近に被服のまゝ寝臥して、非常喇叭を聞けば直ちに其の部署に就ける様に用意した。夜は全く闇で濛氣は愈々濃く、其の間に見ゆる星影も稀れに、暗黒なる甲板は眠れるが如く、又死せるが如く、巡視士官の覚音を聞く許りである。備砲の方を眺むれば、砲側に不動の姿勢を以てゆるゆる砲員の真黒い影を認め、皆警戒の視線を暗中に向けて、一波一浪の動くにも、敵の水雷艇の黒影見ゆるかと疑ひ、マストに戦ぐ風にも、敵の汽鐘の響にあらすやと心した。

五月廿七日午前五時前、一隻の假裝巡洋艦が殆んど我が病院船に衝き掛らんとした、是は信濃丸であつた。此の事實は直ちに釜山附近なる東郷提督に無線電信で報導せられたことを、我が艦隊でも亦感電した。我が中將は直ちに哨艦を召し還し、運送船の保護を命じた。午前六時四十五分頃右舷に現はれた一敵艦があつた、直ぐに和泉なることが知られた。午前八時頃には同艦は五十ヶケール以内近づいた。我が提督はこれを追はんとせなんだ。間もなく鎮遠・松嶋・嚴嶋・橋立等左舷首に現はれたが、直ぐに北方を指して引返した。十時には小巡洋艦千歳・笠置・新高・音羽等が同方面に現はれ我に

觸航した。戦機の漸々近づいて來たことが明かとなつたを以て、豫ねての訓令の通りに第一第二裝甲艦隊は、旗艦よりの信號に従ひ進み出でて左舷に二点回頭し、第三艦隊の先頭に進み、運送船等は艦尾の右側を占め、巡洋艦隊は運送船を掩護し、モノマアは更に運送船の右舷に置いて、右側より來る敵艦に備へしめ、かくして最後の戦場に進んだ。午前十一時には日本小巡洋艦との距離五十ヶケールに至り、偶然ことよりアリヨールは過つて發砲した、他の諸艦もこれを旗艦の命令と誤りて砲撃を開始した。日本艦隊は應砲しつゝ直ちに退却した。旗艦は信號を掲げて、

砲撃を無益に投する勿れ、各員交代して喫飯すべし。と信號した。正午後日本巡洋艦隊は再び左舷艦首に現はれ、水雷艇隊を伴ふてゐた。中將は我が航路に浮流水雷を蒔くのであらうと判断し、第一艦隊の四戦艦に對して順次右八点回頭し、次で又一齊に左八点回頭せんことを命じた。此の運動の前半は首尾克く遂行せられたが、後半は亞歷山の爲めに誤解せられ、ヌワロフと共に回頭せずして、これに續航したが爲めに、回轉仕様としかけてをつたボロジノ、アリヨール等亞歷山の爲めに誤られて、これに倣ひ續航したから、第一艦隊は單縦陣をなし、第二第三艦隊と並航することゝなつた。此の事實は日本艦隊にとりて重要な結果を來した。なせといへば、日本巡洋艦は直ちに退却して右舷前方視界の外にありし、東郷大將にこれを報じたであらう、大將は爲めに我が艦隊の前面を、右舷より左舷に通過して、第二第三艦隊の弱艦より攻撃せんと企てるべきであるから。然れども中將は直ぐに其の陣形を舊の様に変じて、第一艦隊を第二艦隊の先頭に置いた。午後一時二十分頃、曲かに日本戦艦の東北より、我が通路を横斷して來進するを認めた。我が通路を横斷するや、三笠急に



鋭く南方に轉舵し、敷嶋・富士・朝日・春日・日進之に續いた。余は提督と共に艦橋上に立ちてこれを眺めて謂ふた、上村艦隊は黃海々戦の時の如く、獨立の運動をなす積りであらうと、語を強めて、「閣下八月十日と同じく六隻にて候」と云ふた。提督は頭を揮りて、向き直りもせず「否、彼等は皆ここにあり」と答へつゝ去りて司令塔に入った。これと殆んど同時に出雲・八雲・淺間・岩手・常盤の艦影を霧中より現はし來り、提督の明察を証した。余は坐を余が任務なる「総て見、総てを記する」に最も恰好なる後艦橋を占めた。扱も敵將は何んで弱勢なる我が艦側より攻めずして、これを横切るのであらうと訝かりつゝ眺めた。驚いたことには、此の際丁度反航してスワロフと相並び、右舷約三十五ケープル（四哩半）にありし三笠は、針路を反轉せんとするもの、様に急劇に左舷に回轉した。此れは敵將が我が艦隊の單縱陣なるを發見したによるに疑ひない。斯様な運動は、若し勢力同一な敵に向つて行ふときは、敵に艦の横腹を見せるから非常に危険のことである。我が提督は好機なりと思はれたであらう。一時四十九分三笠・敷嶋のみ方向轉換を完成したとき、砲撃を開始せしめられた。日本艦隊は二分後富士・朝日の回轉を了ると共に應砲し始めた。

これが此の海戦當初に於ける彼我の對勢であります。

十、彼我主力艦隊の戦況

皇紀二千五百六十五年五月二十七日午後一時、玄海洋上の光景は果して如何、空には風が暴れ、下には波高く、天は晴れても、猶そこそこ、に幾團の濃氣が、散じたり又集まつたりしてをります。其の切れ間より遠く望めば、彼我の艦隊百餘隻、旗色或は現はれ或は隠

れ雷の奔るが如く電の馳するが如く、一刻々、相近いてをります。古く元寇以來我が國民が一日も忘るゝことの出來ぬ、箱崎八幡宮の祠前で、衣冠束帯英姿嚴かに立せ給ふ龜山上皇の御銅像を後ろに負ひ、近くは常陸丸の慘劇があつて、今想ふも身慄ひ唇が青くなるほど我が千餘人の將卒を犬死せしめて、無念の涙に咽はしめた沖の嶋洋上も、今一時間を出でずして、炮烟天を覆ひ流血海を染めんとする、曠古未曾有の海戦が將さに開けんとしてをるのであります。先に敵と觸接して進み來りし出羽艦隊は、午前十一時嚴原と壹岐とを引き渡した一線に入つて、敵艦と六千米突に近づいた時、砲撃を開始しました。日本海々戦第一の砲聲は出羽艦隊により開かれました。次で瓜生艦隊又現はれたが、此等の任務は主に偵察でありましたから砲撃を中止して、一時三十分一度本隊に合し、後二時五分敵の背後を包圍追撃せんと、復び之と反航して、その後續隊を襲ふたのであります。であるから戦場は先頭主力艦隊と、後續の補助艦隊との二ヶ所に分れました。

此れから愈々戦況を述べやうと思ひます。此れには彼我兩艦隊の航路變針をよく飲み込まぬと、本講述が分り悪く、興味も薄いですが、その代り航路がよく分ると、實戦を見る様な心地がしますから、此れは圖を擧げて其の時々の運動を示しませう。これによつて記事と御引き合せ下さい。併し圖のみでは變化が譯り悪いから、私が一寸こゝで思ひ付きました。此机を片寄せて仕舞ひ、此の講壇全部を戦場の海面とします。真中より私の方で見れば少し右手で、向の方によつてをる此の水挿を沖の嶋とし、それから此の竹刀を此の端に置いて磁針とします。鏝の方が私の方に向いて是が北で、諸君の方が南で、私の左の手で諸君では右の手が東方と假定し、先づ彼我の兩主戰艦隊の戦況より申述べませう。さてこゝで一つ諸君に御無心があります。諸君の辨當箱の明きを三十許り拜借致したい。此の



講壇の奥の左手から（皆諸君の側より云ひます）即ち西北のこゝから我が主力艦隊が出て、段々かういふ工合に南東に進みました。と辨當箱を十二列べ、六つと六つの間が少し餘計離れて居ります。此れが東郷艦隊と上村艦隊との境で、一番先きのは勿論三笠です。又講壇の左手で諸君の直ぐ前に、二列に右側は五つ左側は十二、少し離れて先頭に二つ。此の二つは敵巡洋艦セムチユーク、イヅムルトの哨艦で、此の右列の先頭がスワロフで、左列の先頭がオスラビヤであります。

甲生徒 講師さん、僕の辨當箱は返して下さい。

講師 どれですか。

甲生徒 前の方の五番目のです。

講師 此れですか、此れはニコライ一世で、ネボカトフの旗艦です。あなたは未だ御辨

當が済まぬのですか、（辨當箱を振りつゝ）これは軽いですが。

甲生徒 もう食べて、それは空です。

講師 それなら最少しの間借して下さい。

甲生徒（勃然として）全体講師は失敬です、僕の辨當箱は敵艦だと云ひました。

乙丙丁生徒 僕のも返して下さい、僕のも、僕のも。

講師 いや此れは虚心しましたが、併し此れから段々口演すると分りますが、實際戰場

で花々敷く沈没したり、色々の美談は却つて敵艦の方にあるのであります、まあ立腹

せずに聞いて下さい。又これを讀んで下さる方は、手近の碁盤に黒白の石を十二づつ

並べ、時間方向を注意して此の記事の通りに動かせば圖によるよりは適切によく分り

ます。殊にあの碁盤の目の一割を一平米平方とすれば其の時々の彼我の距離も見當が

つきます。

先頭彼我の主戦隊におきましては、敵は北東に進み我は南西にこれを避へ、我は十五ノット渠は十二ノットの速力で、反航相近づくのですから、一時間實に廿七ノットとなりま

す。始め一万余米離れたのが、瞬く間に九千五百米となり、見る／＼中に九千米、八千米と近づき朦朧気なりし船体が段々増大し、明かに其の艦型が見分けられる頃。先きにも一寸云つた如く二時五分に至り急に順次回轉して。順次回轉とは海軍の用語で、先づ先頭艦が十六点（百八十度）回轉して、從來とつた正反對の方向を取れば、それに續く艦が全じ地点迄來つては、順次に先頭艦と全じ回轉すると云ふのであります。東南東に變針し敵の先頭を壓へんとして注視すれば、敵は我が南微東にありまして、其の右翼列主力艦は稍先方に進んで、單縦陣を作らうとする形勢でありました。二時八分我が二番艦敷島が回轉を終つて、新しき針路に就きましたとき、好機逸すべからずと思ひましたか、一團の白烟スワロフに起ると見るや、轟然たる砲聲天地を撼かし、敵先づ左舷の砲門を開きました。

敵方の記事によると、此れは實に危険な運轉であると評してをります。此れから奇術師ではありませんが、拜借した辨當箱を一々使ひ分けて御覽に入れますから、後の方で見えぬ御方は腰掛の上に立つて、見落しのない様にして下さい。その理由は、順次回轉では各艦悉く同一の地点で、これを回轉軸といひます。假りに此のインキ壺を置き、その位置を示しませう。各艦こゝで百八十度づゝ回轉し、今迄より正反對の方向に進むのです。（一々辨當箱を回轉しつゝ進め／＼してこれを示す）、敵方では一度此の地点に照準して砲撃すれば宜いから、著しく命中數が増さねばならぬ譯であります。敵の方では此の危険の回轉を、東郷大將は和泉の謀報で二縦列陣と信じ、先づ左側の劣等艦より遂撃する豫定であ



つたのが、單縦陣に變じたことを知つて、急に此の回轉をせられたものと解してをるが、これは左様ではありません。なせといふに東郷大將は豫て丁字及乙字陣法を以つて、主に敵の旗艦に向つて急撃することを策定して居られたのでありますから。又敵の無謀と迄評した此の順次回轉を取行せられたのも、深き考へがあられたこと、想はれます。敵の砲手の拙劣なことは、昨年八月十日の黄海々戦でもよく承知せられてをります。猶一万余米突以上の遠距離では、とても命中せないと断じられたに違ひありません。そんなら何故一齊回轉を執られなんだかといふと、これにも亦大なる理由があります。一齊回轉とは前にも一寸云つた様に（一寸御二人手を借して下さい）、私がする様に此の辨當箱六個を片手に一つづつ持つてぐるつと百八十度廻して下さい）、同一時間に一齊に現に自分の在る地点で十六点に回轉して正反對に向くのでありますから、一番先に進んだ旗艦が此間は敵艦となり、前の敵艦であつたものが先頭艦となる道理で、逆番號となる譯です。此れは急遽に反對運動の必用あるときは、時間を要することが少いから、此の法によらねばならぬので、此れより後に東郷大將が二回此の法方を取られてをります、それは其の時に申述べませう。今はさほど急をも要せず、それに此の晴れの大戦の初めに當り司令長官として旗艦を先頭に立てずして、敵艦となられることは欲せられなだに違ひありません。故に順次回轉によつて、航路を反對にするも、やはり先頭に立てる様にせられたに相違ないであります。敵艦よりは盛んに砲撃しましたが、我はこれを知らず顔に、其の先頭を南方に壓しつゝイ字形（即ち丁字法）に進まれました。東郷大將の見込は違ひません、果して一弾も命中はしません、皆無駄丸でありました。無駄丸といつても一發が幾千圓といふ、子供が立つてをる位のもので、我々が鳩や兎を撃つものとは違ひます。忽ちにして七千五百米と

なり、七千米となり、射距離に六千四百米となりましたとき、三笠艦上「撃ち方始め」の信號旗が中天高く翻ると共に、劉曉たる喇叭が響き渡り、我が第一弾は放たれました。時に丁度二時十分でありました。後續諸艦も回轉して新針路に就くや否や、逐次砲火を開き猛烈に敵の兩先頭艦を射撃しました。其の砲撃は百練千磨の手になり、其の火薬は世界で名高い下瀬製であります。敵は段々東南に押し付けられ、東北に向つたものが兩列共に漸次東方に變針し、自然に不整形な單縦陣となり、我と並行の姿勢となりました、敵もこゝを先途と流石によく防戦しました。一寸こゝで申上げて置きますが、敵方の記事と引き合せて何れも符節を合するが如く能く一致してをります、唯二つの稍々相違する点があります。一つは信濃丸の敵艦發見で、成川大佐の報告には猶續く艦船を見たことあり、セメノフ中佐の記事には、最後の病院船であつたことあります。此れは敵方の記事の方が正しいかも知れません。果して然りとすれば若し信濃丸がこれを見逃せば、策戦に大錯誤を生じたでありましたでせう。危くも危かりしことではありませんが、眞に天祐であつたと云はねばなりません。今一つは敵の記事によれば、開戦前に既に殆んど單縦陣を作つて居つた様に見えますが、吾が記事には此の通りまた二列縦陣の様に見えます。然し此れは六七千米突以上海を隔て、霧は深し、明視しがたかつたこと、豫て二列陣形の報を得てをられましたことが先入主となつた邊もあること、思はれます。

戦を開いて間もなく、左翼の先頭艦オスラビヤは撃ち破られ、大火災を起して戦列より脱奔しました。此の時には上村艦隊も戦線に入り、我が先頭艦三笠・富士等は敵の先頭スワロフに長官旗の翻るを見て、主としてこれを砲撃しました。敵も亦我が旗艦であることを知つて、多く砲火を三笠に向けました。敵の着弾は極めて不正確なるに反し、我が射撃



は愈々精妙を極め、砲術長が橋樓に立つて敵艦の距離を計れば、傳令は之を電話にて「スワロフ何千何百米突、オスヒヤ何千何百米」と各砲座に傳へます。砲身の長さ十餘間、大さ一抱へにも餘るものが、指先一つの働きで自由に左右に廻り、敵艦の距離によりて角度を定めて、ズツと砲口が天を指し儼然として仰向く、其の有様は恰も巨鯨の口を開くが如く眞に壯觀であります。照準が定まり砲手が牽索を引くと、白烟がバツト起ると共に全艦一種の震動を覺へます。命中如何と見る中に、敵艦に炸爆の烟り立ち昇り、橋樓から「命中」を傳へると、砲座に萬歳の聲が起ります。命中することに、射手は益々沈着慎重の態度をとりまします。此の沈着を証するに善い例があります。愈々開戦となる前に、先づ上甲板一般に細かい砂を振蒔いて、足が滑らぬ用心をし、又邪魔にならぬ所に大きな樽に水を入れ、幾本も柄杓を入れて、誰でも何時でも水を飲むことが出来る様にしてあります。此れが日清戦役の時は大變よく賣れたものでありましたさうですが、此度は此の水が一向賣れなんだといふことであります。此れを見ても各員が沈着に慌てなんだことが推し測られます。又一將官が或る砲座に来て、將に發射せんとしてをる砲手に、「それは何發目か」と聞かれましたとき、即時に「十七發目で命中十三」と答へたさうであります。此れが演習ではない、實戦でありますから、餘程の落付きがなかつたら答へられることではありませぬ。これでは命中もよくする筈です。敵がとても人の手の仕事ではない、丸で神の手です。様である、驚きましたのも無理はありません。

又多勢の人が雜然と各種の仕事をするのでありますから艦中は騒然からうと一寸想像せられますが、實際は實戦の際にはこれに反對で、各員それ／＼眼の廻る様な職務に従事するのですから、森乎として冗話一つするものもありません。砲手の眼中には只敵艦と我が管

理砲あるのみで、頭一つ動かす暇もなく、咳一つする暇もない位であります。出もの腫れもの所きはらずで、「甲板放尿勝手たるべし」の珍令が下つたのでも分ります。只心に響くものは、吾が弾が命中することに覺へず發する萬歳の聲と、敵艦の來つたとき地震の如く感ずる振動がある許りであります。彼等の距離は益々近接し、砲戦は一刻は一刻より劇しくなり、砲聲轟々と天に響き、飛彈はブル／＼と空を斫り敵艦は命中が少いのでありますから、附近の海水を打つて炸裂する水烟は奔騰して大小幾百個の眞白な水柱を現はし、その大なるものは軍艦の大橋よりも高く跳ね揚がり、艦側は眞に銀河の九天より落ちるが如く、これに持つて來て太陽の光線が反映し、見る方角によりては五彩の虹霓を現はし、平時なれば壯觀とも美觀とも筆舌のよく盡す所ではありませんが、今はこれを顧みる暇だもありません。彼も我も其の砲數のある限りを悉くして、手早く發射するのでありますから、天柱挫け地維裂くるもかくやと許り思はれました。激浪はザンブ／＼と舷測を打ち、飛沫はバラ／＼と甲板に迸り、三十尺以上の艦橋に及び、烈風は帆索に激して颯々唸鳴を生じ、一層の壯烈を添へました。我が射撃は益々功力を著し、旗艦スワロフ及び之に次ぐ歴山三世も大火災を起し、戦列に堪へず脱伍し、陣形は愈々乱れ後續艦も亦火災に罹るもの多く、立ち騰る烟は西風に吹き捲くられて海面を覆ひ、濃氣と共に全く敵影を包みて、我が主戦隊も目標を定める手段なく、止むなく一時射撃を中止しました位であります。

開戦の始めより東郷大將は出でて前艦橋に立ちつくされ、瞬きもせず敵艦を睥睨せられてをられました。秋山參謀等頻りにこれを氣遣ひ、

閣下の御身は千鈞よりも重し、此の様な危険の所に御出であつてはなりません、どうぞ一時も早く司令塔に御入り下されたい。



と、大將靜かに頭を振られて、

否、我は年已に老いて居る、後日又用もない体じや、一死國に報ゆるは此の時より後にはない。足下等は年齒尙ほ壯んで、我が海軍が足下等に待つ所は今後に又多い、前途は遠遠である、漫りに其の身を輕んずることは出来ぬ。疾く他の位置に就かれよ。永田副官重ねて、

否。閣下の御一身は我が全艦隊の運命に關します、御一身で一身ではない、必ず生等の言ふ所を聞かれねばなりません。

と、加藤參謀長三たびこれを請へども、容れられない。砲火愈々急となりて、百雷の一時に落つるが如く、敵も主に砲撃を三笠に集め、その被弾第十六回目の命中弾は右舷側に爆發し、無數の弾片は大將の居られたる前艦橋附近に霰の如く迸り、清川參謀以下十五名を傷けました。又其の一大破片は大將脚下の甲板を、下より斜めに上に貫き、幕僚は慄然として色を失ひ、伊知地艦長もこれを望まれ、覺えず、「失敗つた！」と叫ばれましたが、其の破片は大將の側なる羅針台の防禦として並べ立てた釣床を貫いて、床中に止まり、其餘勢で釣床が大將の脚部に倒れかゝつた、折しも戰鬥方に耐で、大將は雙眼鏡で敵の運動を監視せられておられました、悠々之を跨ぎ一瞥もせず監視をつづけられ、泰然自若として、彈丸の飛來も知られない様子でありまして、彈丸は無情なるも亦大將の勇と徳とを憚つた様に見へました。此等を想像しても大將が屹然として木像の如く、彈丸雨飛の下に立たれたる狀況が髣髴として目に睹へる様であります。

加藤參謀長は日夜劇務の爲めに持病の胃瘵に悩まされ、此の時、とても堪へられず、

軍醫を尋ね又々注射を乞はれました。

軍醫 さう度々注射せられては後害を貼しませう。

參謀長 後害も何もあつたものではない、今數時間生きてをればよいではないか、もつと多量にやつてくれ。

花火でも自分の作つた奴をドント打出すときの快味は云ふに云はれぬと聞きます、況んや自分の關した策戦が今實行せられ、大功を奏しつゝあるのでありますから、無理からぬことであります。

富士艦には敵の一彈船部主砲の下に落下し、我砲身に當つて爆發し、敵弾としては珍らしく八名の戦死者と五名の重傷者を出しました。淺間も後部水線近くに三弾を受け、舵機を損じ浸水甚だしく、一時列外に落伍しましたが、直ぐに應急修理をしまして、再び戰列に入りました。我が主力艦隊で一時でも艦列を出たのは此の一隻のみでありました。我が主力隊はかく敵を南方に壓しながら掩撃し、烟霧中艦影を發見することゝ緩急に砲撃しつゝ、午後三時頃には第二(村上)戰隊は未だ舊來の位置で砲撃をつゞけ、艦の側面を猛射し、第一(東郷)戰隊は既に左十六点の回轉を終り、敵艦は計らずも乙字陣法の十字火下に立ち、無慘なる打撃を受けました。此の時村上戰隊は敵に最も接近し、三千乃至二千五百米突に進んで劇しく射撃して居りましたが、後全しく一齊左十六点に回轉し主戰隊に續いて、更に丁字陣法をとり、敵を南方に擊壓しました。午後三時七分セムチユークは、その快速力を利用して猛然上村艦隊の後方に突進して來ましたが、これも我が砲火で多大の損害を蒙つたのみで、何の詮もありませんでした。既に戰鬥力を失つたオヌラビヤは同時遂に沈没しました。



此の時(三時六分頃)我が艦隊は既に敵の前路に出で、約南東に向針してをりました。敵はアレキサンドルを先頭として、俄かに第二圖の如く艦首を北西方に向けて、我が後尾を廻りて北走しようとする様子が見えましたから、(かういふ工合にと辨當箱を動かして、我が主戦艦隊が丁字形をとり過ぎ行き、敵艦隊が左方に廻轉し、後尾を廻らんとする形を示す)我が主戦艦隊は今急を要するを以て、左十六点に一齊廻轉し、殿艦たりし日進を先頭として北西に向ひ、更に敵の先頭を壓しました。セメノフ中佐はこれを評して。日本艦隊の危期であつて、若し東郷大將が前の様に、順次廻轉をせられたら、我が艦隊は北走する暇があつたであらうが、一齊廻轉を取られ、殊にそれが真に巧に行はれた故に、我が艦隊は北走するのを思ひ止まらねばならんだと述べてをります。此の間にあつて少しく敵の状況を述べませう。セメノフ中佐の記事による。

余は戦鬪の状況を詳記する任務を持ちたれば、此れを遂行するに最も適當なる後艦橋を觀戦場とした。こゝには右舷六吋砲塔指揮官レドキン大尉居合せた。今(午後一時四十九分)戦鬪は左舷より始まるべきを以て、右舷の諸員は用なきを以て戦況を視察せんとして此處に來たのである。我等兩人は艦橋に立つて、日本艦隊は何故に左舷の方より來襲するやと怪みつゝ筆を下して居つた。レドキン大尉は喜ばしきうに聲を張り上げ、

君見給へ、君見給へ、どうするのか彼等日本人は何を仕様とするのか。

と絶叫した。余は双眼鏡を離さず日本艦隊の行動を熟視し、日本艦隊が順次左舷に廻轉して、逆進を始めたる光景を自ら幻影を見るが如く望見して居つた。レドキンは更に叫びて、

日本艦隊の遣り方は丸で無謀だ、今に味方に先鋒艦を遣付けらるゝぞ。(二時八分我

が艦隊左折順次廻轉した時の事)東郷の遣方は實に絶對に冒險的なる運動であつた。されど一方より考ふるときは、果して針路を逆轉する必要があつたとすれば、此の遣方より外には仕様がなない。(我が艦隊の作戦には最も必要であつた、又此れが爲めに敵を全滅に陥らしめた)我が提督は現下の逸すべからざる此の好機を利用し、一時四十九分只纒かに三笠・敷島のみ廻轉せしとき、三十二ケートの間隔を以て、我が旗艦スワロフより第一發の砲彈を送つた。我より發射する砲彈は跳越彈と不着彈のみで、敵艦附近に落下したが、二三炸烈するものは多く見なんだ。日本艦隊は二分の後、二三番艦富士・朝日の廻轉を終ると共に始めて應射した。最初の射撃は我が艦列を跳ね越して落下した。長形なる日本の砲彈は、恰も遊戯に大なる棒を空中に投じたる如く肉眼にも明かに認むるを得て、豫想せらるゝが如き恐ろしき音を爲さず、一種の長嘯をなして我等の頭上を飛び行くのである。レドキンは微笑しながら、

是がやつぱり靴か。(日本の砲彈が長きを以て露人靴と渾名してをつた)

と問ふた。「然り是れが靴ぢや」と余は答へた。然るに日本の砲彈は空中に廻轉し落下して海上を打つも、忽ち炸裂し高く海水を漂蕩するを見て一驚した、これは未だ曾て見聞もせなんだ所である。跳越彈に次で不着彈が飛來した、不着彈は一發より一發我が諸艦に近接し來り、海上炸爆する破片は空を切つて、舷側や甲板上の諸物に觸れ憂々音を發した。間もなく前方烟筒の向ふに巨大なる水柱起り、黒烟と火焰の迸發するを見た。前艦橋に擔架を持ちて走るものあるを認めれば、何事ぞと欄干越しに凝視した、この余が無言の間に、今しも自己掌管の砲塔に赴きつゝありしレドキン大尉は、艦橋の下より、「ツエレナリ候ぢや」と叫んだ。此の負傷者は少尉候補の青年貴族であつた。



余は第一回の火災を記せんと、手帳と時計を取り出さんとした瞬間、非常に強大で軟かなるものが余の背を打ち、余は空中に跳ね飛ばされ甲板の上に打倒された。余が醒覺したときは火災は已に治まつて居つたが、敵弾防禦塔に命中し、圍壁の中にて炸裂し、十餘人の信號兵は悉く寸断せられた。ノウオシリツエフ大尉とコザケウイチ少尉は、不思議にも負傷に止まり繃帯所に送れた。元氣なレドキン大尉は自己の砲塔内より覗いて、

「どうだ君、全じ光景か、昨八月十日に似て居るか。」

余は之に答へて「全く同じぢや」と断言したがそれは偽りであつた。實を言へば毫も似た所はない。八月十日には余が乗艦ツエザレウイツチは、大口徑砲彈十九個の命中を受けたが、余は其の状況を詳記するを得た。余は此度も亦これを詳記せんと用意したが、豈圖らんや、敵弾來り始むれば詳記どころの沙汰ではない、其の命中個數すら數ふことが出来なんだ、敵弾は一發又一發と列をなして來り落下命中するのである。又其の炸裂の強き烟筒の引繩にでも、欄干にでも、些々たる器物に觸れば、甚しきは水面を打ちても、忽ち炸爆するのである。其の落下さるや、爆發力の強き砲彈ではなく、水雷ではないかと疑はれた位で、碎片四方に飛散し大砲が其の儘砲架より顛倒せられたことさへあつたが、此れは炸裂彈の破片などのした業ではなく、爆發力の強き震動によるのである。又砲彈炸裂の熱力は非常の高度にて、恰も流動體となれる火焰が、總ての物に鑄掛け燒くが如くで、可燃性のものは云ふ迄もなく、吊床鞆など燃え難きものも、忽ち麻を燒くが如く燃焼するのである。

余は我知らず之の舵手や信號技師等の、惨死せる淋漓たる血溜りに足を滑らしつゝ、司令塔の提督の下に走つた。提督と艦長は防禦壁と屋蓋の間なる窓より余の方を見て、

艦長は平時の如く活發に手眞似をしながら、提督に向ひ、

「閣下間を變じませう、敵彈の命中は非常です、火災が起りました。」

と叫んだ。提督は、

「まあ少しまで、我が射撃も亦熾んぢやないか。」

測遠器未だ破壊せられず、ウラヂミールスキイは大聲を出して命令を傳へ、測遠器の部署にあるものは、頻りに電話で各砲塔に敵艦迄の距離を報知した。日本艦隊は既に全艦列の廻轉を終りて、十二隻の敵艦は整然たる陣形をなし、漸次我等の前程に進み我と並行して航走して居つたが、少しの混乱をも認めなんだ。余が双眼鏡には、敵艦上の遮蔽物や人影をも望見するを得た。再び轉じて我が艦内は如何と願れば、破壊慘狀を極め、艦橋上の建造物は悉く崩壊せられ、甲板の上は押し潰されて火災を起し、死屍累々と横はつて居り、信號所や測遠器も已に悉く崩落盡滅せられ見る影もない。又眼を轉じて友艦如何と願みれば、アレキサンダー・ポロヂノも同じく火災を起し、炎々たる黒烟に包まれて居つた。時は午後二時二十分であつた。余は艦尾の破壊せる艦材の間を徘徊して居つたら、前甲板に赴かんとするレドギンに邂逅した。彼は劇しく呼び掛けて、

「あ、君に逢ふて好かつた、艦尾左舷の操砲はもうだめだ、砲塔の下も周圍も火災で丸焼けた、人員は火熱と烟で卒倒するといふ始末ぢや。」

日本艦隊は我が航路の前方を横断して、漸次右舷に廻轉した。余は我が艦隊も亦同一方向に針路を轉ずるであらうと豫期したが、提督は依然として舊針路を航進した。此れは提督が出來得るだけ、彼我の間隔を接近せしめんと欲したのであらうと想像した。なせと云へば我は既に測遠器を破壊せられ、艦首も崩壊せられ、今は唯近攻射撃を爲す



の外なきに至つたからである。然れどもこれでは敵の縦火を浴びることゝなるを以て、今に針路を轉するであらうと、今か今かと刻々相待つて、時計の針許り眺めて居つた。三笠は益々近接し來り右舷六吋砲は（距離が近づいたから）既に發射の用意に移つた。此の時我が艦隊は急速に右舷廻轉をした、余は始めて安堵の太息を洩した。余は梯子を降りてデミチンスキイに何をなし居るやを問はんとしとき、上より降り來れる艦長を認めめた。艦長の頭は鮮血に染まつて居つた、彼は踰浪として歩を運び、慄ふ手で欄干に取縋つて居つた。此の時何處か直ぐ近くで、敵彈炸爆の震雷の如き轟音を聞いた、その震動で艦長は梯子より頭を前にして轉倒した、余は無意識に彼を手にて支へた。艦長は平素通り早口に、

大丈夫だ、是れ位の事で、只一寸眩暈がした。

と、殊更に活潑に言ふて我等を安心せしめんとし、蹣跚しながら猶ほ進まんさせられた。然し何處よりともなく「艦尾砲塔爆發」の聲を聞いた、砲塔の鋼鐵覆蓋は艦橋よりも高く跳ね上がった、と又殆んど此れと同時に、壊裂された鐵板は洪鐘の如き音をなし、前甲板の端艇は粉微塵となり、火の附きたる木片飛んで雨の如く、濛々たる黒烟と共に我等を包んだ。これは敵の巨彈が炸爆して前方烟筒を崩潰したのであつた。敵人一團となつて居つた信號兵等は、此の凄ましい光景に心膽を奪はれ、殆んど發狂して、既に破壊せられた前甲板に突進せんとしたが、漸く此れを引留めた。旗艦は今已に戦列を脱し自艦の火災黒烟の爲めに敵艦を望見することが出來ぬに反して、敵艦隊の方からは能く我等を見得て、猛烈なる砲火を集中し旗艦を全滅せしめんとした。敵の砲彈は間斷なく一彈は一彈を追ひ、其の凄い有様は砲彈の雨注と謂はんよりも、實に烈火と熱鐵の旋風

といふのが當つて居る位であつた。既に舵機を失つた我が艦は、殆んど同一位置に止まりながら、徐々に機關にて艦体を廻轉し、其の期する所の針路に向ひ、我が艦隊に續航せんと試みた。我が旗艦はかくても健闘の勇は失はなんだ、破壊せられたる舷側を敵の正面に振り向け、備砲の用ゐらるゝ限りを操縦して半狂乱に猛射した。我が旗艦が針路を變じたとき、艦尾を風上に向けたからたまりつこはない、渦巻く黒烟と火焰とは海風に靡き、余が佇立せる前艦橋に眞正面に吹き付けた。余のこれに氣が付いたときは、濛々咫尺を辨せざる黒烟に包まれ、熱風猛烈に襲はれ、顔も手も烈火に炙らるゝ如く、烟に噎びて卒倒せんとした、眞に焦熱地獄であつた。どうしてこゝから逃れたかは能く記憶にも止まらぬが、免に角に上部砲台内に一身を救ひ得たは眞に僥倖であつた。危険を遁れ息も切れぬに喘ぎつゝ、水を飲み両眼を洗つて四邊を眺めた。その内に中央六吋砲塔の後ろに猛烈なる火災起り、これを消防せんとした時、又々幕僚室を圍みたる鋼鐵の陰に大火災起り、隔壁鐵板は灼熱して咆哮するが如く、火力の震響は砲聲の間にも聞くを得て、倒るゝものが出來、斃れて動かざるものが出來、梯子を上下するもの、奔走するもの、名狀することも出來ぬ混雜であつた。かくして五分十分經過したが、時刻の過ぎるも知らなんだ。余は司令塔にある提督と同僚の安否を氣遣ひ、上甲板の方にと駈上つた。破壊せる艙蓋より上甲板に脱出するは容易の事ではなかつた。後ろには炎々たる毒烟に焼くる梁架の投落し來るあり、前には壓し潰されし破砕物の顛倒するあり、止むなく再び下りて左舷の方へと上つた。こゝは幾分清潔にして、六吋砲は完全にて猛烈なる射撃をして居つた。間もなく何處にや身邊を去る遠からざる所に、轟然たる炸裂の爆聲が起つて、彈片四邊に跳躍し憂々の音をなした。硝煙の散するを待つて砲塔の方を見たら



壊崩せられた六吋砲は、獨り悄然と砲塔内より其の砲身を露出して居つた。指揮官ダンチ大尉は防禦扉内より躍り出で、

誰の部署も萬事終つた、砲口は裂けた。

余は行きて門扉の中を覗ぞいた。二人の砲員は身体を不思議なほど屈曲せられて打倒れ、一人は目を大きく開いたまゝ両手で脇腹を抑へて居つた。掌砲長は、

君、此處に何をしに來た？

余 司令塔に往かうと思つて。

掌砲長 司令塔に何仕に行くのだ、誰も居らんど。

余 何？ 誰も居らんど。

掌砲長 無論だ、今ボクダノフが此處に來て、司令塔は破壊せられ、火災が起つて、皆

逃げ出したと云つた。

余 提督は何處に行つた？

と、此の問答の間に、余が身邊に敵弾が爆發した。余は右脚の後に弱き壓迫を感じ、何等の痛みもなく打撲を受けた様であつた。後ろを振り向けるに、余に伴つて居つた五六名の乗員は、一人も其の影を認められなかつた。「此處に擔架はないか」と、ダンチチが驚きの聲を聞いて、余は彼方に振り向き、「擔架をどうする」と問つたら、彼は「君を乗せて繃帶所に行くのだ、流れるぢやないか、それ血が」と叫んだ。余は始めて右脚を見たら鮮血が滾々と流れ出して居つたが、尙ほ立つては居られた。時は正に三時であつた。余は繃帶所の光景を一見して我知らず梯子の方に逡巡した。こゝに収容されたものみにて、日本全艦隊の死傷者より多數であつたであらう。

先きに假繃帶所で見たのは、卓や椅子や破れたる藥瓶、繃帶材料などの間に、算を乱して斃れたる慘絶の死屍、……死屍と云ふよりは手足を切斷せられた、何物かの胸部といふが相當で、これが人体遺骸の一部とは、一寸判断が附かぬほどであつたが。こゝもこれに劣らぬ惨狀であつた。佇立するもの、座するもの、横臥せるもの、擔架の上に横はり、已に絶命してをるものもあれば、急に敷きたる帆布の上で轉頭してをるものもある。今は皆感覺を恢復して苦痛を生じ、苦惱苦悶の喘々たる呼吸により吞吐せられた空氣は、一種異様の温氣を含み、酸味を交へ、惡臭を以て充滿して居る。電燈の光は腫げに物凄く、向方には白衣に赤き記章を附けた人影が、倏忽として働いて居る。負傷者の内には早く殺して此の苦痛より救へど、哀心より請求するものも少くなかつた。余は負傷の手當を受ける順番の來るを待たず、又他人を押し除けて前に出るを欲せず、急ぎ下部砲台の鐵梯を攀ちたるに、思ひがけず頭部に繃帶したる艦長に出逢ひ、司令塔に敵弾が炸裂したとき、我が提督及び幕僚が如何なる運命に遭遇したかを聞くを得た。スワロフが戦線を離れんとしたとき、司令塔附近に命令した敵弾の爲めに、提督並びにウラヂミールスキイは頭部に負傷し、三等大尉ポリタノフ彼に代りて司令に任じた。落下命中する敵弾は雨霰の如く、彈片彈子土砂を卷く様に、司令塔の菌形の覆蓋の下に侵來し、塔内の凡ゆる器物を破滅し、遂には羅針盤をも打ち破つた。我が提督は頭と背部と脚部に負傷せられたるも、尙ほ充分に元氣を有せられ、同時に負傷せられた艦長は繃帶所に収容せられた。提督は一端這入られた水中司令塔より、展望に便なる場所を探らんと、上甲板に赴かれたが、既に焼け崩れて前部砲台に進むべき通路なく、左舷中央の六吋砲塔に赴かんとしたるも、是れ亦其の道なく、身を反して右舷中央の六吋砲塔に入られた。かく塔



内で彷徨する際、又負傷せられ左の脚<sup>かしこみ</sup>骨<sup>こみ</sup>頭<sup>かぶ</sup>近く、敵の碎彈來りて、大神經を絶斷し、歩行の自由を失はれた。

余は再び日本艦隊の方に振り向いた、日本艦隊は正しく前状を保つて、一つの火災もなく、一つの傾斜もなく、一つの艦橋の破れたるを見ず、全然演習でも行つてゐるものゝ様に見えた。

甲裝海防艦セニヤウイン乗組某參謀將校の記述によれば、

二時十分（日本艦隊の時間では約二時二十五分頃）旗艦スワロフは既に怖い損害を受け、オストラビヤは既に艦首の砲塔を破壊せられ、橋折れ舷傾き、烟筒は篩の如く貫通せられ、二艦共に火災を起して黒烟に包まれ列外に出たと記してある。（開戦後唯十五分間にこんな損害となつたのは此の艦隊でも意外であつたらう）仍て亞歷山三世が先頭に立つて全艦隊を指導した。日本艦隊は之に對して全線の砲火を集中した。二時二十五分ボロヂノ次でアリヨールも亦止むなく列外に出た、オストラビヤと共に計らず三艦一直線に並列したから、日本艦隊の砲火は主に此の集團に向つた。ボロヂノが火災を防ぎやつと列にかへつたとき、亞歷山は又火災の爲めに列外に止むなく走つた。爲めにボロヂノが代つて暫く先頭に立つた。オストラビヤは傾斜益々甚しく機關の運轉を止め、艦首は全く水中に沈んだ、彈孔よりは激浪が堤のされた様に渦を巻いて流れ込み、乗員今は海水を泳ぎ廻つた。艦長ヘルム大佐は幸に微傷だもせず、勇悍にこれを指揮して居つた。人々が艦長に向つて救助を求めたら、艦長はこれに訣別して、

御身等は去つて救を得よ、余は此處を動かない。と云ひ、去つて司令塔に這入つて、遂に出たのを見たものがない。余はオストラビヤ滅亡

の光景を目前に望見した、その慘状はとても終生忘るゝことは出来ぬ、今でも目を閉ぢれば見える様である。刻一刻左舷に傾き、數百の乗員は既に救助を得るの道なく、多くは裸となつて、右舷の上に急ぎのぼつた。彼等群集の頭の上には、日本の砲彈が容赦もなく落下して炸裂した。余の乗艦がオストラビヤの眞横を過ぎしときは、右舷艦側のキール迄海面に露出し、其の鐵板は日光を浴び、丁度海中の大怪魚の水に濕める鱗を見る様であつた。右舷に集合した人々は誰が命令したかの様に、先を争つて艦腹の上に急ぎ上り、或る者は足を滑らして顛倒し、或は頭を倒にして落下し、頭足と腹背との嫌ひもなく蹂躪し、その附近には沈溺して救助を呼ぶ聲、相抱いて浮沈するもの、慘憺たる情景は能く筆舌の盡される所ではない。しかも日本の砲彈はこれを吊ふが如く、始終其の頭上で爆發した。かくて瞬く間に我がフェルケルサム少將の旗艦オストラビヤは、終に其の影を沒了し、跡には大なる盤渦を止めた。余は覺えず時計を眺めたら、實に二時四十五分（日本時間三時）であつた。

又セメノフ中佐の記する所では、

余がロ提督と共に驅逐艦ブイヌイに移乗した後、余が傍にオストラビヤの一士官も救助し居らるゝを認めたから、オストラビヤ沈没の状況を問ひたるに、彼は手を振りながら殘念に堪えぬ様な、耻辱に堪えぬ様な切れゝなる語調で、

何の……思ひ出しても悲傷の種だ！ 全く不運！ 全く下手だ……敵の射撃の巧妙なことは、誰も争ふことの出来ぬ事實だ。……照準が上手と云はうか、熟練と云はうか、實に甘いものだ！ 彼等の幸運彼れ等の手柄だ。敵彈は三發位續いて同じ處に命中するのだ、君、解つたか皆同じ處にだ！ 艦首砲塔下の吃水線の下に皆命中



したのだ！それが貫通孔位の穴ではないか、丸で門を開けた様なものだ！馬車でも出入りする事の出来る様な弾孔だ！艦が傾いたと思ふと、丸で瀧だ、防水栓も何もあつたものではない、何もかも皆な流れた！

彼はかく話して遂に其の言を終るに堪えぬ様に兩手で頭を覆ふた。

これが午後三時頃の彼我主力隊の戦況であります。開戦後一時間足らずして勝敗の数は既に此の時に決してをりました。

列を離れ孤立した敵の旗艦スワロフは益々大破して、其の一橋二烟突を失ひ、全艦体煙と焰に包まれ操縦することも出来ない様に見え、備砲は只二三門を用ゐられる許りとなりまして、甲板上一の残るものもありません。只甲板が水の上に浮ぶ様な有様となりました。それでも流石に旗艦で、健氣にも其の運命の終るまで有らん限りの砲撃を続けました。外の諸艦も皆多大の損害を受けて混乱し、北走の企ても思ひ止まつたらしく、再び針路を東方に執りました。そこで東郷艦隊も、亦一齊に此度は右十六点に回轉して再び、三笠を先頭とし上村艦隊もこれにつゞき、遁るゝを追ふて益々急に敵の集弾を被りました。先きに日進は旗艦（三須司令官旗艦）で殿艦となつて非常に敵の集弾を被りましたが、其の照準が高きに失して軍艦旗に數弾を受けましたのみで、命中は少なくありました。此の時風波は益々荒れ砲座には中甲板より激浪打ち込み、上甲板よりは飛沫驟雨の様には濺ぎ、兵員皆濡れ鼠となり、砲門より打ち込む激浪の爲めに砲手の兩眼眩めくを、他の兵員手巾にて之を拭ひやり、彈丸の水に侵されんを恐れては、各員これを抱いて濕潤を防ぎなごしました。一万噸以上の大艦も簸上の豆の如く翻弄せらるゝ中より、照準するの辛勞と熟練は、眞に人の手ではなく、神の手の様でありました。始終艦橋に立つて指揮せられた三須中將は、斷

片飛來して遂に左眼を失はれ、其の參謀松井中佐はこれに戦死せられました。されど中將は少しも意どもせられず、指揮を續けられました。

敵の陣形は乱れ艦數は減じ、單縦陣なりしものは或ひは右し或ひは左し、離れ々々となりました。之に反して我が陣列は、整然一糸乱れず、各艦共に四百米突の間隔を保つて、回轉變針手の指を使ふが如く、進めば共に進み、回れば共に回り、丁度レーン上を走る列車の如く、又常山の蛇の様で、眞に操縦の妙を極めました。米國海軍大尉ホワイト氏が嘆稱して、日本艦隊運動の正確なる時計の針の様であるといつたのは適評であります。午後三時五十五分川嶋岩手艦長は全艦員に訓令し、

我が軍の勝利は豫定の如く進行する、各員勇氣を奮つて更に三合四合の勝利を期せよと、勝利が豫定通りに進行するなどは、痛快の極みではありませんか。午後四時四十五分頃に至るまで、主戦隊の戦闘に就ては別に著しき現象なく、敵を南方に押し砲撃をつゞけ、時々機を見て水雷を發射したに過ぎません。此の間に壯烈の事蹟として特記せねばならぬのは、千早及び廣瀬（順太郎）驅逐隊が午後三時四十分の頃、鈴木（貫太郎）驅逐隊が午後四時四十五分の頃、敵の旗艦スワロフに對し勇敢なる水雷攻撃をしたことでありませう。此の時口中將は負傷して驅逐隊ブイヌイに逃れ、全艦隊指揮權はネボカトフ少將に移つてをりました。此の襲撃中不知火・朝潮は敵艦より猛射せられ、共に一弾を受け一時危なかつたが、幸に沈没を免れました。午後四時四十分頃敵の主戦隊は漸次南方に向つて逃走を企てるものゝ様に見えました。我が主戦隊は、上村艦隊を先頭として、これを追撃しましたが、少時にして遂に敵影を烟霧の裡に見失ひ、南下約八海里、行々我が右方に彷徨離散する敵の二等巡洋艦以下特務艦を緩射しました。これは先きに我が補助艦隊の爲めに



損傷せられたものであります。此の際補助艦隊は猶其の南方で劇戦中でありました。東郷艦隊は目指す敵艦隊を見當らず、敵の目的は北走でありますから、午後五時三十分再び針路を北方に變じて、敵の主力艦を索め。上村艦隊は更に南西方に折れて、敵の主戦隊を索め、且つその巡洋艦隊に迫り、爾後日没迄分離して、各々別の行動を取り相見ることには出来ませんでした。此の時は敵主艦隊も我と全じ様に偶然にも二つに分れて居りまして、一つは北走し、一つは南方で味方の巡洋艦を助けてをつた時であります。さて此の間に於ける敵の記述を穿鑿しますれば、

午後三時頃無線電信がネボカトフ少將の艦隊に達し、

我が艦隊全部は敵艦隊の包圍を衝き破つて、極力浦壙に猛進せよ。

と、これがロ中將最後の命令でありました。

さきの某參謀將校の記事によれば、

今やボロヂノは航路を東方に取りて我が艦隊を導き、日本艦隊は我が艦隊の左舷首より壓迫して追撃し、先鋒諸艦を威迫しつゝ、我が艦隊の前程を横斷し去るもの、様で、少しく右舷を轉じた。ボロヂノはこれを見て右舷に向ふの不利を認め、その上に日本艦隊の後尾に大なる損害を與ふるを得るであらうと思ふたが、俄かに左舷八点に回轉して日本艦隊後尾を通りて北方に向はんとし、戦闘は少時我が右舷に移つた。日本艦隊はこれを認めるや、否や、一齊急速に左舷十六点に回轉して、日進を先頭として再び我が航路を横切るが如く反進した。我が艦隊は今漸く列に復した亞歷山三世を先頭とし、更に右舷に轉じた。日本艦隊も二たび左舷十六点に一齊回轉して、我を追撃しながら並行の航路を取りて進んだ。日本艦隊の此等の運動は圓滑で巧妙を盡してをつた。

我れは益々右舷に轉じ、三時十五分俄然スワロフが敵と我との中間にあるを認めた。スワロフは舵機の汽管を修理しながら、艦隊に追尾して、艦隊が迂回運動をする間に、今まで来たのである。我が艦隊はスワロフを掩蔽せんとして、三時十五分再び左舷に轉じた。敵の各戦闘艦は、さなきだに非常に傷滅してをるスワロフに向つて、其の砲火の一部を注いだ。亞歷山は一たび其の十五ヶール迄追ひつきしも、目的を達することが出来ず、これを左方に遺して、俄然右舷に回轉して反對の航路を取り、他の諸艦もこれに續いた。スワロフの砲臺上には耳を聳する許りに、

見捨てられた、去つて仕まつた、既に我が力は盡きた。

など叫ぶ不平の聲を聞いた。余は敢て口外はせなんだが、火災の黒烟の中にも破壊せられた舷側にも、乗員の失望せる蒼き顔にも、「力盡きた」との語を讀る、様に感じた。

四時半頃に我が艦隊の前程右舷に當り、再び大火災の爲めに燃焼し居る旗艦スワロフを見た。同艦は既に烟筒を失ひ、マストを挫折せられ、上甲板の代りに僅かに其の碎片を遺すのみであつた。噫、我が波艦隊の旗艦クヤニージ・スワロフの慘狀は、これを艦体と云はんより艦体の骸骨と名附けた方が當つてをる。艦内よりは黒烟渦まき騰り、無数の弾孔よりは紅蓮の如き火舌を吐き出し、かくても其の快速力を失はず、恰も神話にある火焰船の如く、又鼠陥しに這入つた鼠に、石油を灌いで火を付けた如く、方角も撰まず猪突狂奔し、今一度艦隊に加はらんとした様子であつたが、其の目的を達せず、唯右方より左方に航走して去つた。此の際我が艦隊は左舷備砲を以て戦ふたが、再び右舷に轉じ漸次東南に航行し、後、南方に轉じた。

更にセメノフ中佐の記に戻れば、



ロ中將は背部頭部足部に負傷せられて居つた。午後五時過ぎスワロフに、水雷艇近づきたりと警報が傳はつた。我等は今猶は残れる唯一の備砲に驅け付けた。然るに敵と思ふたは、豈圖らん我が驅逐艦ブイヌイであつた。甲板上に居つた艦長クルイデアノーフスキーは手旗信號で、「提督を取れ」と頼んだ。余は砲臺上よりブイヌイの運動を望見してをつたら、突然提督の從卒が来て、

佐官殿、何卒砲塔に來て下さい、驅逐艦が來ましたが、提督閣下は移乗を欲せられないのです

と告げた。提督の負傷は如何程の重傷かと誰も識らなんだ。人々の見舞に對しても元氣に「何んでもない」とのみ答へられ、下部砲塔内に移られても箱の上に座し、傍人に戦闘の経過を問ひ、後又沈黙せられ、その行爲は少しも平素に異ならなんだ。何人も提督の戦況質問は一時的興奮状態の精力に過ぎず、又一時意識の閃發に過ぎぬと思ふものはなかつた。提督に驅逐艦の來つた旨を報告したら。提督は目の覺めたる様に、

幕僚を集め

と明瞭と命令せられた。後、再び頭を垂れて又何事を云ふも應せらるゝ力はなかつた。居住甲板内は電燈の滅したる爲めに暗夜と全しく、絶息する程の烟に充たされ、幕僚を呼び集めるにも人影を見出すことも出來ず、只聲を出して呼ぶのみであつた。されど一人の答ふる人もない、この暗黒なる烟の中は聞として音なく、實に死の領に歸したる墓中の様であつた。スワロフ乗員九百人中、此の時迄生き残れる者としては、此の下部砲塔に集まつた少數の人員に過ぎなんだ。提督は鮮血淋漓る手巾を捲きたる頭を低く垂れ、全く昏睡の状態に陥られた。余は近づきて、

閣下、驅逐艦が來ました、御移り下さい

と叫べば、提督は頭を横に動かされた。水兵クルセル等は半ば焼け残りたる吊床と、繩を持ち來り筏状のものを作り、數人の者は砲塔内に這込み提督に手をかけて抱き上げ、漸く艦尾の昇降口の邊に運び來たつた。驅逐艦の艦長コロメイツエフ中佐は、一生一度の冒險で、スワロフの舷側へと近寄つた。怒濤は澎湃として一上一下驅逐艦を翻弄し、其の薄弱なる舷側は、岩よりも堅き戦闘艦に觸れんとして、破壊の災難に刻々去來し、其の危険云ふ許りない。驅逐艦が波に揺り上げられて旗艦の方に來た瞬間に、彼の吊床を用ひて、丸で投げる様にして驅逐艦に乗り移らせた。クルセルは手巾を打ち振りながら、

ウラー、提督驅逐艦移乗！ウラー

と絶叫した。スワロフにも驅逐艦にも之に和して歡聲が起つた。余も提督と共に驅逐艦に移つた。

かゝる際にも日本艦隊は一生懸命に其の砲撃を續けたから、驅逐艦にも弾片の爲めに陸續死傷者を出した。若し一敵弾が命中するあらば、驅逐艦の覆没は免れなんだ。ボクダノフは鐵拳を固めて打つ様な真似をしつゝ、

愚圖くするな、早く離せ！提督を沈没させるな！！

と叫んだ。後僅かな殘員は移乗を拒み、見送るものも、振り返るものも、今生の訣別、呼はる聲も波に濡りて悲痛の極みで、これが午後五時過ぎであつた。ブイヌイ艦長は、余を提督の許に遣はし、猶能く指揮を取られると思はるゝか、又孰れの艦に乗り組むことを望まるゝかを問はしめた。時に提督は中ば眼を閉ぢ、辛く頭を動かして、少時何事



かを思ひ出さんと試みられる様であつたが、

否、何處に余……能ふか……見よ……指揮權ネボカトフ  
と囁やき、次で意外にも聲を施めて、

戦闘隊形を維持せよ……浦壆……東北二十三度

と云ひ終りて、再び昏睡状態に沈まれた。五時三十分頃指揮權は遂にネボカトフ少將に移つた。ブイヌイは已に沈没せるオスラビヤの乗員の一部を收容して居つた。ロ提督はブイヌイが損害甚しきに及んで、更にビエードウイに移乗した。

東郷艦隊は午後五時四十分頃に、其の左方近距離にあつた敵の特務船ウラルに一撃を加へ直ちにこれを撃沈し、尙北方に索敵して進航する際、左舷艦首に當り敵主力の殘艦六隻が北東に向ひ遁走しつゝあるを發見しまして、これと並行戦を再開し、漸次敵の前方に出で、其の先頭を撃壓しました。爲めに始めは北東に針路を執つてをりました敵艦が、次第に西方に屈折し、遂に北西に向針するに至りました。此の並行戦は午後六時より日没迄連續し亞歷山三世と見へたる敵艦は、早く列外に出で、後方に落伍しました。先頭にあつたボロヂノは午後六時四十分頃より大火災を起し、七時二十三分に至り俄然爆烟に包まれて瞬く間に沈没しました。これは火災の彈藥庫に及んだ爲めであつたのでありませう。此の時我が朝日は敵に迫ること實に一千二百米突で、急劇な射撃をなしてをりましたが、敵艦が最後に發した一弾は、朝日の左舷に命中し、敵艦第一の暴威を逞うし、森下中尉以下七名の砲手を斃して、司令塔に在りし十一名を傷けました。森下中尉は右下脚全部を奪ひ去られ鮮血瀧の如く進むも、少しも屈せられず、自ら剣を杖として治療室に下り、敵艦沈没を聞いて万歳を大呼し莞爾として瞑目せられました。同時に傷きし二等水兵山本保太郎は頸部

通貫創で、万歳を叫ぶごとに鮮血の迸ること虹の如く遂に絶息しましたが、男兒一片國に報するの志、共に壯烈とも悲絶ともいはふ様がないではありませんか。此れはほんの一二例を挙げましたので、各艦こんな壯烈な例は珍らしくないのであります。開戦より此の時迄敵と或は合し或は離れること五たび、毎回接戦三十分餘に亘りました。

曩に（五時四十五分）分れて更に南下せし村上艦隊は、補助艦隊の記事にもある通り、敵に主戦隊（敵主戦隊四隻も我より先に分れて南下し）加勢せし爲めに、我が巡洋艦隊は難戦に陥り、笠置は遂に油谷灣に避くるの止むなき際、俄然來り合せてこれを助けた爲めに、敵の諸艦隊は南走を思ひ止まり混乱して又々北向しました。之を追撃する際、已に傾斜して進退自由ならざる亞歷山三世が、ナヒモフの側に來りて遂に顛覆沈没するを見ました（七時三十分）西天に傾く太陽は斜めに敵艦を照して其の悲運を吊ひ、滿つる潮は彈孔より浸入し、敵殘艦の運命も最早長からまじく見えしました。此の日風浪の高かつたのは一寸考へると、我が射撃にもよほど邪魔でしたであらうと思はれましたが、此風浪が大變に敵艦の破滅を助けたは不思議な天祐で、眞に神風であつたと云ひます。その理由は如何にも敵艦が揺れて照準は難儀であつたに相違ひなかつたでありませうが、併し我が砲手の熟練なるこんな事には閉口しませんでした。總て戦艦の甲鐵は吃水下は薄くて破れ易い、此は吃水下に敵彈を受けることは先づないといふ位であるからであります。此の日は浪が高い爲めに、屢々吃水線以下を現はしました。こゝを我が砲彈が見舞つたからたまりつこはありません、孔が大きく開く許りでなく、揺れ返した時に海水の這入ることは、吃水線上の穴の比ではなかつたさうであります。敵の記事にもある様に、ほんとうに瀧の様であつたさうで、丸で水雷を受けた様なもので、戦闘艦でも何んでもたまらなかつた譯であります。戦後捕



獲となつて来たアリヨールを、一米國人が舞鶴軍港で實見しての記事中に、

アリヨールの左舷の甲帯には小車を引き入れるに足る大孔三四ヶ所あり、橋折れ煙筒倒れ、甲板上の慘状目も當てられず、距離の彈痕のみでも四十三個を算し、一ヤールとして無疵の地なく、左前部十二吋主砲は砲口より八吋の處で折れ、或る六吋砲塔は一大罅を生じ、其の裂隙の側には鋼塊五寸餘もまぐれ出してをつた。且つ下瀬火藥の爆發するや、彈壁數千の小片となりて、此の碎片が猛烈なる勢で飛散し、障壁甲板のみならず、傳聲管・電線其の他傳令・電力機關の連絡を破壊し、燒燃物質は悉く之れを火き、將卒この碎片の爲めに戦闘力を失ふ。余が見たる一水兵の寫眞の如きは、一榴彈の小破片實に一百三十個を受けてをつた。故に艦は能く浮ぶも、戦ふ力なきに陥るのである。薄晡海は紫色に暮れかゝつた頃、乱れ飛ぶ砲火の閃めき物凄き邊、敵艦も最早や末路に近しと見るや、撃手の將卒は大に勇みたち、祝杯を擧げようとしたが、瓶もコップも破壊して中々得られません。せめて嶋村司令官と川嶋艦長だけになりましたが、これを献せんと漸く索めてこれを捧げ、沈没に瀕する敵艦を睨みつゝ、なだれ彈の劇しく飛び交ふ下に、満身の喜悦を以て萬歳を唱へ、掌の痛むほど拍手しました。これが日本海々戦勝の祝杯の先き驅けでありませう。

敵の某參謀は記事を進めて、

五時半には日本艦隊は再び右後方より出現し、我に並行の航路を取り急駛追撃し始めた。我も亦右舷備砲を以てこれに應戦し、先頭亞歷山三世・ポロヂノ・アリヨール三艦特に苦戦に陥つた。六時頃亞歷山三世に大火災起り、艦首崩潰し、其の左舷には徑二十尺餘の貫通孔を認め、六時三十分には甚しく左舷に傾き、廣き甲板上森として人影なく、

只一人の信號兵が「我れ危難に逢ふ」の信號を掲げ、左方艦列外に出で忽ちキールを上にして顛覆した。これが餘り急であつたから、キールの上に出た者は僅かに十五六名に過ぎなんだが、皆共に戦死し、九百人の乗員中一人も生存者がなかつたので、如何に壯烈悲惨な最後であつたかを、語り傳ふるものもない。ポロヂノも亦同じ運命に沈んだ。即ち七時十分頃日本の大口徑砲彈空を切つて飛來し、艦尾砲塔附近の吃水線に命中した。余が乗艦セニャウインよりも其の炸爆の音を聞き、間もなく左舷より火焰の噴出するを見、右舷に傾斜すると見る間に俄かに顛覆した。同艦九百の乗員中、不思議にも唯一人の生命を拾つたものがある。それは日本水雷艇に助けられた水兵ユスチンである。その語る所によれば、彼が其の長官たるチェバッキンの命により、顛覆する少前に漆々たる黒煙を潜ぐり艦尾に赴きしときは、甲板は崩潰せられ所々に大穴が出来、鐵梯は破壊せられ、上下甲板の通路も絶え、士官室も提督室も散々に破壊せられ、猛火に包まれ辛うじて艦尾に至りしも、人影だになく、慘憺たる死体累々として横はり、覺えず戦慄した。又セメノフ中佐はブイヌイに移乗後、七時頃艦内何處となく

ポロヂノを見よ、ポロヂノと消魂しき聲を聞き、余は手を以て身を支へ起き上りて彼方を望んだ。今迄ポロヂノの在りし所には、唯怒濤の雪の様に白く泡立つを見たのみであつた。

七時五十分我が艦隊は西に向つて航進してをつた。此の時既に巡洋艦オレーグ・アウロラ・ゼチチュークの諸艦は何れとも海上に見えなんだ。此等諸艦は勇悍に戦没せしが、或は運能く浦壚に逃走したらんと、其の幸運を賀せしに、後に聞けば圓らざりき、日本水雷艇の攻撃を避けて南走してマニラに逃げ込んだとは。



日將に暮れんとして我が驅逐隊及び水雷艇は、東南北の三面より漸次敵に迫り、已に襲撃準備の姿勢を取りました。我が主力隊等は次第に敵に對する壓迫を弛め、蒼色たる暮色と共に、七時二十八分東方に變針し、同時に龍田をして、全軍北航して明朝鶴岡島に集合することを命ぜられました。これより豫て策定した我が作戰の第四段に移らんとするのであります。

#### 十一、彼我補助艦隊戰況

此れから彼我補助艦隊の戰況よりつゞいて、二十八日の追撃戰の御話に移ります。五月廿七日午前十一時頃、一たび本隊に合しました片岡巡洋艦隊・出羽・瓜生・東郷（正路）戰隊は、戰闘開始の令が下ると共に、午後二時五分を以て我が主力隊と分れまして、敵を左舷に見て反航南下し、豫定の戰策に従ひ、敵の後尾に占位せる特務船アウロラ・スウイート・ラナ・アルマーズ・ドミトリドンスコイ・ウラジミル・モノマフ等の巡洋艦隊を襲はれんとしました。前方には主力艦隊があつてこれを壓し、後方には此の各戰隊來りてこれを扼し、包圍の形勢が全くなつて、威迫の力が益々加はりました。其の策戰の雄大卓越であることは、眞に古今を通じての偉觀と云はねばなりません。濛氣天を籠めて、後續艦の展望さへも自由ならぬ渺茫たる海上で、數十裡に亘る敵艦隊の進路から、これに對する我が艦隊の對抗、一々これを掌に指す様に明かで、其の運用の奇巧靈妙でありましたことは、又天下一品と云はねばなりません。善く謀り善く戰つたこと、寔に世界の双美でありました。

此れ等の各戰隊は左提右挈して、午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦隊に對して、左舷にて反抗戰を開始し、遂には敵の後尾を撃旋してその右方に出で、更に並航戰を試み、

始終我が快速力を利用して、臨機應變に正面を變じ、丁度繩を縛ふ様に、或は敵の右に顯はれ、或は其の左に廻り、變化自在、敵も之に應戰するに眼が廻る様でありましたでせう。斯ること毎回約三十分で、敵は動搖潰乱し、其の特務船の如きは、早や右に避け左に逃げ、途方に暮れた情態に陥りました。午後三時を過ぐる頃に、アウロラらしき敵艦が單獨突進して來ましたが、我が猛射により多大の損傷を負つて撃ち退けられました。敵も中々に奮戦して戰慄なる際、二つの弾が我が笠置に命中し、一彈爆發して砲手二人を斃しました。一艦の兵員爲めに愈々勇奮し、射撃益々正確となり、敵に迫つて急撃しました。これを見て同三時四十分敵の驅逐艦三隻我れに向つて突進して來ました。我が砲口は三隻に集中しました。激烈正確なる射撃に耐へかね、一隻は煤烟に包まれ蒸氣を揚げて敵艦の間に隠れ、一隻は煤烟を上げ烈しき水柱の中に沈没してしまひ、残る一隻も空しく打ち退けられました。敵は此の驅逐艦を犠牲として、我が砲火を此の方に引き寄せ、隙を狙つて包圍より脱け出さんと、俄かに西南に轉針し始めました。出羽・瓜生戰隊はこれを見て、直ちに同轉して、又其の前路を壓迫しました。午後四時頃に及んで、兩隊攻撃の效果は愈々發展して、敵の後方部隊全く潰乱して個々分裂し、皆多少の損害を受けぬものはない位でありました。特務船の中には操縦の自由を缺くものも出來ました。瓜生戰隊は午後四時二十分の頃、三橋二烟突を有する敵の特務艦一隻（アナジル？）孤立するを見出し、直ちに近づいてこれを撃沈し、四橋一烟突の特務船（イルチツシュ？）を猛射して撃破しました。此の際我が巡洋艦隊（片岡戰隊）も來つて、出羽・瓜生戰隊と協力し、共に潰乱した敵の巡洋艦隊及び特務船を掩撃しました。此の時丁度（四時四十分頃）北方で我が主力戰隊の爲めに撃壓せられた敵の戰艦四隻南下して來ました。此れは主戰隊の記事中にある通り、午後



四時四十分敵艦は南方下烟雾中に影を隠したとある時と時間も符合しますから、此の時敵の艦隊も二つに分れ、一隊は北方に引き返し、一隊は更に南下してこゝに來たらしいのであります。丁度此の時我が艦隊も東郷艦隊と上村艦隊と二つとなつて、敵艦を搜索して居つた時であります。此の四隻が今接戦中の、敵の巡洋艦隊に力を併せましたから、我が補助艦隊はこれに對戦するの苦境に陥りました。出羽艦隊の旗艦笠置は再び一弾を水準下の石炭庫に受け、機関室は浸水の爲めに腰部迄没するに至り、戦闘速力を出すことが出来なくなりしました。故に旗下の音羽・新高の二艦を一時瓜生司令官の指揮に屬せしめ、旗艦を千歳に變更させ様としましたが、此の際玄海灘の浪は猶高く、海上で之を行ふことが六ヶ敷く、そこで千歳をして笠置を護衛し、長門油谷灣に入り、午後八時漸く暗中にて旗艦を移し、十時翌日の集合地たる蔚陵島に向ひました。笠置は應急修理に時間を要した爲めに、此の追撃戦には加はることが出来ませんでした。

又瓜生戦隊の旗艦浪速艦も、午後五時十分頃、後部の水線に敵弾を蒙つた爲めに、同艦は一時避難して、其の應急修理をせねばならぬこととなりました。思ひがけなくも敵主戦隊が四隻も加勢したので無理もありません。これが日本海々戦中我が艦隊の最も難戦に陥りました時でありました。前に烟雾中に敵の主艦隊を搜索してゐた東郷艦隊は、八海里南下しても敵影を見出しませんでしたから、敵艦は北方に變針して浦塩に向ふか、或は南下逃走する兩路の外はありません。よつて午後五時三十分頃東郷艦隊は北方に引返し、上村艦隊は猶南下して敵艦を求めてをりました。所が前方遙かに砲聲の盛んなるを聞き、全速力で此の方に赴きました。丁度片岡・出羽・瓜生・東郷(正路)等の戦隊が、戦闘酣にして動もすれば敵艦を脱走せしめんとする危ふき場合でありました。敵は何處まで運が惡いか、

我には持つて來いの時に、有力なる上村艦隊の來援で、敵は一たまりもなく、其の南走の念を捨て、混乱して又々北方に向ひました。我が艦隊もこれを追ひ、其の途上にて既に進退の自由を失つて居りました。敵の廢艦スワロフ及工作船カムチャツカを發見し、我が片岡・東郷(正路)戦隊はこれが撃滅に轉じました。午後七時十分カムチャツカを撃沈し、片岡艦隊に随つた富士本水雷艇隊は、スワロフに突進し、一發又一發、最後の一發は火藥庫に命中し、黒黄色の煙を揚げ、流石一万五千噸世界第一の巨船も咄嗟の間に顛覆し、猛烈なる眞紅の大火焰を吐きながら、玄海洋上千尋の海底に沈没し、萬歳の聲我が各艦に起りました。スワロフは其の艦体已に傾くも、憐れ残る一小砲を以て應戦しつゝ沈没しました。第二太平洋艦隊の旗艦キャニージ・スワロフの最後はかゝる壯烈で、時に午後七時二十分でありました。

間もなく我が諸艦隊は、蔚陵嶋集合の電命に接し、後を勇敢なる驅逐艦隊と水雷艇隊とに任せて、砲火を收め北東に向ひました。遙かに後方の戦場を顧みますれば、彼我の探海燈は盛んに映射し、電の如く燦めき、砲聲は殷々として雷の様に轟き、海上一種の凄壯い氣分に満ちてをりました。

## 十二、夜襲戦の奇功

二十七日は屢々記した様に南西の風強く浪高く、小艇の操縦は大に困難でありましたから、我が主戦艦隊の直率した水雷艇隊の如きも、晝戦開始に先きだち、悉く對馬の三浦灣に避泊せしめた位でありました。日は已に西海に没して薄墨色の夜の幕が段々其の色を濃くし、白波駈けりし海の面は、刻一刻と闇に包まれ、彼我の主戦隊已に北方に去りし後は



唯々砲烟が模糊たるの間に、遙かに我が巡洋艦隊と驅逐艦隊が、狂浪怒濤の裡に隠見するのみでありました。破橋毀器は波間に漂ひ、遙かに聞ゆる喚聲は漂ふ溺者の號泣か、激する烈風の鳴咽か、激戦後の悲壯なる光景は激浪と暮色に色ざられて、更に悽愴の極みを現はしました。各驅逐艦と水雷艇隊は、此の千載一遇の好機を失はんことを恐れて、皆風濤を冒して、日没前より來り會し、久しく諸艦健闘の狀を觀て、燃えたつ心をおし静め、髀肉を撫でつゝありましたが、今しも旗艦は

驅逐艦隊は夜襲を決行せよ。

この信號を残して去りました。待ちに待ちたる時は來ました。各隊意氣衝天で、各先きを争ひ、藤本驅逐隊は北方から、矢嶋驅逐隊及び河瀬艇隊は北方から、殘敵の主力艦隊の先頭を壓し、吉嶋驅逐隊は東方から、廣瀬(順太郎)驅逐隊は南東から、其の後尾に迫り、福田(昌輝)・大瀧・近藤(常松)・青山・河田の諸艇隊は南方から、敵の主力及び左後方に併行せる巡洋艦の一群を追尾し、次第に三面包圍の形勢をとりました。敵も殘艦を集め稍陣形を整へ、北東に向つてをりましたが、此の威壓に閉口し、闇を幸に倉皇として南西に避け、更に東方に變針した様でありました。

此の實戦に参加し、四十一號水雷艇を指揮せられた水野廣徳氏の記事によりますれば、薄暗風稍和さしも波猶高く、一万噸以上の大艦でも尙ほ甲板上に水を上ぐる位で、僅か數百噸の水雷艇は、潮は甲板を洗ひ飛沫烟筒に入り、艇の前後五六間は常に水中に浸入し忽ち數十丈の天上に刎上げられたと思ふと、忽ち十數丈の奈落に落ち、推進器が時々カラカラと空中に空轉して、思ふ様に舵もとれない。艇員は身を艦橋其の他適當の者に縛り、墜落を防がねばならぬほどでありました。日は何時しか暮れて四面暗に包まれ、月はまだ出

でず、星斗は中天に闌干とし、四方を顧みれば暝濛として唯々前進諸艇の速力燈のみ浪間に見えたり隠れたりして居ります。各艇とも諸員已に戦闘配置に就き、搜敵項刻にして、前方數海里に當り、慧星の様な一道の青白き光が、水平線上に擲げ出されると見ますと、直ぐに二つとなり三つとなり、四五六七となり、左に移り右に轉じ、頻りに海面を物色する様であります。

我が諸艇員の意氣は驟かに昂りました。司令艇隊よりは「襲撃準備」の令が下りました。速力は倍加せられ、之れに逆らつて打つ浪は愈々激しく、眼を打ち息を塞ぎ、面を向けん術もありません。青白き探海燈の間に、血の如き真紅の光が燦然と閃めくと見るや、忽ち生じ忽ち滅し艦列を通じて數十個、一直線に輝くは發砲の火花であります。探海燈の光錐底裡に眞黒な影が、右に左に疾走するは敵艇か將た我が水雷艇か、其の光景眞に壯絶とも又凄絶とも云ひ様がなかつたと記してありますが、寔に實況が見ゆる様であります。

敵は多く白色烟突を用いた故に、此れを唯一の目標として、午後八時十五分矢嶋驅逐艦が第一襲撃を、敵の主力隊の先頭に加へたを手始めとし、各艦各艇一時に突進して敵艦隊の周圍に蟻集し、午後十一時頃迄引き替へ取つ替へ、連續激烈に肉薄しました。一隊が襲ふて引き上げれば、他隊が待ちかねてこれに代り、一艇が撃つて過ぐれば、一艇が直ちに進み出で、素養あり訓練あり、暗夜に活躍しても毫も謬ることなく、殊に沈着大膽に數十間の距離迄近接して發射しました。某艦の如きは猛烈に接戦して遂には敵艦に衝突し、爲めに艇身弓の如く曲つたといふ位でありました。後日捕虜の言に水雷攻撃の劇烈であつたことは、とても言語で形容の出來るものではなかつたと云ひました。且つ我が艇隊が引き切りなしに肉薄し來つて、其の應接に暇もなく、又距離が餘りに近く迄迫る爲めに、備



砲の俯角度以内に來り、照準も何も出來なると云ふてをります。敵も亦力を極めて防戦しましたが、遂に此の攻撃に耐へず、其の僚艦相失し四分五裂の情態となり、各血路を求めて己が勝手に運動しましたから、我が襲撃の追躡と共に、爰に一場の大混戦を現はしました。少くも敵の戦艦ソイペリキ、装甲巡洋艦ナヒモフ及モノマフの三隻は、我が水雷に罹つて全く其の航海力を失つた様子でありましたが、我が軍も亦敵弾の爲めに三艇を失ふに至りました。福田艇隊は第六十九號司令艇として先頭に進み、同隊第六十八號艇（艇長大尉寺岡平吉）は敵の最左翼なる戦艦を襲撃しました。速射弾・ホツチキス砲・ノルデン砲等の彈丸急霰驟雨の如く飛來する下に猛進し、發射は出來たが、第六十九號艇は遂に撃沈せられ、乗員一齊に陛下の萬歳を唱へ悉く海中に陥りました。かくと見た雁は百方手を盡し、その大部分を収容しましたが、福田司令が見へない、頻りに其名を呼びましたら、微かに之に應せられた様でありますから、栗田雁艇長は、

誰か救助に行くものはないか。

聲未だ終らざるに、一等水兵下町仁太郎「私が参ります」と、直ちに衣を脱し小索を掴み逆巻く濤に跳り入り、聲する方に拔手を切りましたが、索足らずして達せない、遂に索を捨て、進み、半死の司令を抱き、共に激浪怒濤と闘つて居りました。時に敵の砲撃は益々急に、砲丸雨の如く瀆ぐ光景は凄壯の極みでありました。折しも雁艇上では、小索の俄かに弛みしを以て異變あるを察し、更に二人の勇士端艇を下ろし、決死的に或は漕ぎ或は排水し、漸く之を助け得ました。又第六十八號艇は舷側より前機關部を破られ、水兵四名を斃され、三名は重傷を負ひました。今は止むなく退却せんとしましたが、海水は益々甚しく浸入するし、蒸氣力は盡きし、敵の砲撃は中々緩まず、進退谷まり危険に迫つてをり

ましたが、幸に他の艇隊突撃し來りし爲めに、敵艦が探海燈の光芒を其の方面に轉じた間に、漸く危地を脱れました。第三十四號艇は司令艇として青山少佐これを指揮せられ、敵の爲めに撃沈の不幸に逢ひ、少佐も亦負傷せられました。河田艇隊の第三十五號艇は、先頭艇を見失ひ單獨猛進し、午後九時三十分艇首二發の水雷を發射しました。此の時は探海燈の旋轉裡に後甲板に立つてをる敵影が見分けられる位でしたから、八十間―百間に近づいてをつたことを知り、其の戦艦に多大の損害を與へたものと確信しました。次に後部水雷を發射せんとする瞬間、敵彈爆發し、一名負傷し、一名顛倒しましたが、直ちに起立發射を終りました。未だ二分ならず十五珊の巨彈汽鐘に命中して、蒸氣噴出し進航が出来なくなりしました。敵は此の騰る蒸氣を好目標とし、盛んに射照し大小の砲彈雨の如く集注しました。橋は折れ烟突は倒れ、士官室粉碎せられ、艦内各部蜂の窩の様になつて、即死二名負傷十名を出しました。防水に手を盡しましたが、翌日午前三時負傷者と重要書類を僚艇に移した後、終に沈没しました。此等三隻の乗組員は悉く友艇に救助収容せられ、したのは不幸中の幸福でありました。千人近く乗組んでをる大艦とはちがひ、僅かに二三十人の乗組員から、此の數の死傷者を出したのでありますから水雷艇の働きは大したものであります。

驅逐艦春雨・曉・雷・夕霧並びに水雷艇鷲・第六十八號・第三十三號艇等は、敵彈や又は衝觸の爲めに損害を被つて一時戦闘に参加せられず、死傷も比較的多くありました。その外鈴木（貫太郎）驅逐隊は、二十八日午前二時頃、對馬韓崎の北東約二十七海里の地点で、敵艦二隻の北走に出會して、直ぐにこれを襲ひ、一隻を撃沈しました。これは戦艦ナワリンで、兩舷に二發の水雷が命中し、見る間に沈没しましたと、後日捕虜が話しました。自餘の



諸艇隊は終夜各方面に敵を索つましたが、何も獲る所がありませんでした。敵の某參謀の記によれば、

八時には日が全く没して暗夜となつた。ニコライは先に受けた命令を確く守りて、再び艦首を東北二十三度に取つた。日本水雷艇は何れも必死の勢を以て肉迫して來た。我が諸艦より浴びせかける凶悪なる砲火に頓着せず、悠然自若として三ケイブルから五ケブルの間に迫つた。我より雨霰の様に注ぎ掛けた砲弾は威力がないではない。敵の一艇が我が艦隊に最も近接し、數十尺前迄襲來したとき、我が發射したる一砲弾はその汽鐘に命中し、探海燈を以て望見したら、盛んに蒸氣を噴出して進航を止めてをつた。同艇の甲板上には一士官の直立し居るを認めた。これは多分艇長であつたであらう。將に沈没せんとする甲板上に、自若として最後の運命を待つてをつた。此の時我が大口徑砲弾が命中して、艇は中央より切斷せられ、艀部を上にして煌々たる探海燈の映射する明るき波間に消え失せた。(此れは第六十九號艇?)

次で九時三十分頃、我が艦隊を探海燈にて檢したら、ニコライを先頭ととして、アリヨールこれに次ぎ、四ケイブルを隔て、アブラクシン、次にセニヤウイン、更に五ケイブル後にウシヤコフ・ナヒモフ・シソイ・ナワリン等相續ぎ、ニコライの眞横にはイツムルドが並航して居つた。我が諸艦は敵の水雷を逃避せんとして、或は俄然其の舵を轉じ他艦の舷測に向ふて來るあり、或は列外に逸出するあり、かゝる時探海燈は好目標となるから、大抵これを滅し、暗夜操縦に非常に困難した。十時に至つて日本水雷艇の來襲は大に減じ、十一時には全く止んだ。日本海上暴風過ぎ迅雷治まり、三更下弦の位月昇つて、却つて物凄しい光景を添へた。月に透かして遙かに後方を望めば倭艦は多く後れて

唯三隻を見る許りであつた。けれど皆始めて一樓の望みが其の顔色に讀まれた。なせと云へば、吾々も最早や殆んど彈丸を撃ち盡くした。日本艦隊も昨日の戦にこれを撃ち盡したであらう。何れかの軍港にその補給を受けに行かねばなるまい。吾々は其の間に浦十瀬に入ることが出来るであらう。

と。我が水雷艇の爲めに助けられたセドフといふナワリン乗組の水兵が委く話したとて、セメノフ中佐は次の様に記してをる。

二十七日晝戦後ニコライ一世は、これから取らうとする航路の方向を示して「我に従へ」この信號をした。我が殘存諸艦は何れも速力を加へた。ナワリンもこれに續航せんと試みたが、其の艦尾は海中に没下し、貫通孔よりの浸水は益々甚しく、夜九時までは兎に角に續航したが、とうとう浸水が十二時砲塔に及んで、全く運轉を止めた。敵の水雷は四方より蝟集して二十隻以上にも達した。十一時頃艦尾に受けた一發は落雷の様な響を發し、又他の一艇より發せしものは右側艦腹の中央で爆發した。到底救助の道なきを認め、將校等は互に相擁して訣別を告げた。

### 十三、追撃戦の獲物

二十八日仄々明けには、前日來の濃氣は拭ふ如く霽れ渡り、海面は油を流した如く又鏡に似て、何れを望んでも曠濶たるものでありました。東郷艦隊・上村艦隊は早や蔚陵嶋の南方約二十海里に達し、其餘の戦隊及び前夜襲撃した各驅逐隊等は、各々航路を異にして、段々に後方から集合の途に上つてをりました。午前五時二十分曉の色は淺緑に明け渡つて、身も心も清々しく皆勇みたち、敵の退路を遮斷せんとして、東西に搜索の列陣を張



らうとしました時、後方六十海里にあつて北進して居りました我が巡洋艦隊は、早くも敵影を發見して、片岡中將旗艦嚴嶋より東方に當り煤烟數條上ると警報して來ました。間もなく同艦隊は敵に近づき、

敵艦隊は戰艦四隻、巡洋艦二隻よりなり、航路を北東に向けて居る様である。

これ、問はでも知れた殘敵の主力であります。東郷艦隊・上村艦隊は針路を反轉して漸次東方に向ひ敵の前路を扼し、瓜生・東郷(正路)戦隊は巡洋艦隊と合して敵の後方退路を抑へ、午前十時三十分頃、竹嶋附近にて全く敵を包圍しました。此の敵艦隊はネボカトフ少將の旗艦ニコライ一世及びアリヨール・アブラキシ・セニャーウイン並びに巡洋艦イヅムルドの五隻で、先きに四隻と見た戰艦中の二隻は海防艦でありました。又他の一隻の巡洋艦は當時遙かに南方に後れて遂に其の影を見失ひました。三笠の艦橋に立つてむれ眺ば、天晴れ波靜かに煤烟は高く昇り、眼を遮るものもなく、我が艦隊二十七隻がこれを環狀に取り巻く様が見下に見渡され、各隊敵艦を中心としてこれに近寄り、その環圍の縮小すること、恰も山の端を離れし満月が中天に冲るに従ひ縮小するが如く、眞に一幅の好バノラマでありました。手頃の距離に近づいた時、先づ我より砲撃を加へましたが、彈丸が盡きたのか、我が更に近づくのを待つのか、敵艦は一向これに應砲する様子が見へません。只旗艦ニコライとイヅムルトが信號を交換する様子でありましたが、イヅムルトは忽ち二十四ノットの快速力で南方に向ひました。東郷(正路)戦隊がこれを遮りましたから、更に東方に逸走しました。爾餘敵艦は依然沈黙して應砲しません。東郷大將は例の如く幕僚と共に前艦橋に在せられましたが、ニコライは俄かに其の軍艦旗を半降し、萬國信號

X G E

を掲揚しました。秋山參謀早くもこれを認め、大將に「發砲を止むべきや」と問はれましたが、大將は猶これを慥めんとして未だ許されませんでした。參謀地踏踏みつゝ、

長官！ 武士の情ではありませんか？

と、叫びも敢へず潜然と落涙せられました。

之れを萬國信號帖に引き合しますれば「投降する商議をなすを望む」。そこで我が旗艦三笠は直ちに砲撃中止を命じられました。時は午前十時三十分でありました。我が諸艦隊は四隻の降伏艦を引き包んで、四百米突に近づき、皆砲門を四艦に向けて若し違變すれば一令の下に撃沈する手筈をせられました。三笠とニコライとは信號の交換を終りました。此の際敵艦に於ける悲惨混乱の状態は、某參謀將校の記事に有りのまゝ出てをります。

四時には東天白み朝暎は靜なる波の上に先づ其の初光を放つた。五時に至り夜は明け渡り、朝風冷しく旅の衣を吹いた。今この清らかなる海上を眺むれば、昨夜半迄も相續いたナヒモフ・ナワリンは何處にあるかその影さえ見えぬ。シソイ・ウシヤコーフも亦續かず。ニコライ・アリヨールに伴ふものとは只二海防艦と一巡洋艦のみとなつた。昨日曉天長旒を海風に靡かせ、陣形堂々として對馬海峡に突進した三十七隻の大艦隊は、榮枯盛衰眞に夢よりも淡く、僚艦は次第に散り失せて、孤城日落ち轉た物悲しさの感に堪へぬ。前夜は徹宵水雷攻撃を避けんとして屢々轉針したから、今果して何れの地点に漂ふかを知らなんだ。一艦陸地を認めて報じた、それは辯陵嶋であることが分つて、各員航路の北方に向つて居つたことを喜んだ。間もなく南方の水平線上に煤烟の揚がるのを見た。これ後れた艦僚ならんと、艦員我れ勝ちに双眼鏡を手にし、一樓の望みを囁し哨艦の信號を待つた。其の信號は何ぞ計らん「日本艦隊なり」と。噫、嗟、止んぬる



かなである。午前十時に至り、日本主戦隊先づ左舷より来り前方を押へ、次に巡洋艦隊は左側に、第四第六戦隊後尾より、四面楚歌とは此の事で、我が運命も最早や定まつた。我が艦諸員の顔には、誰にも決死の状があり、と現はれてをつたが。昨日の激戦にて我等が御熟知の敵艦が何等の損害も受けず、全艦隊擧つて現出するを望んでは、皆々心中憂悶怨懣の感で一杯であつた。幾多の戦艦と万餘の人命を犠牲とした、努力奮勵も、九ヶ月以來長航の苦艱辛勞も、全く水の泡と消え去つた。今我等の目前にきのふの劇戦も知らず顔なる敵艦が、一隻も欠けず烟突も艦橋も立派に、舳艫相含みて再擧し来るを見ては、最も剛膽なる者でも、周囲の光景に失望して、冷静は保つたが、皆絶望的の冷静であつた。ネボカトフ少將は將校を會して、慨然として、

我が砲は摧かれ、我が彈丸は盡きた、最早や戦ふ術もない。降伏して無辜の生靈を救ふ外に道はない、諸兄の意見は果して如何。

これを聞き、或人涙を押へて降伏を唱へ、或人は切齒して戦を説いた。議論まち／＼で中々決しさうもない。日本艦隊の砲撃は倍々急になつて來た。少將は悄然として滿艦の兵士を、彈丸雨の如く飛ぶ甲板上に集め、聲を勵まして

此の期に及んで議論は無益である。只一言、戦闘か、降伏か、其の一つを擇めよ。と、兵士一齊に「降伏」と答へた。少將今は早や是迄なりと、將卒を顧みて「降伏」と宣言し、遂に日本艦隊に對してX G Eの信號を掲げさせた。時は丁度正午であつた。少將は各艦長を旗艦に召集し、

事ここに至る、此の上の抵抗は無益である。徒らに多數の人命を損するよりは、降伏して余一人其の責を負ふであらう。一たび降伏した上は、武器其の他を現状のま

ま日本艦隊は引き渡さねばならぬ。各員心得違ひのない様にした。一語は一語より切に聲涙共に下つた。數百の將士首を垂れて之を聴き、感慨極まりて秋歎するものあるに至つた。

我より軍使として選まれしは、秋山參謀及び山本大尉でありました。水兵若干を従へ端艇を浮かべ、ニコライに到り、導かれて其の將官室に入り、ネボカトフ司令官及び幕僚に面會し、東郷大將の意を傳へ且つ三笠に來艦することを切望せられました。ネボカトフは服装を改め幕僚を伴ひ、我が水雷艇に乘じ三笠に來りました。是に於て東郷大將は改めて正式に敵の降伏をうけ、彼我互に杯を擧げ、戦闘の終了を祝されました。時にネボカトフ少將は東郷大將に向ひまして、

貴官は如何にして吾々が對馬東方を航進すべきやを推知せられしや、殆んど人間業とは覺えられない。

大將は「唯かく信じたのみ」と答へられて、例の如く多くを云はれませんでした。大將のかく信じられたには、深く研究せられ軍議を盡くされ、根底もあり理由もあります。一度かくと決せられた上は、金剛不壞の信念を以て、心泉一の微波だも起されざる事が、東郷大將の大將たる所以であります。東郷大將は其の境遇に同情せられ、之を遇するに士禮を以てし、將校以上には帶劔を許して降を容れられました。笠置艦に置かるゝことゝなりこれに入るや、艦長山屋大佐迎へて握手せられ、慇懃に慰められました。ネボカトフは幹艇長大、顔色白く、頬豊かに鬚髯蓬々として、海軍少將の略服を着け、舉動も頗る沈着に見えました。敷嶋副艦長は山田中佐を捕獲委員長とし、水兵二百を率ゐニコライに向つて端艇を發せしめられました。我が各艦の將士は皆欄に凭り、眸を見張つて熱心にこ



れを眺めて居りました。山田中佐はニコライに到つて、

余は日本軍艦より來つた、士官は皆中甲板に、兵員は前甲板に整列せよ

と、各員皆靜肅に命令の通りにしました。中佐は命じて砲台・彈藥庫・水雷室・機關室等の重要なる部分及び書類を引渡さしめ。我が下士卒は銃を槍し丸を箆め、指揮官をぐるりと取り巻き、信號兵は旗繩の一端に日本帝國軍艦旗を結び付け緩々他の端を引く、旭旗昇ること一尋なれば、斜十字旗下ること一尋、斯の如く露旗全く下り終りし時は、旭日旗は高く橋頭に飄りました。此の瞬間艦は已に露國の籍を脱して我が國の艦となつたのであります。我が水兵は樂聲朗かに「君が代」を吹奏し、我が各艦の將士は手掌の痛くなるほど拍いて萬歳を絶叫しました。其の聲は清韓を壓して世界に響いたであります。此の有様を目撃して露國の將卒は、何れも悄然と頭を擧ぐるものなく、皆潜かに暗涙に咽せんで居りました。人、男兒と生れて、一たびかゝる痛快事に遭遇する、死することも惜くないではありませんか

イヅムルドは降伏に先立ち、其の速力を利用して逃走しました。磐田艦長川島大佐直ちにこれを追撃せんとせられましたが、同艦にある嶋村司令官は、

他艦は皆降つて、彼のみ走つたのは、敗報を本國に齎すのでせう、見逃してはごうですか

と。艦長は笑つてそれに従はれました。イヅムルドは後ちにセント・ウラジミル灣で岸に擱り自ら爆沈しました。瓜生戰隊は北航の途、午前七時頃西方に一隻の敵艦を見出し、高音羽艦長指揮の下に、音羽・新高をして段々之に近接せしめられたら、これは敵艦ヌエートラナが一驅逐艦を伴へるものであります。接戰約一時間の後、午前十時六分竹邊灣

沖にて全く撃沈しました。我が艦隊の大部は、降伏四艦の捕獲處分に従事しつゝありましたが、午後三時頃南方よりウシヤコーフの來るを發見し、警手・八雲は直ぐに之に向ひました。午後五時過ぎ其の南走するのを追及して、

貴艦隊四隻は既に降つた、貴艦も降られては如何。

と信號しましたが、彼はこれに應せず、反つて彼より砲火を開きましたから、止むを得ず砲撃して午後五時半過ぎ終に撃ち沈めました。艦長ミルク大佐は我が水兵が助けんとするも之をさげ、艦と運命を共にして勇しき最後を遂げ、他の生存者三百名は救助收容されました。

更に一大快報があります。我が驅逐艦連及び陽炎は午後三時三十分の頃、鰐陵嶋の南西約四十海里の處で、東方より遁れ來る敵の驅逐艦二隻を發見し、殘敵どうして逸すものかと、速力を極めて北西に追躡しました。午後四時四十五分追ひ付きて砲火を發きました。敵の後繼驅逐艦は白旗を掲げて降意を表はしました。連は直ぐにこれを捕獲しました。これはビエードウイで、思ひがけもなく、先に負傷した敵艦隊司令長官・中將及び參謀長二名、幕僚八名が移乗して居りました。(セメノフ中佐も此の中にありました)其の乗員八十名と共にこれを捕獲せんとしましたが、彼等が提督に對する尊敬の態度は、一見して惻々敷ほど至誠を極め、見る眼も氣の毒なほどで、殊に意外の重傷でありましたから、彼等の哀求を容れて提督以下を其のまゝとし、繩を付けて引き行かんとしましたが、其の繩が屢々絶れ、暗黒の海中ではあるし、大切な捕虜ではあるし、連の苦心は一方ではありませんでした。天の明ける頃明石に出逢ひ、これの助けを得て漸く佐世保に護送しました。連は相羽恒三少佐が艦長であります。



聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を収むるに忙しかつた際、南方なる前日の戦場にも亦相應の残物を得ました。戦場掃清の任務を帯びて出發した特務艦信濃丸・臺南丸及び八幡丸は、韓崎の北東約三十海里の地点で敵艦シソウエーリキが前夜の水雷攻撃の爲めに傷いて、將に沈まんとするに出合せ、これが捕獲の手續きをすまし、乗組員は救助收容しましたが、同日午前十一時五分終に沈没しました。又驅逐艦不知火・特務船佐渡丸も、午前五時三十分敵艦ドンヌコイが沈没せんとするに會しました。同艦長レペーデフ大佐は先づ残存員七十餘名を鬱陵島の東南岸に上陸せしめ、自分は航海長と共に秘密書類を處理し終つた後、物靜かに衣服を改め、從容として艦と運命を共にせんことを期してをりました。時に我が水兵端艇を浮べ來り、ドンヌコイを捕獲せんとしましたが、到底救ふことの出来ないことを見てとり、艦長を誘致し、無理にこれを引いて端艇の傍に來ました。此の時艦は次第に傾き、危期は目前に迫つてをりました。艦長はこれを見て愁然として左右を顧み、航海長を尋ねましたが見當りませんでした。面上忽ち悲痛の色を浮べ猛然起ちて再び艦内に入りました。艦首先づ水に没すると見るや、艦尾は高く天に衝立ち忽焉として没し大なる浪が天から落ち來り、後には只鳴戸の如き大きな艦渦の旋轉するを見る許りでありました。その渦中に航海長と相抱いて漂ふ艦長を見出し、我が漁船がこれを救ひました。勇悍を以て自ら許す我が兵士も、此の状を目の前に觀ては、皆其の義氣壯烈に泣き、呼ぶに露國の廣瀬中佐を以てしました。次でモノマフが著しく傾斜して其の附近に來るを發見し、佐渡丸が捕獲處分に行きましたが大破して浸水も甚しく、艦長及び副艦長其他の漂流するものを救助し、午前十時頃前艦と相前後して沈没しました。佐渡丸艦長釜屋大佐は喇叭手をして「命を捐て、」の譜を吹奏せしめ、各兵員は上甲板に整列せしめ、肅然

として沈み行く船を吊はせられました。佐渡丸は去年常陸丸と共に、丁度此の所で浦捕露艦の暴行に逢ひ、辛うじて逃走したことは、國民の念頭から消え難い所であります。此の船と此の海は因縁淺からず、感慨殊に深い譯であります。其の他砲艦特務船等にて、戦後戦場附近の海岸等を搜索し、救助收容したる撃沈敵艦の乗員も尠なくありません。戦利艦五隻の捕虜と合して、其の數殆んど六千に達し、戦死者は一万を下らなうたであります。始め日本海を通過せんとしました敵艦隊は、約三十八隻で、我が撃滅又捕獲を洩れたのは巡洋艦・驅逐艦及び特務船各數隻に過ぎません。しかも此の二日間の戦闘で我が艦隊の失ひました所は、只水雷艇三隻のみであります。其の外多少の損傷を蒙つたものでも、一つとして今後の役に差支へるものはありません。あれほど世界で今古未曾有の大戦で、我が死傷は全軍を通じて、將校以下僅に戦死百十六名、負傷者五百三十八名でありましたとは、誰が聞くも信じられない位で、眞に奇蹟であります。天祐であります。

#### 十四、凱旋

降伏艦四隻は旭の御旗の下に、回航委員によつて、二十八日暮れ方佐世保に向ひました。アリヨールのみは浸水甚だしく、その上に降服水兵の反抗等があつて、同夜を非常なる困難危険の中に明かし、翌朝に至り、朝日・薄雲の助けを得て舞鶴に回航しました。回航委員長は朝日の副艦長東郷中佐で、時にアリヨール艦長ニユーク大佐は、重傷を負ふて床上に横たはつてをりました。大佐と東郷中佐とは、前年中佐が露國留學中、同窓の親友でありましたから、負傷のことを聞かれ、百事はおきて、先づ病床を訪はれ、進んで大佐の手を取られました。大佐は思ひがけなくも此の國家の非運一身の重難に際し、舊友の慰藉に會ひ



覺えず寢床に起ち直り、共に一言もなく感慨無量で、只潜々と泣かれました。アリヨールは開戦以來最も勇戦し、重傷の水兵も多く、中には傷部の苦痛に耐へず煩悶悲鳴し「早く我を殺して此の苦痛より救へよ」と叫び、他の露兵等は無慘にも我が監視の隙を見て、まだ息の通つてをる重傷者十餘名を海中に投棄しました。兵は凶器と云ふ通り、戦争は人事の絶對的のものであります。故に勝者にも人心を感傷せしむることが多いが勝者も悲は悲で、壯であります。敗者と来てはことに悲絶慘絶の極みではありませんか。ニューク大佐は重傷の上に、水兵の反抗やこんな變事の爲めに深く心を痛め、東郷中佐に幾度となく自艦員の狂暴を謝びて、副長シウエデー中佐をして兵員を戒しめさせた後、午前七時遂に日本海の泡と消えました。東郷中佐は枕頭に立たれ涙を揮ひ、自ら筆を執つて「名譽の戦死者ニューク大佐」と記して、經が崎沖で儀仗兵を付して水葬式を行ひ、半旗を掲げ、淺間及び本艦の艦員を甲板上に整列せしめて、懇ろにこれを吊はれ、敵兵も大いにこれに感動しました。

ニコライも其の損害は中々甚しくありました。思ひ出せば此の艦こそ、日清の役後、三國干渉の起つたとき、批准交換に赴かれた伊藤全權委員長の乗船に、無禮至極にも砲門を向けて威嚇したことがあります。其の時は威勢東洋を壓しましたが、今は捕獲となつて兩舷に無数の彈痕を現はし、淋しげに日章旗の下に牽かれ行く様は、船に若し心があれば亦今昔の感に堪へぬであります。一たび根據地に集まつた我が各艦隊の將士は、舳艫相含み意氣揚々として凱旋しました。昨日は戰場として百雷の一時に落つるが如き玄海洋も、今日は波は平かに水は静かに、空には鳥翔り下には魚躍り、我が大君の千代八千代を祝ふ様に見えました。五月三十一日午前八時凱旋諸艦は佐世保軍港に這入りました。万民此の報

を聞いて埠頭に群集し、或は端艇を飛ばし、或は帽を揚げ、或は手巾を揮ひ、熱狂歡呼してこれを迎へた様は、云ふまでもないことであります。凱旋の眞先きは上村艦隊旗艦出雲で橋頭の中將旗今日殊更に鮮かに見えました。

先日の兵曹長が梯子を降りんとして例の横綱に出會ひ、

兵曹長 おい横綱、未だ首が胴に付て、むさいものゝ出口が開かぬぢやないか。

水兵 兵曹長殿、今日こそ白い御飯を腹ぞんぶんに食べさせて下さい。

次は常盤で、第三第四は今まで見慣れざる異型で、二本立ちの白色煙突が殊に目立ちました。諸君が己に想像せられたでありませう、此れが此の海戦の國民への大なる土産物であります。港内狭しと段々這入つて来て、磐手が一番お終ひでありました。佐世保鎮守府司令長官鮫嶋中將は小艇を飛ばし、其の幕僚と共に出迎はれ、出雲の甲板上で、此の温厚な老將軍と、精悍な上村中將と握手せられましたときは、歡び極まつて泣かれました。上村中將は、

猶一つ、素敵な御土産物がありますぞ

と云はれました。次で三笠が入港しましたから、更にこれを迎へんと其の方に向はれました。三笠艦の各員も非番のものは皆甲板に集まり、久々に本國の港の景色にあこがれ、去年二月死を覺悟して出港したときの感想に比べて、今日凱旋の喜びに狂氣の如く、帽を揮つて歡迎者に應じ、頻りに萬歳を叫んでをりました。偶然にも先日の二兵士が出逢ふて甲兵士 おい貴様は龍宮行きはどうした、汚い風体ではないか。

乙兵士 龍宮行きは露助の兵士にお株をさられたわい。一昨日の戦で、折角めかしたのも此の通りになつた。死ぬ積りであつたから着替もなにも残してない。又貴様は今日は



えらい綺麗だなあ。

甲兵士 當然まへだ、今朝も艦長から、故郷に錦だ、艦内も充分に清掃して、銘々に服装にも注意せよと、訓令があつたではないか。

乙兵士 なんば艦長の命でも、無い袖は振れぬわい。

各兵士 静かにせよ、鮫島中將が見えた、  
といふ内に、甲板に上つて來られました。甲板上には多少の損害はありましたが、能く掃き清められ、秩序も整然として或は盆栽を列らね、或は生花を置き、各員常務に就き、昨日までも戦場にありました面影は少しもありません。名將の心掛けは懐かしくも亦氣高いではありませんか。司令長官室に入りて東郷大將と相對せられたときは、感慨限りなく、兩將相見ても語も出さず互に只兩手を固く握られ、ハラ／＼と落涙せられた許りであります。暫くして東郷大將、

國家の爲め此の上もない御目出度いことで、御互に安堵しました。

これは我々が女々しい涙とちがい、眞に國家の爲めに落されし愛國の涙で、共に 陛下の御稜威と國家の隆運と、天祐の厚きことを感謝せられ、且つ部下の忠勇なるに泣かれた尊い露の珠であります。

「朝みどり晴れわたたりたる大空のひろきをおのが心ともがな」と御詠ひあそばされました通り、皇徳無量照さぬ限もなく、其の捕虜六千は各所に分ちて休養せしめられ、負傷者は病院に收容して薬治を給ひ、將校以上には此の戦争中には再び戦場に出でざることを宣誓せしめた上、帯劍歸國するを許されました。且つ其の提督をして戦況を本國に電奏することも許されました。之れに對して露帝は佛國公使を経て、

ロジエスト・ウエンスキー提督よ、朕は卿及び艦隊の全員が露國及び朕が爲めに戦闘に臨み、身を抛ち誠實に其の任務を盡したるを深く喜ぶ、上帝は卿に名譽の戦勝を冠するに至らざりしも、卿等不朽の武勇は向後祖國の常に誇りとする所である。朕は卿が速かに全快せんことを望む。神は卿等を慰籍せらるべし。

其の後ネボカトフ少將及びロ提督より電奏する所がありました。再び勅答はなかつたといふことであります。ロ提督は我が佐世保海軍病院に入りました。傷部の経過は頗る佳良で、談話も苦痛なく起居も親ら出來る位になりました。中將は體質中等で齡は六十を超ゆる位で、氣質も快活敏捷で、能く數ヶ國の語を操られました。我が待遇の厚きを喜んで感謝し、少しも露國人によく見る沈鬱や倨傲の様子はなく、安んじて我が治療を受けられました。掛り員も亦一心に不快を生せしめざるを意とし、懇切を旨としました。食事の如きも院長親ら庖厨に臨み、コックを督し、ひたすら珍客の口腹に適せしめんことを努められました。又提督の姪に當られる某嬢が、特志看護婦として滿洲の露軍の陣中にあるを呼びよせ、専ら其の看護に任せしめ、且つ慰籍せしめられました。

曩者乃本大將と籠城將軍と會見の美談がありました。今は又六月三日我が東郷大將は山本大將を通譯として、ロ中將を其の病床に訪はれました。ロ中將は血氣の失せたる面上に、驚喜の色を浮べ、僅かに身を起して慰問にこれを迎へました。大將は其の側に進み握手せられ、

勝敗は兵家の常で、要は其の本分を盡せるや否やにあるのみ、貴艦隊勇戦の状は感嘆措く能はざる所で、殊に貴官が重傷せらるるまで、敢然大任を盡されしは、小官が衷心より敬意を表すると共に、最も痛惜に堪へぬ所である。客居御不自由多からんも、自



愛自重せられ快癒の上、一日も早く本國に御歸還の日を待つ。

と、辞を盡して慰安せられました。ロ中將はその同情厚きと待遇の親切とを感謝せられ、握られたる手を打ち振りつゝ感涙に咽びながら、

小官は貴艦隊の精銳にして有力なりしは敬服する所で、負傷の如きは私の最も名譽とする所で、かゝる有力な艦隊を統率せられた名譽ある閣下が、御鄭重なる訪問を下さつたのは、私の無上の光榮で、貴官の温情は小官をして負傷の苦痛も忘れしめた。茲に謹んで閣下の御健康を禱る。

と、會談暫時にして餘事に亘らず辞し去られました。こゝに東郷大將の御性格の一端を窺ふによい話が元帥詳傳に出て居りました。曾て旅順封鎖中マカロフ提督が無惨の戦死を遂げました時、我が三笠の將校中無線電信にて吊詞を送らうといふ相談が持ち上つて、これを大將に進言しました。大將は只一言「止めよ」と同意せられませんでした。此度は自ら進まれてロ中將を慰問せられました。詳傳の著者小笠原大將が或る時これを元帥に質されましたら、元帥は莞爾として、先には「その氣が起らなかつたからちやが、後には慰問してやりたくなつたからよ」とのみ答へられました。此れは誠によく元帥の性格心行一致の本領を赤裸々に現はしてをるではありませんか。遽々然として俠氣を銜ひ、心にもなき吊意を表するが如きは、眞骨頭を備へたる男兒のなすべき所ではありませんまい。元帥の面目躍如見るが如く、眞に佳話であります。

其の他殘艦の所在は、目的地たる浦塩に遁入したるは、巡洋艦アルマーツとブラブスイ、とクロズヌイとの三隻のみで、オレーグ・オーロラ・セムチユークの三巡洋艦はエンクウイスト少將之を率ゐて、五月三日マニラに遁入し、驅逐艦ポートルレイと特務艦船數隻は上

海に逃れ、共に武装を解きました。大東郷提督は此の偉大なる戦闘状況を公報するに、冒頭先づ天祐と神助により云々と筆を起され、

此の對戦に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず、敵の將卒も亦其の祖國の爲めに極力奮闘したるを認む。然れども我が聯合艦隊が克く勝を制し、前記の如き奇蹟を收め得たものは一に、天皇陛下の御稜威の致す處にして、固より人爲の能くすべきに非らず。殊に我が軍の損失死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信仰するの外なく、嚮きに敵に對して勇進敢戦したる麾下將卒も、皆此の成果を見るに及んで、唯感激の極、言ふ所を知らざるもの、如し。

と結ばれました。我が大元帥陛下には帝國聯合艦隊の偉勳に對して、五月三十日左の如く、前古未だ嘗て拜したることなき感激すべき優詔を、司令長官海軍大將東郷平八郎に下し給はりました。

聯合艦隊は敵艦隊を朝鮮海峡に邀撃し、奮戦數日遂に之を殲滅して空前の偉効を奏したり、朕は汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對すること得るを憐ぶ、惟ふに前途は尙遠遠なり、汝等愈々奮勵して以て戦果を全うせよ。

空前の偉勳と宣ひし上に、汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に云々と勅し給ふ。東郷大將以下聯合艦隊の將卒の殊勳は、萬世長へに赫灼たものであります。東郷大將はこれに對し恭しく奉答して、

日本海の戦捷に對し優渥なる勅語を賜はり、臣等感激の至りに堪へず、此の海戦豫期以上の成果を見るに至りたるは、一に、陛下御稜威の普及及び歴代神靈の加護に



依るものにして、固より人爲の能くすべき所にあらず、臣等唯益々奮勵して犬馬の勞を盡し、以て皇謨を翼成せんことを期す。

又同日帝國海軍に對し左の勅語を下し給はりました。

我が海軍は籌畫攻戰共に宜しきを得て、中外相待つて敵の艦隊を殲滅し、以て朕が望みに副へり。朕は深く其の偉勳を嘉尚す、汝等益々努力大成を期せよ。

曩には公報の遲きを怨み、海軍省の無情を訴へた國民も、公報の出づることに、或は敵艦の降伏を報じ、或は敵提督の捕獲を告げ、其の勝利の意外に大にして、我の損害は愈々僅少なることを明かにしまして。是れ全く公報にもある通り神助といふ外はないと、覺えず感泣して昊天を拜謝し。各々努めて沈着の態度を取らんとしましたが、思へば思ふほど、聞けば聞くほど、日一日に歡喜の情切となり、都會となく田舎となく、三戸の邑五口の村、北は千嶋の果より、南臺灣の隅まで、旭旗と球燈の國となり、殊に帝都の下の有様は、學校は休み商社は閉ち、行列あり宴會あり、晝は彩旗、夜はイルミネーション、全市恰も滿艦飾をなした様でありました。

畏れ多くも大元帥陛下に於かせられても、六月一日を以て十數日來の御假床を拂はせ給ひ、宮中に於かせられても神祇宗祖を祭祀せられ、嚴肅なる御祝ひあらせられ給ふたことでありませう。村々家々祝勝會を擧げぬものもなく、路を歩むものも足も其の地に付きかねる有様で、途中で會ふもの寒むさ暄つさを云ふものなく、知る人も知らざる人も必ず萬歳を呼んで過ぎます。手あるものは舞ひ、足あるものは躍り、口あるものは謳ひ、耳あるものは聞いて笑み、眼あるものは見て喜ぶ、人々各狂せんとしました。否、一時全國民殆んど狂しました。斯の如き國家の大慶事に狂せざるものは國民の資格がありません。狂

せざらんと欲するも得ざらんやありませんか。

嗚呼この大勝こそは、波艦隊發航の報がありましてより、九ヶ月間我が五千萬の國民の頭上を壓した暗雲を吹き拂つて、吾が國運を前章の如き危急の場合より救ひ出し、泰山の安きに置いたものであります。我々は公報の出づる毎にその號外は幾度それを讀んだか知れませんか。讀んで數時間ならざるに又出しては讀み、同じ人に向つて幾度となく全じ喜びを述べ、又同じ人より幾度となく同じ喜びを聞きました。

一老婦があつて自分が開眼盲であることも忘れて、途上號外を買ひ、偶々過ぎ行く一學生に向ひ、

どうか一寸これを讀んで聞かせて下さい。

學生が大聲でそれを讀めば、途上忽ち人で一杯となりました。

又蕎麥屋の前で賣子の

海軍大勝利萬歳

の聲を聞いて、井を持つたまゝ飛び出して、半圓銀貨を投げ込み、二三枚の號外を掴み出し、釣り銭を探すのをおしやつて、

何んだ、釣りなど入るか、早くかけ出し一人でも早く見せてやれい。

又芝の某湯の前で、

海軍大勝利、捕虜

との賣聲を聞き、赤裸で飛び出した江戸兒がありました。湯の中で財布のある筈もないから、

江戸兒 號外く、萬歳く



と手を出せば、賣子も萬歳く〜で、これを掴ませて飛び出し、萬歳く〜の聲は一時都鄙に満ちました。

私も狂喜なす所を知らぬといふ有様で、

かちどきの聲うら〜に響きけり大和しまねもゆらぐばかりに

と詠みました。拙劣にはちがひありませんがその當時の實感であります。一生徒が覺えず起立、講堂の隅で大聲に

日本海軍萬歳!!!

と叫んだら、聴衆一同起立拍手、萬歳萬歳を唱へ、講堂も振ふ許りとなりました。その當時の状況を繰替す様で講師も満足致しました。此れが骨や皮を去つてなるべく御齒ざはり否御耳ざはりのない様にと、正味のみ申し上げたのですが、略ぼ日本海大海戦の巧妙なる作戦と、其の運用の靈妙なりし点を充分御了解が出来たこと、思ひます。が、此れでもまづいとおつしやれば、それは料理人たる講師の下手な罪です。

申すまでもなく日露戦争は未だ世界に認められざりし我が國運を、一舉にして世界強國となさしめたのみでなく、世界は白色人種の占有物で有色人種の及ぶ所ではないと、自ら諦めし印度・亞弗利加人種などに、未だ世界で其の國の存在すら知らざる人の多かりし我が國人が、立派に西歐の強露をして膝を我が軍門に屈せしめし故に、白人は驚嘆の眼を以てこれを見、有色人種に大なる自覺奮起を與へ、終に今日の人種獨立の氣運の先驅をなしました。此の日露戦争は實に世界氣運を一變したといふも誣言ではありません。此の勝利の中樞ともいふべきは。日本海の勝利によるのでありますから、諸君及び後來吾人の子孫たるものは、畏れ多くも 明治天皇陛下が、如何ばかり國家臣民の爲めに寢食をも安んせさ

せられず、御身を寢れさせられ給ふまで宸襟を惱ませ給ひしか、又一一般國民が此の戦争中如何に悲喜交々至つたかの感想の一斑を了らせられたこと、思ひます。是れを 陛下と當時の軍人に感謝せねばならぬ点で、此れは我々日本人のみではない、前條の如く東洋人、否、有色人種一般が感謝せねば濟まぬ所であらうと思ひます。印度人・亞弗利加人は已に大いに此れに醒覺してをるのに、只憤慨に堪へぬのは二億餘の民衆、五千年の文明を有する同文同種の支那人種が、我が日本に協力して外侮に當り、東洋をして興起せしむる手段を取らねばならぬ筈であるのに、多少の猜忌心や嫉妬心の爲めに此の大事を忘却し、紛乱衰頽に傾いてをるの、見るに堪へぬ所であります。長々御清聴下さつて、講師も満足致しました。先づ此れで此の講演を了ります。左様なら。



### 三たび悔を貼す勿れ

舊時を回想して寒心に勝ぬのは、海軍擴張案が議會に破れてから、數年ならざるに日露は戦端を開かねばならぬこととなり、日本海に於て敵の優勢艦隊に對して、國家の存亡を賭して雌雄を決せねばならぬこととなつた。存亡を賭するなどは能く使ふ辞であるが、此の時こそ二千五百年來、一度も遭遇せなんだ、掛値のない眞に國家の存亡に關する一戦であつたことは、今思ひ出しても冷々する位で、我が國民の腦裡より決して去る日はないことと思はれる。

私は未だ忘れ得ないが、明治廿七八年日清役の時、黄海の海戦にも、我が艦隊の勢力は北洋艦隊より非常に劣つてをつた。日清の風雲將に急ならんとする時吉野艦は落成して回航の途上にあつて、新嘉坡或は香港の中立港或は支那海で抑留せられはせぬかと、我が國民は暗に心配してをつた。それが無事横須賀軍港に着いたと聞いたときは、此の僅々四千噸足らずの、今では巡洋艦の最下級にも及ばぬものでも、非常に力強く思はれた。又實際戦功もあつた。

賢人は過を再びせずと、我が國家は愚人であつた。日露の間危期に迫り、警報頻りに至り、さあ俄かに心配になりだしたのは、第一に戦艦の不足であつた。當時我が國の幼稚なる造船力では、陸軍の如く急に補給する手段はなかつた。前に議會で熱心に反對した人も、此の時のみは心配になつたに相違ない。軍艦が此の有様であるから、警備艦・哨艦・偵察艦等の不備は甚しいもので、俄かに寸鐵も帯びない無甲装の商船に、僅少の舊式砲（廢

砲に近い）を乗せ、此等の任務に附かしむるの窮策を採つたものである。此れが艦長に任せられし人々は、平素より生命は國家に捧げ、危険は意に措かれなんでも、速力は鈍く操縦は意の如くならず、而してその任務を誤らざらんとするの苦心は、とても吾人の想像にも上らざる次第で、私は戦後信濃丸の艦長として、最先に敵艦を發見し戦期を誤らざらしめた成川大佐が、切齒落涙せられつゝ物語られた當時の苦心談を聞きて、覺えず血涙を飲んだ。

已に開戦に迫つた時か或は開戦後か、慥かなることは聞くことは出来なうだが、豫て南米智利國より、伊太利の某造船所に注文して將に落成せんとせし、姉妹の新式甲装巡洋艦があつた。巡洋艦とは云へ、その當時には戦艦に伍しても、甚しき遜色がない位であつた。此れを露國が手を廻して譲り受けるこの風評も傳はつたが、某國の斡旋で運能く我が國の手に入るこゝとなり、急ぎ艤装して廻航の途に上つた。此の時は已に戦争酣にして、其の航路には敵の同盟國たる佛領も多いし、廻航委員の苦心も察せられ、國民も亦一方ならず痛心したことは、吉野艦の比ではなかつた。

それが明治廿七年九月無事横須賀港に投錨した報を得た時は、如何許りか心強く、天祐を謝したことであつた。此の姉妹艦とは云ふまでもなく日進・春日である。其の高速力と新式の砲と、殊に強き俯仰角を存せしを以て、直ちに旅順の包圍戰に参加し、間接射撃を以て他艦の及ばぬ効力を現はした。當時我が海軍は初瀬・敷島の二大不幸があつた後で、此の二艦が如何に我が海軍の力となつたか。若し此の二艦が反對に露國の手に歸して、東航艦隊中にあつたと假定すれば、日本海々戦にまさか贏けはせなうであらうが、決して又あれほど立派な勝利は得られなうだかも知れない。



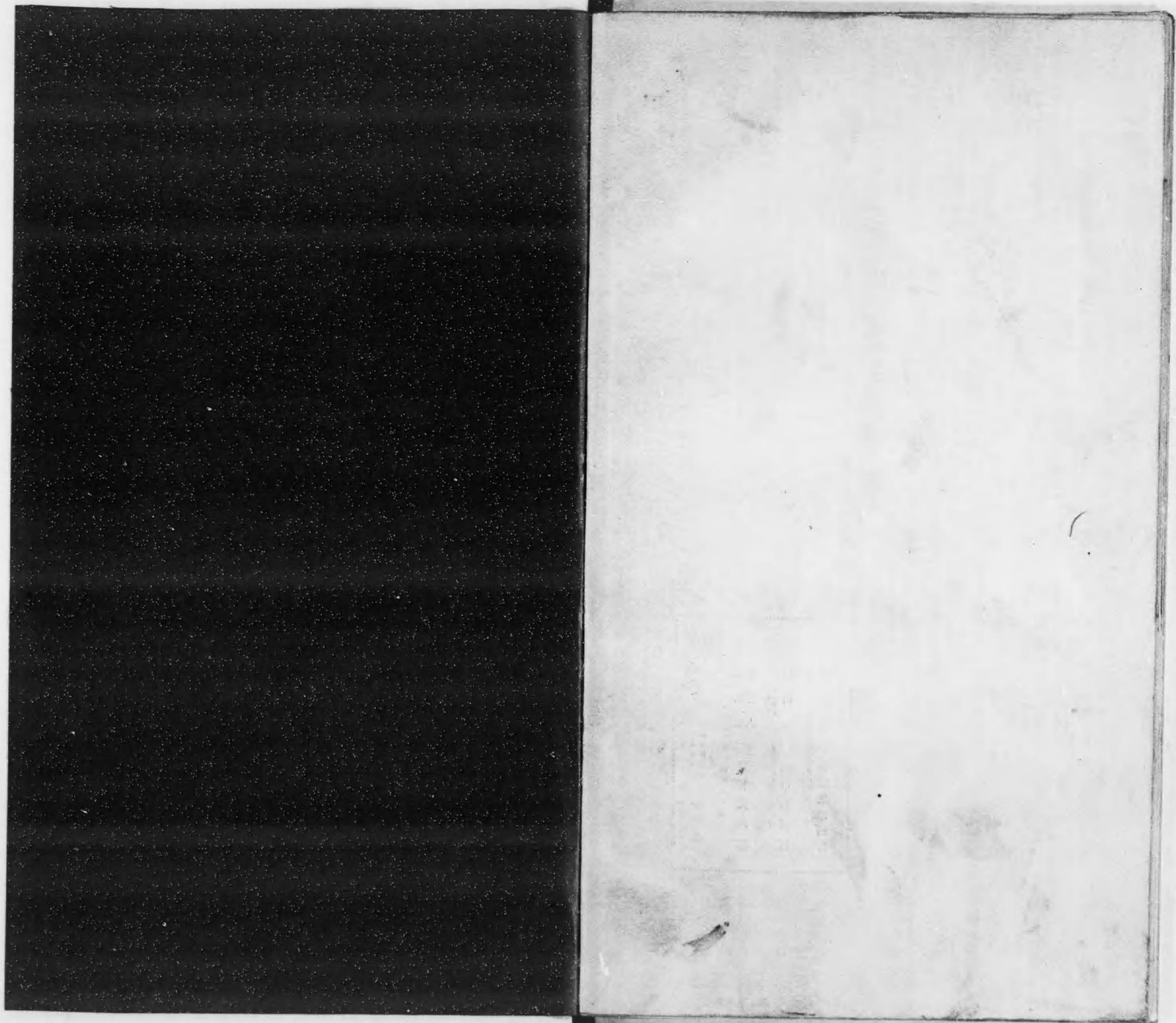
此の二艦の際どい時手に入つたも、戦時中無事に廻航したも、真に危機一髪であつた。國家として戦備は一日も忽にすることは出来ぬ、吾人は已に日清日露の兩役に、二度とも危い橋を渡つて居る、人事を盡さずして寝て居て神風や天祐のみを當にして居られぬ。世界の大勢に鑑みて、三たび臍を噛むの過ちに陥つてはならぬ。今や海軍制限の協定があるとはいへ、其の範圍に於ける舊艦の改造、補助艦の補充等決して一日も怠つてはなるまい。黄金より白銀よりも黒ふねの船こそ國の寶なりけれ

此の二艦の際どい時手に入つたも、戦時中無事に廻航したも、真に危機一髪であつた。國家として戦備は一日も忽にすることは出来ぬ、吾人は已に日清日露の兩役に、二度とも危い橋を渡つて居る、人事を盡さずして寝て居て神風や天祐のみを當にして居られぬ。世界の大勢に鑑みて、三たび臍を噛むの過ちに陥つてはならぬ。今や海軍制限の協定があるとはいへ、其の範圍に於ける舊艦の改造、補助艦の補充等決して一日も怠つてはなるまい。黄金より白銀よりも黒ふねの船こそ國の寶なりけれ

大正十五年八月十五日印刷  
大正十五年八月二十日發行  
非賣品  
愛知縣蒲郡町大字東澤六ノ九  
編輯人 美甘光太郎  
愛知縣刈谷町大字刈谷字下町三番地  
印刷人 田中啓三郎  
愛知縣刈谷町大字刈谷字下町三番地  
印刷所 金活版印刷所

(製復許不)







524  
326



終